

ウルトラ怪獣ゼットン ヒーロー化計画

ミッチャール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある場所にウルトラ怪獣擬人化計画のゼットンさんと瓜二つの女性が居た。
その女性はとある存在を庇い命を落としてしまう。

落とした後に目が覚めるとヒロアカ世界に転生してしまつて・・・

ウルトラマン世界→現実世界→ヒロアカ世界と言う良く分からぬ順番で転生を繰
り返してしまい、更には何故か初代ハイパーゼットンの力を受け継いでしまつた初代
ゼットンがヒーローになるべく頑張つてヒロアカ世界を生き抜く物語である。

因みに個性は、『宇宙恐竜』で姿はウルトラ怪獣擬人化計画のゼットンさんそのもの
で、フリーザ様見たいに変身することも出きる。

<https://twitter.com/kinkuri/status/992011048801583106?si=09>

通常時イメージ→

<https://www.pixiv.net/artworks/6288167>

2

バイバーゼットン時イメージ→

2021年2月20日から追記した物まとめ。

①

オールマイト：オリジンに博麗靈夢の説明を追記。

②

気になつて調べてみたら、大怪獣バトル ウルトラ銀河伝説 THE MOVIE：
2009年12月12日公開、ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリ
アル銀河帝国：2010年12月23日公開だったので転入生は宇宙恐竜に追記。

目次

34

第1章：宇宙恐竜は小学生

設定

オール・フォー・ワン保有個性

1

外伝

外伝・メタセト、魔王に捕まり現実逃避

10

閑話

閑話：とある管理者の昔話リメイク

14

閑話：とあるメトロン星人の昔話

26

閑話：とあるゼットン星人の昔話

宇宙恐竜ヒロアカ世界に現る

—

転入生は宇宙恐竜

—

蛇足：転生秘話

—

回想＆過去編1：宇宙恐竜と炎魔戦士

—

前半

—

回想＆過去編1：宇宙恐竜と炎魔戦士

—

中編

—

回想＆過去編1：宇宙恐竜と炎魔戦士

—

後編

—

オールマイト：オリジン

—

回想＆過去編2：平和の象徴と宇宙恐

—

100 132

92

す

竜前編

回想&過去編2：平和の象徴と宇宙恐

竜後編

滅火羽織：オリジン

回想&過去編3：英雄とは前編

193

186 165

147

回想&過去編3：英雄とは後編

220

242

悪党達の決闘

設定

オール・フォー・ワン保有個性

① 個性：オール・フォー・ワン
A F O 本来の個性。

他者から個性を奪い自分の物にし、それを他者に与える事も任意にできる個性。
奪つて自分の中に収めた個性を自由自在に管理出来き、更に複数の個性を組み合わせて同時に発現させる事も可能。

② U N J U S T I C E—不正義—

個性は対象者の正義を否定する個性。

個性の発動条件は「対象を見る」「頭部を見せる」「声を聞かせる」

アンデッドアンラックに登場するジエイクの能力ではあるが、正確に言うのならばそれによく似たもしくは限りなく近い個性。効果はジエイクと同じではあるが彼女よりも発動条件が緩く A F O の U N J U S T I C E—不正義—は対象・範囲・距離・効力の強弱を調整出来る。……しかし、彼女と違い対象が強力な意思を持つていた場合は無効化される可能性がある。

③個性：UNDERTAKER—不死—

自分を死に近づけるありとあらゆるもの（例：年を取る事・怪我・即死攻撃等）を否定する個性。

再生にはA·F·Oのオール・フォー・ワンのイメージが重要で、イメージ出来ないと再生不能になつてしまふか再生能力が落ちてしまう。

他には再生のタイミング・スピードはコントロール可能（特定成分の集中生成も可能）・外見の年齢は制御可能。

因みにA·F·O外見年齢操作以外あまり使つておらず、理由は自分の信条に相反するかららしい。彼は死ぬ時は死ぬと考えている（ぶつちやけると原作のA·F·O以上に修羅場くぐり抜けているから達観しているとも言える）し、個性が発動する前から認めた相手とは正々堂々と戦うを好んでるので無粋とすら考えている。その為いざといふ時しか使用しない・・・そこをオールマイトに付かれ梅干しになつた（尚今作のA·F·Oは他者の価値観や正義を理解し尊重しているので原作に比べてオールマイトを恨んではいないが、リベンジしたいと考えているらしい）。

④個性：UNCHANGED—不变—

素手もしくは素足で触れる事で物体の変化を強制的に封じる個性。

他にも固定した空気を操り不可視のバリアを発現させていかなる攻撃も防ぐ事も出

来て、また空気の「形」を固定して任意の状態にして操る事も出来る。

⑤個性：重力操作（グラビティコントロール）

この個性の基本的な戦い方は相手を重力で押し潰す、重力玉を投る等。また逆に重力軽くして自分を浮かせる、反発力で超スピードを出すと言う応用も可能。
重力を圧縮してブラックホールを作り出す事も可能。そして、引力の強さや発生させる規模等自由自在に制御出来る（尚制御するには十分なイメージと計算等を一瞬で行う才能がなければ不可能）因みにA F Oはごみ捨てや廃棄処分に困った際に多用している模様。

⑥個性：レーダー＆マッピング

この個性は特殊で他者には探知不可能な電波を発射して遠方にある物体を探知、そこまでの距離と方位を測ることが出来て、他にも自分がいる場所の地形とそこに居る存在が分かる。

尚且つスキヤンした人物や地形はA F Oの記憶と知識に該当する物があつたら自動的に浮かび上がつて来る様になつており、A F Oの記憶または記録した存在がこの個性の範囲に来たら自動的に発見される。

しかも、ちゃんとA F Oが意識しなくとも記録され必要な時に何時でも思い出せる親切仕様となつてゐる。恐らくオール・フォー・ワンが把握していないだけでコレも混

ざつた結果生まれた個性の可能性あり。。

(7)個性：念話^{マジック}＆超高速思考^{クトーク}

超常スピードでの思考が可能で、上げようと思えば思考を光速まであげる事が出来る
尚デメリットは存在しないらしく、いくら使つてもノーリスクなOAFO^{オール・フォー・ワン}は長い時間思考や考え方をしたい時に良く使用しているらしい。

念話を繋げる対象が初めてだつた場合は視界に入つてている事が条件で、伝えたいイメージを相手に念話を使つて伝える事も出来る。

相手との念話に超高速思考を使う事も可能。

その他にも親しいと感じた存在をフレンドリストに登録し、対象がレーダー＆マッピングの範囲内に居る場合は無条件で繋げる事が出来る 読心は出来ない模様。

(8)個性：不死鳥^{ふしちょう}

個性：高速再生 設定としては個性：超再生を持つていた人物の先祖が所有していた個性。と個性：火の鳥^{ファイヤーバード}早い話がウソツプの火の鳥星^{ファイヤーバードスター}。個性：炎操作・・・この3つの個性が博麗靈夢と伊吹萃香がこの世界に疑似英靈として現れた時に影響されて混ざつて発現してしまつた個性。

個性としての効果は藤原妹紅が使う炎を操る能力 本来は彼女が長年の人生で習得した自前の妖術なので厳密に言えば能力では無い。と蓬萊の薬^{ほうらいのくすり} 飲む事で魂が永遠の

力を持ち、不老不死になれる八意永琳^{やごころえいりん}が作り出した薬・・・厳密に言うと肉体的には幾らでも死ぬが、魂が無事なら瞬間に体を再構築する事が可能。

その再生力は髪の毛一本残つていればそこから元通りになる。の再生能力が合わさつた形なので超高温な炎を操る事が可能である・・・しかし藤原妹紅^{ふじわらのもこう}を始めとした蓬萊人^{ほうらいじん}蓬萊の薬^{ほうらいのくすり}を服用した人物達の総称。達と違ひ魂からの復活は不可能・・・尚肉体が完全崩壊してしまつた場合は死亡した世界か異世界かを選んで転生する事が出来る（恐らくしでの鳥 不死鳥^{ふしちょう}の一種に數えられる怪異^{かいい}の一體）。

その特性は死がない事なのだが厳密には年を取り最終的には死んでしまう（その為不死であつて不老ではない）。

怪異^{かいい}としての本質は人間の母胎にとり憑き、人間として生まれ、寿命まで生き続け、そして死に、また同じように転生する・・・人間を対象とした所謂托卵^{たくらん}と言える行為をする怪異^{かいい}。

その性質上不死鳥^{ふしちょう}の一体として扱われている（諸説あり）。の特性かと思われる）のだがA F Oはこれを把握していない、と言うかするつもりが無い U N D E A D — 不死

⑨個性：ドラッグクッキング

触れた食べ物を任意の薬に変えられる個性。

自分が触れたあらゆる食べ物を触れた瞬間に誤差なく変化させる事が出来る　しかし、成分や調合について完全に理解していなければ変化させる事は不可能と言う欠点も存在する。・・・尚食べ物の味や触感を残したまま薬に変えられるので使い勝手は悪い。

⑩個性：並列存在

個性：並列存在の効果は完全に自分の意識を分割させた存在を創り出すと言うもので、強さも本体と同じ強さである。

^{オール・フォー・ワン}A_FOの場合は別の姿があれば複数の並列存在を出す事が出来る他に本体とも分離可能で、別存在として確率可能な正しくチートな個性・・・その代わり本体に依存していく、本体との繋がりを断ち切られたら忽ち消滅してしまい、分離させるとしても本体の大幅な消耗が必要と代償が大きい。

しかし代償が大きい分効果は絶大で、^{オール・フォー・ワン}A_FOが保有している個性を全て使用可だが、分離した場合は当時保有している個性しか使えない。

他には分離した存在が死亡した場合本体に全ての記憶と情報が引き継がれるが、こと技術に関しては本体自身が鍛えなければならない。

⑪個性：救恤之王

エネルギーを自在に操作する個性。

熱を操る事で自身の運動量を強制的に増幅しそれを応用して加速させたり、対象の生命活動を加速させる事で、触れた相手のエネルギー暴走を引き起こす等ありとあらゆるエネルギーを自在に操る事が出来る個性。

具体的には脳内情報を加速させ熱暴走を引き起こしたり、炎の熱量を極大に増幅し数万度という灼熱の溶岩の牢獄を作り出す事が可能。

⑫個性：遺伝子操作
テラーフィールド

遺伝子を司る個性。

その効果は有機物や無機物等多くの遺伝子を組み換え別の物体に変化させる事が可能で、有機物を遺伝子組み換えをして姿形を自由自在に変化させる事が出来る。

他にも個性因子同士を混ぜ合わせて全く新しい個性を作り出し、個性でない物をから個性因子を創造する事も出来る。更に血液から個性因子を複製する事も可能である。

⑬個性：恐怖
テラーフィールド

恐怖を司る個性。

恐怖のエネルギーである黒い精神干渉波テラークラウドを用いて、周囲にどす黒い粘液状の精神空間テラーフィールドを発生させる。

テラーフィールドは効果範囲内の対象に激しい恐怖心を煽る効果があり、相手の強さ

とは無関係に対象を恐怖心で染めて発狂・無力化させてしまう。

このテラーフィールドは効果範囲内の対象に激しい恐怖心を煽る効果があり、これにより相手を精神的に自滅させ、やがては発狂死にまで追い込む事が可能である。またテラーフィールドを発生させるとも視線を合わせる、自分を認識させる等でも対象に恐怖を与える事が出来る。

他にも自身や任意の対象を液状化したかのように吸収して移動させ、敵の飛び道具に対する防御壁にもなる。

⑭ 個性：天候 （ウエザー）

天候を司る個性。

天候の名の通り冷凍ガス・濃霧・竜巻・灼熱弾・落雷・黒雲・降雨・蜃気楼・集中豪雨・虹など様々な気象の操作および増幅を用いた多彩な攻撃手段を持つ個性。

霧で姿を消す、超局所的豪雨で動きを止めたり溺れさせる、雨を一箇所に集中させて相手を覆い隠し溺死させる、虹のような光線を発射する、手から高い温度の熱を出し、相手の体の全体に熱を送る等多彩な攻撃手段を持つ個性。他にも蜃気楼による幻影で攻撃を誘導する事が可能で、防御にも優れている。

⑮ 個性：分解 & 修復 （オーバーホール）

対象を分解・修復する個性。

対象物を一度分解して瞬時に修復する、更には破壊した物同士を融合させる事も可能で、個性の影響範囲末端までタイムラグがあるものの人体程度のサイズの物体なら一瞬で分解する事が出来る。

他に地面や壁を攻撃的に成型し直す、果ては死後間もない生物の蘇生等多彩な性能を誇る。

更には他者の肉体を自分へ同時に分解＆修復を行う事で対象と混ざり合い、二つの性質を持つ存在になる事が可能な正に神の如き力を持つ個性。

⑯個性：全知全能ジ・オーラルマイティ

個性の枠を超えた、神が如き力を持つ個性。

起こり得る全ての未来を見通し、その結果に干渉し更に改変する効果カを持ち、この個性所有者が認識した全ての未来を改変し、倒されると言う未来そのもの無くす事すら出来る。

未来を見て、認識し、書き換えるのはあくまで自身の意識上の事である為、個性：
全知全能所有者が夢と未来を取り違えると起こりうる未来への干渉・改変に失敗する事がある為対策する事は一応可能である。．．．可能ではあるがそれはユーハバッハが相手の場合であり、A-F-Oでは対策をちゃんとしている為効果がないと思われる。。

外伝

外伝：メタセト、魔王に捕まり現実逃避す

私はメトロン星人メタセトだつた者。

”私はもはや私では無く全く新しい私になつたのだから。

・・・では改めて、はじめて観測者諸君。

私の名は阿久論姫。あくろんひめ

とある人間の血を通貨としてその存在の全姿形、記憶、知識てを手に入れた存在だ・・・もつとも魂は天に召される様に仕向けたがね。

さて私と言う存在をさらに詳しく述べるならば以下の通りとなるだろう。

1

ウルトラセブン第8話『狙われた街』とウルトラマンマックス第24話『狙われない街』に登場するメトロン星人本人である。

2

本来はM78宇宙出身だがウルトラセブンに敗れた際、後にウルトラマンマックスが降臨する宇宙に飛ばされ心優しき地球人によつて助けられ、昔ながらのヤクザに戦いを

挑み敗北。

3

その後とある老婆に恋をし、彼女の意思で血を通貨としてその存在の全てを手にした元メトロン星人。

と言つた所か。

・・・ククク、我ながらなんてざまだ。

この姿を我が同胞や異次元人が見たら何と言うか？

この私を侮辱するか？ならば殺そう。

疑問を持つか？ならば人間の、この私素晴らしさを教えよう。

私を手に入れようとすると？残念ながら私は既に自分の奴隸であり犬だ。

そう言えば久しく会つていない我が盟友ゼットン星人工ドは今の私を見て何と言うだろうか。

・・・いや、あいつは私以上にぶつ飛んだ事を仕出かすだろうな ゼットン星人の先祖返りした超能力者だったがぶつ飛んだ事した為に力が弱まつた。

自らの恩人にして主たる存在、恋と言う言葉の意味を教えてくれた男性と更に仲良くなる為に自らの意思で自分の姿形を仮面ライダーみたい改造し、自由自在に変身できるようにした。

姿形、記憶、知識

尚DNAや血液にも手を付けた為魂も変異しているし、人間の子供を孕む事も出来る。

あのニヤルラトホテプですら呆れたていた程の大天才兼大馬鹿者だからな。

そう言えばあの腐れ縁の大天才が言つていた最高の主とは何者なんだろう？

ニヤルラトホテプの統治局 多元宇宙論や別次元世界等に存在する全ての無貌の神が持つ全ての貌を束ねる存在。

名が必要な場合は手取てとりやナイア、アルベイン・ベトート等を好んでよく名乗る。に聞いてみても嫌な顔して、『・・・実在する英雄を愉快な創作神話にするのが得意な人物とでもしておきましょかね』

何て言つてたつけな。

果たしてそんな事可能なのだろうか？

もし可能だとしたら一つの世界を核とした幾千幾万の平行世界の集合体である宇宙だけでどうにか出来るのは到底思えないし、多元宇宙論全体の問題だ。

それをどうやって攻略したのだろうか？・・・まあ今考えていても仕方がないか。

今は目の前の問題について考え――

「やっぱり！君はあのメトロン星人本人なのか！サインを下さい、異能なり何なり何でもあげるから！」

13 外伝：メタセト、魔王に捕まり現実逃避す

・・・この不審者から逃げたい。

閑話

閑話：とある管理者の昔話リメイク

絶対的正義など存在しない。

いきなり過ぎたかな？・・・まあ、少し年寄りの話に付き合って欲しい。
さて、何故絶対的正義が存在しないと思つているかと言うと唯一絶対の正義が無いからだ。

善の敵は悪。

悪とは自らの私利私欲の為に他者を虐げ或いは殺害する事で、現在では国が定めた法律を守らず私利私欲の為に個性を使用する敵の事を指すだろう。

善とは他者を救う事だ。例えば法律の守護者足る警察官や自衛官、人類の発展の為に貢献し、偉大な功績を残した研究者。現代ではヒーロー資格を持つプロヒーローがそれに当たるだろう。

では正義の敵は何なのだろうか？

正義の敵はまた別の正義だと僕は考へていてる。

何故なら人によつて正義が違うからだ。何言つてゐるのか分からぬと言う人もい

るかもしれないが、生い立ち或いは環境によつて人間の内面無いし人格は形成される。

例え同じ環境同じ生活をしたとしても同一の考え方、感想など出てこないだろう。

それは正義にも言える事だ。

これは正しいこれは間違つてゐる、これは許せるこれは許せない・・・突き詰めていけばこんなもの好き嫌いの延長線上でしかない。

それが分からずに自分は正義の味方だと胸を張つて分かりやすい悪である敵を倒していく。プロヒーロー達は本当にどうかと思う。

ヒーロー制度は国が作つた法律だ。それがある国は一種の舞台、一般市民はそれを見ている観客、ヒーロー制度でヒーローだと認められていてるプロヒーローや国の法律を破つた悪は演者だと言える・・・逆に言えばヒーロー制度や法律が無ければプロヒーロー側は正義では無くなる訳だ。

・・・くだらない。そんな物が無ければ正義を主張出来ないなんて、つまらない時代になつたものだ。

今の政治家共は個性が存在しない時代は地獄絵図と言えるかも知れないと言つていたが、実際は違う。

僕の師であるサー・ナイトメアやルパン三世、僕等を始めとした昔の悪党達は何事もバレずに確実に成功させる為にありとあらゆる策を練り、生存競争をするのがが当たり

前だつた・・・その規模は僕が法の番人にして正義の味方である警察と共に闘する事が結構あつたくらいにヤバかつた。

だが幾らアンブレラや他の秘密結社が起^こしたバイオテロを解決しようが、悪党の目論見を叩き潰^{つぶ}そうが、周りに合わせる事が出来なければ例え英雄^{ひょうぎやう}だろうが追い出される。

この超人社会と呼ばれる現代でこうなのだから昔も更に酷かつた。しかし、だからと言つてやめる訳にはいかなかつたのさ・・・『個性^{こせい}』だ、個性の多様性だ何だと個人主義を謳つっていても結局は管理社会だから合わない個は排斥される。

これはどの様な『^{集まり}主義』でも例外は無い。民主主義だろうが社会主義だろうが根本本質は同じ社会以前の問題、群生生命の原則だ。

だからこそヒーロー制度^{おままでごと}と言うプロヒーロー免許を持つ存在だけが個性使用を許可されて、それ以外が許されないと^己言う歪で不完全な社会が出来上がつたと言える——諦めが人を殺す。諦めを拒絶した時、人間^己初めて新たな道を切り開く権利が与えられると言つてもいい。

時々それに気付き、僕に立ち向かつてくるヒーロー達や道化だと氣付いてその道を引退した者を見るのもまた乙な物だ、その中でも特にレディ・ナガンは格別だった。
彼女は個性：ライフルの持ち主だ。

ただの愚者

右肘からライフルを展開して二色の毛髪をエポキシパテの様に混ぜて練り上げる事で硬化させる事によつて打ち出す弾丸を作り出す事が出来る。

更に作り出せる弾丸の種類も豊富で曲がる弾からホロー・ポイント弾等様々な状況に対応可能で、更に髪をスコープの様にする事が出来るなど大変素晴らしい個性だ！…まあ要らないけど。

その理由が彼女の卓越した射撃の腕前で、3km離れた場所でも標的を狙うことも出来ると言う…正にこの個性は彼女以外使いこなす者無しと言える。

そんな彼女のどこを気に入っているのかと言うと彼女は今現在表向きは同業者であるプロヒーローを殺害した罪で今現在死刑すら生温い重犯罪者を投獄する対個性最高警備特殊拘置…通称タルタロスたいこせいさいこうけいびとくしうこうちじょ。対個性最高警備特殊拘置所通称「タルタロス」。

本土から約5km離れた沖に建造された収容施設。便宜上拘置所とされているが、実態は国民の安全を著しく脅かす、または脅かした人物を厳重に禁固し監視下に置くものであり、刑の確定・未確定を問わず様々な個性の持ち主が収容されている。

居房は6つに区分されており、個性の危険性や事件の重大性によつて振り分けられている。危険性の高い人物程、地下深くに収監される。

一度はいれば生きて出ることは叶わないといわれており、個性社会の闇とも呼ばれている。と呼ぶべき監獄に収監されている。

まあ、僕の発言から察せられると思うけど真相はそうじや無くて・・・彼女は元公安直轄のプロヒーローで言わば個性社会のゴミもしくは汚れを掃除する暗部と言える仕事をしていた存在で長年その仕事を続けて個性社会の闇を見続けた結果絶望し、当時保安のリーダーを努めていた人物を殺害してタルタロスに収監された。

何、暗部がなぜ必要なのかって？

答えは人間は欲深く罪深い生き物だからさ。欲しい物の為に他者を傷つけもしくは殺す、そして間違いを延々と繰り返す・・・そういうのは聞いていない？ああ、そう。

先程僕は歪で不完全な社会が出来上がつたと言つたがそれが答えだ。

まだ個性が「異能」と呼ばれた時代——超常黎明期に異能の自由行使は人間として当然の権利と謳つた解放主義者達によつて結成された異能解放軍の初代指導者デストロ——本名は確か四ツ橋主税だつたかな。

もう200年以上前の話で法整備を進める日本国政府との数年にも及ぶ対立の末に敗北し、指導者デストロを含めた多くのメンバーが逮捕さると言う事件が起つたことがある。

その後デストロは獄中で自らの思想や活動を記した自伝『異能解放戦線』いのうかいほうせんせんを出版した後に自決した為に表向きは解体されたと思われているのだが・・・真相はどうだろうねえ。

まあ、何故このテロリスト集団の事を話題に出したのかと言うと彼らの答えが正しかつたからに他ならない。

確かに当時だと博打以外の何物でも無いと言えるけれども最終的には今よりも良くなっていた可能性が高い。

今現在の個性抑圧社会では色々な限界点が多数見られる。勿論タルタロスもその一つ。部外者である僕ですらこれだけ分かるのだから内側からだと相当広い範囲見えているのでは無いだろうか？・・・それこそ暗部を作っているくらいだからね。

しかし、四ツ橋主税！彼の登場は100年ほど過ぎたね。

何故かと言うと昔からの悪党達がこんな好機を逃す訳も無く、暗躍として個性を使用とする者達が結構居たんだ。勿論ヤプールもその一人でね。それ等を纏めて相手にする事は平時なら兎も角当時の日本国では不可能と言つても良い状況だった。

だからこそヒーロー制度と言う物が出来たのだが・・・今となつてはどちらが良いのか僕でも分からぬかな。

さて正義についての話はさておき・・・では、ヒーローとは何なのだろうか？

これまで考え方の違い、正義とは何か、個性抑圧社会の問題点と色々な自論を展開したけれども、各個人が抱くヒーロー像を全て多くの者達の中で違うと思う。

僕にとつてのヒーローは初代ウルトラマンだ。

・・・意外だつて？おいおい、さすがの僕も少年時代では何処にでも居る善良な少年だつたんだ、良いだろう？

光の国からぼくらのために きたぞわれらのウルトラマン。

子供の頃このオープニングを見て心躍り、よく口ずさんでいたもんだ（今でもたまに口ずさむ）。

そんな彼のプロフィールや解説は以下の通り。

データ

身長：40m

体重：3万5千t

ジャンプ力：800m

走行速度：時速450km

飛行速度：マツハ5

水中速度：200ノット

地球上活動時間：約3分間

出身地：M78星雲・光の国

年齢：約2万歳

人間体：ハヤタ・シン

彼は強かつた・・・本当に強かつたんだ!!

恐るべき侵略者や如何なる怪獣を前にして自慢の技や技術で叩きのめして見事勝利を勝ち取る姿には惚れ惚れしたね！

当初は巨大怪獣との戦闘経験等のノウハウが蓄積していなかつたからか、スタイルツシュな蹴りや打撃は意外と使用せずに寝技・投げ技など柔道的な技を中心とした非常に泥臭い戦いを繰り広げていて、単なる投げ技で相手を倒した事が意外と多かつた。

敵の弱点をつぶさに観察し、怪獣の特徴的な部分や弱点となる部位を瞬時に見抜き集中して破壊すると言う戦法が得意だつたり、様々な怪獣に応じた多数の戦術を瞬時に行えるクレバーさも彼の強みの一つ・・・正に「怪獣退治の専門家」と言える存在だろう。

そんな栄光の初代ウルトラマンと互角以上に渡り合つた宇宙人も存在したんだ。

『さて、サトル君。私はメフィラス星からこの地球を見ているうちに、地球とサトル君がどうしても欲しくなつたんだよ。でも、私は暴力は嫌いでね。私の星でも紳士というのは礼儀正しいものだ。力ずくで地球を奪うのは私のルールに反するんだ。そこで地球人であるサトル君に了解をもらいたいと思うんだ。サトル君は素晴らしい地球人だ。どうだね？この私にたつた一言、「地球をあなたにあげましよう」と言つてくれないかね？』

『地球のように戦争もなく、交通事故もなく、何百年何千年と生きていいける。天国のよう

な星が幾つもある。どうだねサトル君？地球なんかさらりと捨てて、そういう星の人間になりたくはないかね？宇宙は無限に広くしかも素晴らしい』

悪質宇宙人メフィラス星人。

身長：2メートル

体重：40～2万トン

出身地：メフィラス星

武器・能力：グリップビーム、反重力、金縛り、飛行能力

そんな彼の戦闘能力は初代ウルトラマンに登場した敵の中ですば抜けて高く、ウルトラマンとほぼ互角の戦闘能力を持つた強敵だった。

その実績は初代ウルトラマンとの格闘等の地上戦や光線技等の空中戦・・・全て終始互角（あえて言うならメフィラス星人が勝っていた様に見えた）だったほどさ！。

最終的にはメフィラス星人は拳を握つて突き出した片腕から放つ必殺光線グリップビーム、初代ウルトラマンはスペシウム光線をお互い打ち合う準備をした後にメフィラス星人は構えを解き、

『よそう、ウルトラマン。宇宙人同士が戦つてもしようが無い。私が欲しいのは地球の心だつた・・・だが、私は負けた子供にすら負けてしまった。しかし、私は諦めたわけではない。いつか私に地球を売り渡す人間が必ずいるはずだ。必ず来るぞ！ぶわつ

はつはつはつ！』

その言葉を最後に彼は地球から去った。

これを見て当時の弟や友人達は「ウルトラマンに勝てないと思つたから逃げ帰つた」と盛り上がつていたが・・・僕は『私が欲しいのは地球の心だつた』と言う言葉が示す通り「地球人の心に勝負を挑み、結果敗北してそれを認めて撤退したかつこいい行為』だと考えてしまつた。

何故？と当時は思つたが初代ウルトラマン最終回さらばウルトラマンでその理由が分かつた・・・初代ウルトラマンが敗北すると言う結果でね。

初代ウルトラマンがその怪獣の動きを止める為に金縛り光線を発射したが、それはいつも簡単にそれを打ち破り、瞬間移動で初代ウルトラマンを翻弄し八つ裂き光輪をバリアで防ぐも・・・ウルトラマンのあらゆる攻撃は全く寄せ付けず初代ウルトラマンは格闘戦でもその存在に敵わず追いつめられてしまう。

起死回生に放つたスペシウム光線も吸收され、逆に増幅されてカラータイマー目掛けで反射されて、その光線の直撃を受け・・・それの手によつて初代ウルトラマンは敗北した。

僕のヒーローである初代ウルトラマンを倒してしまつた——ゼットンについて解説しよう。

別名：宇宙恐竜 うちゅうきふりゆう

身長：60メートル

体重：3万トン

主な能力：一兆度の火球、テレポート、バリア、光線吸収、波状光線等（個体によつて差異あり）

見た目は真っ黒な甲冑のような身体と雄牛のような2本の角が特徴で、背中にはゴマダラカミキリをモチーフにした甲羅を持つ。凹凸状の顔には点滅する発光体があるだけで目や鼻と明確にうかがえる意匠はなく、頭頂に生えている折れ曲がった2本の角が目や鼻の代わりとなっている。

ゼットンに初代ウルトラマンが倒されてしまつた時僕の愚かで可愛い弟は泣いていたし、その他の友人も泣いてのいたが・・・僕は高揚感に包まれてしまった。

・・・勘違いしないでもらいたいが僕はウルトラマンを嫌いになつた訳では無い寧ろその逆であり、その後に続くシリーズも大好きだ。

では何故高揚したかと言うとあのウルトラマンでさえ倒される事がある――絶対的正義など存在しないと言う事を感じ取つたからだ。
かと言つてウルトラマンを倒したいとかでは無く、彼等に倒された侵略者達が成し遂げられなかつた事を成し遂げてみたいと感じる様になつた。

僕が悪に惹かれて行つた原因でもあり、正義や信念を肯定している原因は正しくこの作品だの言つても良い。

これ以上はまた今度、それでは御機嫌よう。

閑話：とあるメトロン星人の昔話

私はメトロン星人。

と言つても、我が故郷にもう久しく行つていない。

私は宇宙の彼方にある紅い星メトロン星から地球に侵入した宇宙人だ。自分で言うのも何だが狡猾な戦略で人間同士の信頼関係を壊し、地球を手に入れんとした。

当時は地球上では北川町のある安アパートを拠点として黒スースツの人間男性に変身して駅前の自動販売機に後述のたばこを補充するなど、暗躍していた。

具体的には北川町の駅前に吸つた人間を凶暴化（周囲が全て敵に見え、見境なしに襲い掛かる殺人鬼と化す）させる宇宙芥子の実を混入したタバコの入った自販機を置き、地球人類を自滅させようと目論んだ。ただしこれについては同胞は「実験」と述べており、地球人に効果があるか調べるためにやつた事だとしたが・・・私は本当に地球を欲していた。

それは何故か？

・・・美しいと感じたからだ、青きこの地球が。だからこそ私はこの星を侵略せんと暗躍し人間に企みがバレ、ウルトラセブンに真つ二つに切り裂かれ敗北。

正直死んだと思つた。

我々宇宙人はなかなか死なないが、真つ二つにされてしまつてはもう生き残る可能性は無いに等しい。

だが優しい地球人の少年に助けられ、一刀両断された部分は着ぐるみの修繕の要領で治療されて一命を取りとめて瀕死の重症から復活した私は、普段は円谷プロの怪獣倉庫（着ぐるみ倉庫）に潜伏している。そこで私は人間として五十年過ごした。

その内私はとある事に気付た。どうやら私は別の宇宙にやつて来た様だつた。聞いた事もない防衛軍、聞いたこともない地名、旅した時にあつた聞いた事もない地底人達（この不思議な人物達とは友好的な関係を築けた）。

・・・その事についてあまり気にしなかつた。

可笑しいだと？いや、そうでも無かろうよ。

非常識とは我々の考えの及ばない事を非常識だと言うのだから、非常識に限りなど無いのだ・・・まあ何にでも限度はあつて欲しいと思うがね。

とにかく私は五十年前にまた暗躍し、案の定またウルトラセブン・・・ではなく人間に達に邪魔された。

邪魔したのは日本に昔から存在していたヤクザ共に邪魔されたのだ。
彼等は言つたよ、

『何故こんな事をするのか?』

とね。

そこで私はこう答えた、

『私は何故ここに来たのか分からぬ。しかし、私はこの美しい星が欲しいと感じたのだ。青いこの星が』

『では何故人間に危害を加える?』

『この星の靈長類は君達人間だろう?...なんだ? ああ、靈長類と言う言葉が分からぬのか。靈長類とはその星の生命体の頂点に立っている生物の事だ。ならば、先ず初めに人間を支配しなくてはな』

『お前は人間を美しいと言うのか?』

『? 全体はどうか知らないが、悪い者は悪い、良い者は良い。善が悪をなす事もあれば、惡が善をなす事もある。そう言う者だと考へてゐるが、どうだ?』

『人間をどう思つてゐる?』

『?』

『? 分からぬいか、なら人間としてこの星で生きてみてはどうだ? この星を綺麗だと、美しいだと考へてゐるのならばコレで答えを得られると思うぞ』

『? 何を言いたいのか分からぬが、まあそう言うのも悪くない。私はどうせ故郷へ

の帰り方が分からぬからな』

・・・今、思えばコレは間違つた答えだと感じている。
人間が嫌いになつたと言う事では無い。

むしろ好きになつた。私を新たなる従業員として受け入れてくれた喫茶店の年老いた店主、気の良い常連客、ご近所さんとして野菜をくれた実家に農家を構えている両親を持つてゐる男、いつも通学路を通る時に挨拶をしてくれる小学生達・・・本当に良かつたよ、ここ的生活は。本当に良かつた。

しかし光もあれば闇もあるのが世の中で、ある日喫茶店の店主が倒れ長期入院する羽目になつた。それは問題ないのだ命に別状は無かつたからだ。

しかし、予断を許さない状況なのは間違いない。

・・・だが、事態はここから最悪な事が起つた。

それは喫茶店の土地が大家の手によつて売りに出され取り壊される事となつた。

何でも年寄りより若い者達の方が金払いが良くて都合が良いだとか。

そして老人の答えを待つこと無くそこは取り壊され、その最期までまた喫茶店で仕事をする時に出す、今思い付いた珈琲のレシピについて話していた。

それを笑つた看護師や医者なんかを見たな。何でもボケた愚かな年寄りだとか。

私はこの老人をバカにした存在を皆殺しにしようとしたよ。

いざ行動に移そうとすると、

『ダメよ、メタセトちゃん。うんん、宇宙人さん』

コレには驚かされた……何て思わなかつた。長い付き合いだつたし、彼女は言葉にしなくてもある程度人の考えている事が分かる不思議な人物だつたからと言うのもある。

『……分かつっていたのか、ならば何が悪い？いつも君達人間がやつている事だろ？？同族を殺すと言う行為でな。ならば、宇宙人である私がやつても問題はない』

『……違うわよ、貴方は優しい子だものそんな事して欲しくないわよ』

『宇宙人に優しいなどと……』

内心呆れ果てたよ、この人に対してね。

……どうしても、何故か悪きはしなかつた。

だからこそ、

『私の姿を使つてくれないかな？人間として過ごしているときだけで良いからね。だめ？』

コレは許せなかつた。コレだけはなんとしても許せかつた。

『そんなの出来る訳無いだろうが！！！考えてみろ、私が悪事を働いて万が一君の姿を使つていたら君がやつた事になり君が化物呼ばわりされてしまう！！それに、問題なく完璧に

君の姿形になるには、貴方の身遺伝子を取り込み私を改造する必要がある！その為には君の身体の一部、具体的には片腕を貰わなければならない！そんなの君を冒流する事になる！』

『だから？』

『だから、簡単な話では……』

『私は良いよ？貴方の事を愛しているもの、優しい愛しい宇宙人のメタセトちゃん。どうせ、私は身寄りの無い孤独な老人よ、なのに貴方は私と一緒に過ごしてくれた。……だから、その為の恩返しがしたいのよ。それに、冒涜何て大袈裟な：ゴホ、ゴホ……貴方は……私の我が儘を聞く為に私の身体の一部が必要なのでしょう？なら、問題ないは無いわ、それにお願いよ、私を忘れないでね……』

この言葉を最後に彼女は死んだ、死んでしまった。

恐らく、問題ない無い様に見えたのは彼女のやせ我慢だったのだろう……彼女の遺体には自らが付けたであろう引っ搔き傷が沢山あつたからそれは裏付けられている。

私は彼女の遺体から片腕を奪つた後に火葬し、私が作つた墓に埋めた。

……そして彼女の遺伝子を取り込み、私の身体を改造した。

その時彼女の記憶を血液を媒介として見た物は……決して誉められる人生では無かつ

た、ただただ人に恵まれなかつただけの不幸な人生だつた。

だからこそ、私が彼女にとつて、どれだけ大きい存在だつたのか知つた。それは嬉しい事だつた・・・最後の記憶は私に本当に愛していると言うメッセージだつた。あの人らしい事だと思つたよ。

それからは私は“人間”としての姿と、メトロン星人とし活動する人間の二つの姿を持つようになつた。

“人間”としての私は阿久論姫あくろんひめとして世界中を（地球内だけだが、月にも自力で行つた。疲れた）旅した。勿論、彼女の姿形でね。

・・・・・何故か物凄く若返つていたが、私はこの美貌が好きだ、大好きだ。何故なら彼女が内面だけでなく、外見も美しいと言う証明だからだ。そして、私は彼女の様に優しくないから、風俗の申し出は相手を叩きのめす事で許してやつた（勿論殺さずに警察に叩き出した。彼女の姿形で人殺しなどあまりしたくなかったらな）。

旅をしていた時に私の故郷足る宇宙 M78ワールドでは聞いた事もない地底人達、地底文明デロス人達と出会つた。

その時に宇宙の壁を越える技術について教えて貰つた。

なんで、と思つたがキリエル人と名乗る人物から物々交換で貰つた技術だと言
う・・・・・深く考へない様にしよう。

そして私は二つの姿を使つて五十年過ごし、宇宙船を新たに作りながら、ウルトラマンマックスがやって来た時を潮時にして、同胞の迎えを偽造しながら私は元の宇宙に帰った筈だつたのだが・・・

「やあ、はじめまして。僕の名字は死柄木しがらきで、裏社会の別名は自分で付けたのがリキュー
ルで今はAオール F・オー・ワン O、魔王と周りから呼ばれているよ。今の所Aオール F・オー・ワン Oの方がメジヤー
だね。リキューはすっかり過去の物になつてしまつて・・・まだ2015年なのに時
間の流れは残酷だなあ、はあー。おつと、ごめんごめん話を戻してつと、君は侵略宇宙
人かな？・・・でないならばサイン下さい」

何だコイツ？

閑話：とあるゼットン星人の昔話

やあ、私は自らを自らの意思で自分の身体を地球人に魔改造してとある人間の嫁に自ら喜んでなつた者だ。

・・・何？何言つているのか分からぬ？まあそうだろ、分かると思つて話してないもの。話には順序と言う物があるからな、先走つて申し訳ない。さて、改めて自己紹介だ。

私はゼットン星人工ドと言う。人間名は現在は愛しい夫、当時は盟友と言うべき付き合いの人物から滅火穢土ほろびえど と言う名前を授かつてゐる。

今回は私の過去についての話に付き合つて貰いたいのだが・・・え？やだ？まあまあ、BBAの昔話に付き合つてくれ。

そうそう、地球人は取り分け日本人は年長者を敬う文化があつたな？・・・自慢じやないが私は7 万年くらいは生きている。だからお年寄りである私を大切にして話を聞いて欲しい。

・・・先ず初めに私と言う存在について説明しようか。

私は元々ゼットン星人の中で唯一先祖返りした個体で、先祖返りだから基本的に何で

も出来るし能力として念力使える（威力は申し分ないが、使うと疲れる）。

そして私はM78宇宙で偉大なる生物学、考古学の権威と言われる程の存在だそうで事実ウルトラ警備隊に入るための試験でボーナス問題扱いされているらしい・・・ウルトラマンからそう聞いが、今一実感がわかないな。

私と言う存在を語る上で欠かせないのが初代ゼットンを産み出し宇宙恐竜と言う存在の体系を作つたと言う話題だと思う。

そのゼットンの元となつたのは我が故郷の名を継ぐゼットン星で太古に生息していた恐竜の遺伝子だ。

私が生まれた五億年前に生息していた生物で、地球の恐竜とは違この宇宙恐竜・・・つまりはゼットンの別名はコイツのだ。

その宇宙恐竜を元としたゼットンを見て分かる通り昆虫の甲殻類が進化した存在なんだ。

恐らく体組織には炎を作る機関が存在していると予測され、物事を電波でキヤツチしていたのではないかと言われている。こう具体的で無い内容なのは手に入つた物が遺伝子が詰まつた身体の一部が結晶化した物だけだつたからだ。

…その当時の宇宙恐竜はゼットンを知つてゐる者なら信じられんかも知れんが、宇宙恐竜は弱かつたのではないかと推測される。何故ならその種族は隕石ごときでは滅

ぶ筈も無いのにも関わらず、混乱に陥り滅んだ事を示す痕跡がゼットン星の至る所で見つかつたからだ。当時は何故滅んだのか興味本位で調べて、なんだこりやと呆れ果てたのを今でも覚えている。

パニックに陥り同族通しで滅ぼしあつたとはなあ。身体の構造は生物としては上位に入るであろうハイスペックなのに知能が追い付かずにはいるつて、ねえ。確か日本のこわざでこう言うのを宝の持ち腐れと言うのだつけかな？ハハハハ！

・・・それがまあ、私がゼットンを作つた動機の一つだ。

弱い奴を素体として最強の怪獣を作れるのかなあと考えた結果作りたくなつたと言う理由と、もう一つ理由が存在する。

その理由を語る上で欠かせない出来事はとある大戦争だ。

その出来事の名は——ウルトラ大戦争——と言う。

ウルトラ大戦争

M78ワールドにおける伝説の戦争で、別名「ウルティメイトウォーズ」と言う。

それを起こした主犯は暗黒宇宙大皇帝エンペラ星人。

奴は多数の怪獣軍団を従え宇宙を永遠に暗黒に満ちた物に作り替えようと太古の昔

から暗躍しており、実は私と私の盟友メトロン星人メタセトと共に奴に連合軍を結成し挑んだ事があるので、最終決戦前に旧ゼットン星が星ごとメルトダウンを引き起こし

大爆発したので勝敗は有耶無耶になり、それ以来奴がしつこく再戦か同盟を結ぶようになつた・・・新たに先住民も居ないゼットン星となる条件を揃つた星をあらかじめ見つけていたとは言えうざかつた。

・・・・話に戻そう。

そして、奴は今から四万年前に（私達の決戦の丁度5000年後だつたな）自らの理想の最もの壁となる光の国へ侵攻し、コレが後のウルトラ大戦争の開戦となつた。

これに対し、ウルトラマンケン・・・後のウルトラの父を中心とした光の国の戦士達が立ち向かい、両勢力が全てを賭けた総力戦に発展する。

当初はエンペラ星人側が圧倒的戦力で優勢に進め、光の国を壊滅寸前に追い込むが、これに対しウルトラマンケンが光の国に古より伝わる伝説の聖剣“ウルティメイトブレード”の力で光の国に存在する全ての光と未来を掴み取ろうとする者達の力を集結させ、覚醒させる。

更には聖剣の効果で発生した光を高める特殊フィールドの中でエンペラ星人にウルトラマンケンが一騎打ちを挑み、そしてウルトラマンケンとエンペラ星人は互いに重傷を負いその結果相討ちとなつた。

一方、ウルトラマンケンは重傷を負つて倒れていた所をウルトラウーマンマリー・・・後のウルトラの母に発見され、彼女の献身的な看護で一命を取り留める。

コレがウルトラ大戦争のあらましであり、宇宙警備隊の発足理由でもある。

宇宙警備隊

宇宙の平和を守るためにウルトラの父を初代隊長として光の国の戦士達によつて結成された警備隊で、現在の隊長はゾフィーとなつており、ウルトラの父現在大隊長としてウルトラ戦士達を統率している。

総隊員数約100万人と言われているぜ。

その警備隊の中でも地球を救つたM78星雲・光の国出身のウルトラマン達に与えられる名誉の称号があつて、その称号の名は「ウルトラ兄弟」と言う。

そのウルトラ兄弟の中でも特別な戦士達6名を特に「ウルトラ6兄弟」呼ぶ。そのウルトラ六兄弟は宇宙警備隊の中でも最強の6人とされているのだ。

ウルトラ六兄弟の構成メンバーは以下の通りで、
長男：ゾフィー

次男：初代ウルトラマン

三男：ウルトラセブン

四男：ウルトラマンジヤック

五男：ウルトラマンエース

六男：ウルトラマンタロウ

となつてゐる。

特に私は初代ウルトラマンがカツコ良くて強い、やはり原点にして頂点とは彼の事を指すと私は思うぞ！彼は本当に凄く————アツ。

・・・・コホン、些か話し過ぎてしまつたか。

もしや、私が今住んでいる地球の旧友と私の大切な娘の影響を受けてしまつたかな？だとしたら嬉しい限りだ（まあ、それ以外にも初代ウルトラマンと私の縁はそれだけでは無いが・・・それは後程と言う事で）。

・・・・話を戻そう。

私はウルトラ大戦争とその後に作られた宇宙警備隊等の出来事で絶対的な力を求めた。

だつてそうだろう？平和、秩序、理想・・・これ等を守るだけなら宇宙警備隊だけでどうにかなるだろう。しかし、それではどうにもならない事が宇宙にはゴロゴロ転がっている。

まあ、私なりに秩序を守りたいと考えて、当時数多くの脅威にさらされたコスモスペースと呼ばれる宇宙でデラシオンと言う組織を作るのを協力したこともある。

宇宙正義に基づいて宇宙の調和を計ろうとする神秘の組織。大いなる者達、宇宙予言

司とも呼ばれ、プラデイクトと呼ばれる未来を予測する能力を持つ。

その組織にはとあるウルトラマンが所属している。

ああ、昔を思い出すなあ。

『……貴方は何者ですか？』

『私はゼットン星人工ドと言う。……さて、この宇宙は数多くの危機がある』

『そうらしいですね。……しかし、私は無力です。助けたいと思つた者達も、物も、家族も、故郷も、何もかも救えなかつた……』

『フフフ』

『なつ！何故この状況で私を笑う！両親を、同族を、故郷を、何もかもを失つた私を笑うのか！』

『いやはや、失敬。失礼したねお嬢さん。……昔の何処かの誰かを思い出してね、ちよつと可笑しな気分になつてしまつてな』

『……』

『さて、ジユリ君。……单刀直入だか、君に光の使者になつてもらいたい』

『光の使者……』

『そう、宇宙を守る戦士の事さ』

・・・・うん、昔を思い出してしんみりする質ではないな、私は。

さてさて、話を続けよう。

まあコスマースペースはデラシオンを組織した事でどうにかなつたが、肝心のM78宇宙・・・つまりは私の宇宙はどうにもなつていない。

究極生命体、ブラックスター、異次元人、超獣、円盤生物、マイナスエネルギー、根源破滅招来体、四次元怪獣、虚空怪獣、スフィア、スペースビースト、宇宙の帝王、暗黒宇宙大皇帝etc. etc

・・・兎に角数多くの脅威がこの宇宙に潜んでいる。到底宇宙警備隊だけではどうにか出来る問題では無いし、光の国はウルトラマンベリアルと言う失態をかつてやらかしている。

だからこそ私は抑止力になる絶対的な力隣る物としてゼットンを作つた。

ゼットン、別名宇宙恐竜。

地球侵略を企んだゼットン星人の切り札。

ウルトラマンの攻撃を一切受け付けない凄まじい戦闘能力を持ち、放つ火球（メテオ火球）は一兆度という恐ろしい火力を誇るとなつているね。

何、間違つてはいないよ。

ただ私は地球を侵略するつもりは無かつた。同族はそうでは無かつたが、私は侵略目的でゼットンをウルトラマンにけしかけた訳では無いのさ。

・・・ 地球と言う星は数多ある星々の中でも最も強い意思を持つ星だったからだ。あの星がその気になればウルトラマンの二体位楽々と作り出す事が出来るだろう。そう思う程にあの星は長生きした私ですら今まで見た事が無い程のエネルギーを持つていた。

その地球の靈長類足る人類も驚愕に値したよ。何故なら星全体では無く、別々の国だけ宇宙への道を切り開こうとしていたのだから。

普通はこうは行かない。

何故ならば宇宙への道を切り開くのは星全体を統一を行つてから宇宙へ進出するのが私の常識だつた。

・・・ それは光の国だろうと、第二のゼットン星だろうと、メトロン星だろうと変わらない、私の中では絶対普遍の理だつたのだ。

なのにこの惑星の靈長類は統一も果たしていない不安定な状態で宇宙への道を切り開こうとしている。

・・・ コレがどれだけ危うい事かは言うまでも無いと思う。

普通は研究し、研鑽を積み、実践して問題点を洗いだす等の他にもやらなければならない事が沢山ある、例えばリソースが足らない、急な出来事に対応出来ない、資源が足りない、優秀な人材が揃わない etc. etc

これ等は別々の国々で宇宙へ進出しようとすると必ず訪れてしまう問題だ。

更には別々だとこれ等の問題を解決する為に戦争を起こすなんて事をする国があつても可笑しくないし、それによつて滅んでしまつた星を私は幾つも目にしている。もし仮にスタートラインに立てたとしても、そのスタートラインが間違つていれば他の星々と戦争状態に突入するかも知れないし、コレも数多く見てきた事だ。

だからこそどう言つた対応策を練るべきなのか、どの様に研鑽を積めば良いのか、どんな物を作れば良いのか、つまりは教え、導く存在が居なければ正しくスタートラインに立ち、宇宙へ安全に進出出来る筈も無いのだ。

それが我々異星人の常識だった。

・・・たが、地球の人類達は一部の集団だけで人工生命体M-1号を作つたり、ケムール人の侵略を食い止めたり、古代怪獣ゴメスを倒したり、風船怪獣バルンガ（こいつは人類が倒した訳では無い）を退けた。

バルンガに関しては・・・まあ、私が人間達が作つた人工太陽を風船怪獣バルンガが食い終わつたタイミングで内部に無重力発生装置と重力発生装置（どちらも私作）を仕込んでいたのでそれを起動させ原子レベルで分解されてもらつた（理由は単純で、コイツが宇宙にとつて危険な有害生命体と広く知られている存在だからだ）。

そんなこんで地球を私が観察し始めてから人類は更に発展し科学特捜隊と言う防

衛軍を独自に作り出す程に文明レベルを成長させていたので、私がそろそろ地球とコンタクトを取ろうと準備していた時に彼は現れた。

その存在は地峡人類と初めて接触したとされているM78星雲人・・・つまりは初代ウルトラマンだ。

そんな彼のデータは以下の通りで

身長・40m

体重・3万5千t

最大飛行速度・マツハ5

出身地・M78星雲・光の国

怪獣墓場に護送中に逃亡した彼等M78星雲人曰く「宇宙の平和を乱す悪魔のような怪獣」らしい宇宙怪獣ベムラーを追跡して地球を訪れ、誤つて死なせてしまつた科学特捜隊のハヤタ隊員に自分の命を分け与えて一心同体となつて地球の平和を守る為に戦う戦士で、旧友曰く「永遠に自分にとつての最高にして、完全無欠のヒーロー」だそうだが、私にとつてこの存在への感情は複雑だつた。

まあ、初代ウルトラマンが居たおかげで数多くの危機から地球を守り抜けたと言つても過言ではないが、幾ら人間態（彼の場合は憑依）が科学特捜隊のエースパイロットであり、実質的な副隊長であるハヤタ・シンとは言えウルトラマンが科学特捜隊の情報を

ほぼ一方通行気味に知っているのは有らぬ事件の火種に成りかねない。

・・・と言うか科学特捜隊の上位組織がウルトラマンが科学特捜隊の情報をほぼ一方的に知つてゐるのは可笑しい話として調査に乗り出しかけた事があつて大変だつた。科学特捜隊の上位組織の上役にコンタクトを取つて一応渡しても大丈夫な情報を渡してこの件から手を引いて貰つたり、情報を得ようとする裏社会の人間達に警告し、警告に従わない者には見せしめになつて貰つた。

そんな感じで他に趣味でとある仕事しながら過ごしていたのだが、諸事情でウルトラマンの前にゼットン星人として姿を表した。

そして彼は私にこう言つたよ、

「お前はこの星を侵略せんと目論見、暗躍する侵略者なのか？」

とね。

私としては不本意だつたが彼の視点から見ればそう思つてしまふのも仕方が無い……だから私は彼と会話してみる事にした。

「はじめまして、ウルトラマン。私はゼットン星人工ドと言う。どうぞよしなに頼む」
「ゼットン星人工ド！宇宙恐竜を産み出した宇宙屈指の生物学者で、宇宙の秩序を守りし者」

「ほお、君達M78星雲人にも私は知られていたか」

「ああ、貴方の事は宇宙警備隊に入る為の試験前にボーナス問題として習つたぞ」

「・・・ボーナス問題？まあ良いだろ。私の目的はこの星を正しき道へ導く事だ」

「・・・正しき道」

「そう。この地球の文明レベルは君も知つてゐる通り、自力で宇宙へ進出できるレベルでは無いのだよ・・・しかしこの星の人類は独学で宇宙へ進出ししようとしている」

「・・・それが気にくわ無いのか？」

「いや？ ただ単にそうやつて滅んでいつた星を数多く見てきたからこそ、どうにかしたいと考えてゐるだけだ」

「・・・」

「それに君だ。ウルトラマンよ」

「・・・私？」

「氣付いてゐるだろ。が君と言う異星人・・・この星で言う宇宙人をこの星の者達が観測してから宇宙進出への試みはヒートアップしている。やみくもに研究したところで正しく調べなければ碌な事にはならん」

「・・・」

「それに他の星々からこの星を支配せんと侵略者達が迫つて來てゐる。まあ科学特捜隊は自力で怪獣や宇宙人等の侵略者をたけた事があるのは知つてゐるし、見てきたから分

かる」

私は人間態に変化した。

「――！その姿は参謀長官！」

そう、私の趣味とは科学特捜隊の参謀長官だつたのだヨー！

・・・まあ、最初は單なる趣味だつたのだが何時しか本氣で地球人類がこの星を自力で守れる様になつて欲しいと思う様になつた。彼には秘密だけどね！

・・・たぶんハヤタにも初代ウルトラマンにもバレてると思うけど、気にしないネ！

「その通りだウルトラマン。科学特捜隊居る宇宙人は君だけでは無かつた訳だ」

「・・・貴方も地球を侵略しに？」

「そう言う君は？」

「私はこの星を守る為にここに居る！」

「そうかいそうかい、ベムラーを逃がさなかつたらこの星には来なかつたくせに」

「――ツ！」

「私に隠し事は通じるとは思わない事だなハヤタ、いや彼と融合したウルトラマンよ。

調べようとすれば君の眞の任務くらい容易に知る事が出来る」

「・・・では、何故？」

「この星が美しかつたからさ」

「・・・」

「最初は絶対的な力と意思を持つこの地球が宇宙に害をもたらすかどうかを見極めるためだつた、本当にそれ以外の理由は無かつた・・・・しかし、潜伏している内にこの星に愛着がわいてしまつてなあ。何時しか地球人と素の自分で対等な盟友になりたいと思つてしまふ様になつてしまつてねえ。だから同じ土台に入つて貰いたかつたてのもある」

・・・異次元列車を回収して自己流で魔改造しまくる時正体を表したままにしていたせいで、当時の地球人の友から化物呼ばわりされた上発砲されたが、まあ今では良い思い出だ。友の記憶も消したしな。

「・・・と言う事は個人的に?」

「そうだつたと言ふべきかな」

「！」

「・・・母星に地球の事がバレてな。口封じしたら捕まつてしまふし、最悪私でも死刑だろう」

「――」

「そう驚く事でも無い。この星がそれだけの価値があると言う事だ」

・・・それにこの星はやろうと思えば良くて初代ウルトラマンクラス、悪くて初代ウ

ルトラマンの2倍以上の存在を作る事が可能なのは調べがついている。

「それだけの価値があるのか？この星に・・・」

「あるぞ、この星は宇宙の火薬庫と言うしか無い程のエネルギーを秘めている。それを自らの物にしたいと考える者達は沢山居るだろうさ・・・それにお偉いさんは私のゼットンをこの星と君に差し向けるつもりらしい」

「・・・」

「勿論私も死にたくないから君の行動パターンをいやと言う程ラーニングさせてある。ぶつちやけ君に勝ち目は無いぜ、ウルトラマン」

「・・・では、何故ここに居る？貴方は役目をちゃんと果たしたのに」

「追放された」

「・・・は？」

「ゼットンにあらかじめ仕込んでおいた弱点をお前等に伝えると言つたら、処刑か追放だと言われてな。ありがたく追放されたよ」

「――ツ！何故！」

「・・・大切な仲間を見捨てられる程私も白状じや無いらしいなあ・・・もう6万年を生きたと言うのにコレばつかりはしようがない」

「参謀長官・・・」

「しかし、私に出来るのは教えて技術提供だけだ。後は流石に出来っこ無いのさ、暗殺されたく無いしね……しかし、参謀長官としてのお勤めはしなければね？」

「ツ！ 良いんですか？」

「ああ、勿論。そしてタイムリミットは一週間後だな、宇宙恐竜が運ばれて来るのは。侵略事態はもう始まつているだろう……いくぞ、ハヤタ&ウルトラマンコンビ」

「はい！」

そうなこんなでゼットン星人達つまりは同族達は私が利用していた上位組織の腐敗したお偉いさん達や馬鹿な人擬きである朝鮮人共を利用して防衛軍を次々と制圧していき、残るは我ら科学特捜隊だけとなつた。

「……参謀長官、本当に連中の同族何ですね、宇宙人だつたんですね！」

「そうだが、それが？」

「何故最初から言つてくれなかつたんですか！」

「何で無茶したんですか！」

「人に命大事にとか言つているくせに、自分が大事にしないなんて可笑しいですよ！」

「……皆、私を信じてくれるんだな」

「当たり前ですよ、参謀長官！ 我々は貴方を最初から地球人かな？ と怪しんだりしながら過ごしていたので、信じるのが当たり前になつてしましましたよ!!」

「――！ フフフ、お前等！ ……こほん、我々の目的はゼットン星人の切り札にして私の最高傑作たるゼットン第一号を破壊する事だぜ。他の国の連中は我が同族に騙され捕獲できると考え、行動しひどいに殲滅されてしまった……このゼットン破壊作戦の要は無重力弾だ」

静まり返る部屋、静かにそして厳しめの顔をする仲間達……

「ゼットンの唯一の弱点は内部を無重力空間にしてしまい、そうなつたら外に向かつて弾けてしまふと言うものだ。ゼットンが侵略兵器としては使われた場合私の手で破壊する為にその弱点と無重力弾を作つたのだが、諸事情で……より具体的に言うなら風船怪獣バルンガと言う宇宙害獸を排除する時に無重力弾を使用してしまったここには無い」

「無重力弾……」

「そう、それがなければこの星に未来は無いと言つても良いと言うよりぶつちやけ詰みだ……それを覆す為に私に出来る事はここで同族を引き付け足止めする事と技術提供する事だ。技術提供は惜しみ無くするつもりだから……頼む」

「必ず作つて見せます！」

「うん、頑張れ……総員、作戦行動時間は一週間後だ！ 皆で生きて帰つて、うまい飯を食うぞお！」

「了解です！ 参謀長官！」

「よっしゃアーー！」

「張り切つて行くぜえーー！」

「勝つぞおーー！」

・・・まあ、こんな感じだつたかな？

ゼットンは初代ウルトラマンの本編通りで、ハヤタ隊員の記憶に関しては私が独断で修復したのだがそしたらね、

「流石、宇宙人ですね！」

何て言われた時は何か嬉しくなつた。

ゼットン星人の集団は初代ゼットンが破れたら時に尻尾を巻いて逃げ出したので、我々科学特捜隊の完全勝利！で終われば良かったんだがねえ、本当にさあねえ・・・はあー。

「足りない・・・」

「・・・参謀長官？どう致しました？地球人の顔では無いから上手く分からないですけど、物凄く狼狽えているのは分かります！」

「・・・酒に酔いながら良くそこまで分かるなあ。まあその通り何だがネ！」

隊員達や研究者達が私の周りに集まつて來た、こう言うのを野次馬と言うのだつけか

?

・・・まあ良いか。

「いやあねえ！・・・ゼットンの肉片が足りないんだよ」

「・・・・は？」

「・・・・・マジですかい？」

「・・・・・・・嘘でしょ？」

「恐らく同族のお偉いさんは私との盟約を反故にするつもりらしいなあ。ククク・・・
その身体にいやと言う程に身の程を叩き込んでやろううか、若造共？・・・幼稚なガキ
共があ！」

「・・・・・・・・参謀長官、物凄く怖いです」

「・・・・・・・・ちびりかけた」

・・・・・いかん、いかん。皆を必要以上に怖がらせてしまつたな。

こういう時は深呼吸をして、酒を飲んで気分転換をするのが一番！

「まあ心配は無い、それより別れは華やかでなければつまらないだろ？最も騒ごうぜえ

！
そんな感じて飲んだくれてた後に皆と別れを告げて、母星に帰つてお偉いさん方と楽しい楽しいお話をしたら、

『ゼットンと肉片はバット星人が回収したのです！嘘ではありませんよお！』

『我々はその為の許可を出したに過ぎないので！ごめんなさい……もう星全体の侵略行為は永遠に出来ない様にしますからもう許してえ！』

『我々はこれ以上の事は知ら無いのです！……頼みます……信じて、殺さないでくれえ！頼みますからあ！』

……この後触覚宇宙人バット星人の母星たるバット星に言つたが名前が分から無いのと、その該当するかも知れないバット星人は何処かへ逃亡した後だつたと言う事が分かつた。

この後もしかしてと思い光の国へ自分が改造した異次元列車に乗つて向かつたのだ
が・・・

「ようこそ、ゼットン星人工ドよ」

「我々は貴方を歓迎しますよ」

初っぱなウルトラの父、ウルトラの母に出迎えられ、更にはウルトラマンキングが背後に突然現れた・・・この時流石に死ぬかと思つたね。

しかし彼等の目的は私の殲滅なのでは無く協力関係締結だつたらしく。
？・・・・・主、彼等は敵意が無しと見て良いのか??
と擬人化した異次元列車が話しかけてきた。

実はね、何か魔改造したら女の子になれる様になつたんだよなあ！いやう自分の才能が本来の意味で怖い！

そして、異次元列車は擬人化形態でもシロシロの実の能力者みたいに乗り込む事が出来る。

・・・まあ、正確には列車と異次元空間で繋がつており彼女から乗り込んだ場合、乗り込んだ存在が行きたい列車の車両に飛ばしてくれると言うものだが、列車と彼女の異次元空間は彼女が支配しているので彼女に命を握られていると言える（勿論私は彼女を支配する側なのでその対象に入つていないらしく・・・彼女が私を自らの支配者として認めてくれた感じがして奮発して手料理を振る舞つたものだ。因みに彼女は日本食特にアサリの味噌汁が大好きだ）。

因みに私と彼女は同部屋（部屋と言うより一軒家と言うべきかもしれない、流石異次元何でもアリだよネ！）でどうあがいても私が許可した者以外入れないし、私の研究所も中に入つてゐる。

「そちらしいな・・・異次元列車よ、列車本体の中から酒を取り出してくれ」

？・・・良いのか??

「ああ。素面だと今のテンションじや、良く喋れないからな」

？・・・一応取り出したけど、頭脳体の私はどうしてしていれば良いのだ??

「私の椅子にでもなつてろ」

？・・・御意、あと真横に新たな生体反応確認だ？

言われて真横に振り向いて見ると、何時の間にか私の横にジユリ君に酒瓶を持ちなが
ら座つていた。

「お久しぶりです、マスターエド・・・私はデラシオンの使者として光の国に用があつた
のでここに来ましたが、貴方のご用に関して個人的興味があります・・・そう言う事な
ら私が酒注ぎましょう。それでよろしいですか、マスターエド？」

「じゃあ、お願ひしようかなジユリ君」

「はい、マスターエド・・・どうぞ」

「ありがとう、ジユリ君」

さてつと、ゴク、ゴグ、ゴク・・・ブハアー、酒はやつぱり人間態で飲むに限るぜえ

！

こんな感じで酒を飲み始めるとウルトラの母が、

「・・・ところで、その貴方が椅子代わりにしている地球人らしい少女は何ですか？見た
ところ生き物ではないですが――」

と話しかけてきた。

そうして何時の間にか始まつた質問合戦。私が答えて、彼等（ウルトラマンケン、ウ

ルトラウーマンマリーの事で、ウルトラマンキングは眺めているだけ）が 質問すると
言う感じだった。

・・・それが何故か私の身の丈話からデラシオンの成り立ち、宇宙警備隊の現状の問題点と不満点、地球と言う星について、私が宇宙恐竜ゼットンを作った理由。

「――それで私は抑止力として宇宙恐竜ゼットンを作ったのだ。・・・まあ、死んでしまつたけれどもねえー、と言うより殺してしまつたと言うべきいかなあ？」

「・・・マスター工ドが酒に酔いまくっている。どれだけストレスを感じていたんだろうか？」

この長い話の中でウルトラの父、ウルトラの母には頭を下され、ウルトラマンキングからは物凄く慈愛と優しさのこもった目で見られて泣きそうになつた。

まあその他にもこんな事をやつてみては？と提案してみたりした。

例えばか弱き者を守る組織として様々な宇宙人だけに限らず怪獣（聖獣・神獣・靈獣）等の知的生命体全般を雇用してみてはと言つてみた。

「・・・うむ」

「どうかしたかね？ウルトラの父」

「いや、この話しさは確かに良い物なのは間違いないのだがな・・・宇宙警備隊の中には怪獣全てを悪と考えている者達が多いのだ」

「ええ、ケンの言う通り若い者達の中には最初から怪獣は悪であると考えている若者が
多いのも事実ですね。ですが……中には対話できる怪獣も居る事は我々も知っていますが……現状では周知の事実にするのは厳しいと言うのが我等の現状です」

「……確かに難しいな。実はその問題は我等デラシオンでも提示されている問題であり、
現時点では解決策は存在していない」

「ウム、どの星でもある程度以上の知性を持つた怪獣の存在は少ないし、何より対話出来
ないのも原因であろうな。ワシとしてもどうにかしたいが、どうした物か……」

「……うーむ、私はそんな事あまり考えた事も無いからなあー」

？？？ そ う な の か ??

「うん。私はテレパシーで言いたい事を伝えていたからなあ」

「え？」

「何ですって！」

「……流石はマスター エドです」

「フフフ、噂と違わぬ考え方よなあ」

？？？ たぶん、主が変わっているだけだと思う。言語が通じるかどうか分からぬ
奴にテレパシーとは――？

「コツがあるのさ、コツがね。何をどう伝えたいか思い浮かべれば大丈夫だぞ。實際

ジユリ君との会話も最初はテレパシーだったからな」

「ん？ああ、その通りでしたね‥‥あまりにも自然過ぎて最初は気付かなかつたし、途中から普通に会話ををしていましたからね」

「それは君からの電波をキヤツチして自分の頭の中で解読した結果だ。やり方を教えれば君等でも容易に出来るだろうよ」

‥‥皆にテレパシー（自己流）のやり方を教えたら、皆が色々応用出来るとはしゃいでいた。尚ウルトラマンキングは最初から使えるらしい。

「さて、話を戻そうか‥‥何も私は知的生命体ならば何でも良いと言う訳では無いので、そちらであらかじめ条件を作りそれに合わせてスカウトをしてみればどうだ？」

「それはワシが掛け合つておこう」

「それはありがたい。後はそちらが良いというのなら、試したいプランがあつてな——」

その私が提示したプランと言うのは、宇宙の様々な場所に生まれる文明がどのように進化し、別の文明と友好関係を結べるかといった動きを見守る事を目的とした組織を宇宙警備隊とは別に新たに作つてみてはどうか言つてみた。

「‥‥それは、貴方がやつていた事なのではないのですか？エド殿」

「確かにそうだ、しかし君等を利用しない手はない」

「‥‥‥どうことです？」

「君達は多宇宙で広まつてゐる、君達についての噂はどう存じかね？」

「強大な力を盾に、自分たちの主義主張や正義感を一方的に多宇宙に押し付けてくる野蛮な存在……私がデラシオンの使者として光の国に訪れた理由は、我々の宇宙であるコスモスペースに流れて來たこの噂の真意を確かめ、見極める事が目的だつた」

これをウルトラマンケン、ウルトラウーマンマリー、この二人がこの噂について聞いた時の反応はウルトラの父は怒り、ウルトラの母は激しく狼狽えていた。

「何故、何故！ その様な噂が流れている！」

？ · · · · 仕方のない事だ。貴方達が行つてゐる活動は基本、実力行使だ。そして敵対している相手に配慮した宇宙警備隊員など聞いた事が無いのだ。 · · · それに貴方達が行つてゐる活動で救われた存在も居れば殺されたり、傷つけられたりした存在も居るだろう。 そうした存在が流した噂も一部ある？

「 · · · · 一部だと？ 一体どういう事だ？」

「君等は基本見返りを求めるだろ？ そう言う存在はいざと言う時に何を求めてくるか分からぬし、分からぬ者は恐怖の対象となる · · · 早い話がこう言う恐怖を利用した一部の存在が噂を流し、恐怖によつてそれが広まる。 やつぱり、先入観は大事だよネ！」

「なるほど！ 理解を深めさせるには先ず相手を良く知る事が大事で、次は自分を知つて

貰う事！この役職はそう言つた意味が込められている様に感じます！」

「…………理解が早すぎる。コホン、その通りだ。まあ更に言えば君達が強いと言う事も理由だ……最悪の場合文明丸々一つが敵になる可能性もあるので、強い君達には打つて付けの仕事だと思うぞ……まあ文明監視局に所属させる者あるいは所属を望む者には宇宙警備隊員と同じ過程で訓練させれば良いと思うぞ」

「ウム、そうならば問題は無い！今度の会議で申請を出してみるよ……絶対採用されるだろうがな！」

「それは良かつた……さて次は私だな？」

「ああ……」

「貴方程の存在が我々に協力体制を結びに来る事態とは一体……」

「ああ、私がここに来た目的はゼットンの肉片ではなくて……より正確に言うならば心臓と脳の役割を担っている部分を持ち去つたとあるバット星人を一万年後捜索して欲しいと言う依頼だ」

第1章：宇宙恐竜ヒロアカ世界に現る

先ず初めにいきなりで悪いが自己紹介と行こうかな。

私の名前は琴乃羽織ことのはおり。

私は昭和55年に生まれた御年（2020年）に40歳なつた特撮オタク女だつた者だ。

数ある特撮の中でもウルトラマンシリーズが大好きで、ウルトラマンシリーズは興味ある作品が沢山あつた（しかし、個人的に自分と合わないと思った&興味がわからなかつた作品はスルーしてしまつたけれども）ため、完璧とは言えないけれどもウルトラマンを始め、怪獣についてなら大体知つている。

好きなウルトラマンはウルトラマンゼロで、好きな宇宙人はエンペラ星人だ。

それと、私の姿形はウルトラ怪獣擬人化計画に登場するゼットンさんそのものだつたりする。

さて、次は私の事について話そう。

私はとある二つの存在の魂を持つて生まれた人間だつた者だ。

私について話す前に初代ゼットンと初代ハイパーゼットンについて説明しなければならない。

初代ゼットン……ウルトラマンをよく知らない人でも知っている初代ウルトラマンを倒した、初代ウルトラマンのラスボスを勤めるウルトラ怪獣だ。

初代ハイパーゼットン……映画ウルトラマンサーガで登場した最強のゼットン（初登場時と違う姿に三回変わる怪獣で、自分的にはウルトラマン世界のフリーザ様だと解釈している）。

この紹介した怪獣には共通点がある。それは、再登場（正確には別物）した時は必ず初代より弱体化して登場するのだ……悲しい。

……話を戻そう。何故、この二体を解説したかと言うと私はこの二体と関わりがあるのであるのだ。

そう私は初代ゼットンと初代ハイパーゼットン、この二つの宇宙恐竜の記憶と魂の転生体なのだ（ハイパーゼットンの中に存在していたバット星人は知らないが、完全に融合していなかつたのだろう）。

初代ゼットンと初代ハイパーゼットンの関係性は無いよう思うが、初代ゼットンの細胞から培養された個体がハイパーゼットンの素体となつたのではないかと私は推測している（ウルトラマンの世界に登場している宇宙人達は総じてオーバーテクノロジー

のため、この仮説に現実味があると考えている)。

その為初代ゼットンと初代ハイパーゼットンについては詳しいし、自らを倒したウルトラマン達や人間達についてしつかりと調べあげてある。

・・・再び目覚めることの無い筈の私の精神が永遠の眠りから覚め、再び五感を感じた時は宇宙恐竜とあらうものが恐怖した。

明らかに死んだ自分。自分とは違う体、見知らぬ場所、見たこと無い機械・・そして自らよりも小さき筈の人間が自分より大きく感じる恐怖。
ああ怖かった。

初代ゼットンとしても、初代ハイパーゼットンとしても私は誰かの指示通りに動き存在する道具と言つて良い物だったから自身が置かれている状況に理解が追い付いたとしてもどうすれば良いか分からなかつた。

指示が欲しかつた。しかし、それはいくら待つても来なかつた。

生まれた時は泣いたよ、それはもう随分と泣いた。

怖くて、恐ろしくて、分からなくて、だから泣いた。

止めたくとも止めどなく涙が溢れてきた。

父親らしき存在や医者が心配し、不安な表情で覗いてきても知らん顔で泣いた。

だが赤ん坊とは不思議なもので、母親がしつかりと抱いてくれた時はピタリと泣き止

んだ。

何故？どうして？と言う疑問は尽きないし、どうしようもなくまだ私に申し掛けつて
いるのに何故か自分の心が落ち着いた気がした。

『よしよし、もう大丈夫だよ。怖くないよ。泣き止んで笑顔を見せて？』

・・・こう語りかけられた。

命令ではないし、人間の言葉を何故理解出来たのか少し戸惑つたが物凄く安心した記憶がある。

その通り泣き止み泣きつかれて眠りこけながら、その時からこの運命を受け入れようと
考えられた。
受け入れてからは気が楽になつた気がしたと思う。しかし、それからと言うもの驚き
の連続だつた。

先ず初めに驚いたのが人間と言う存在の脆さだ。少し転んだだけで物凄く痛かつた
し、立つことや寝返りでさえ一苦労だったので、こんなにも人間と言う種族は弱いのか
と驚いたものだ。

それと想像力にも驚かされた。物心ついて、字が読める様になつた時に少年ジャンプ
で連載されていたドラゴンボールやゲームドラゴンクエストには驚かされたものだ。

こんな奥が深く、楽しいストーリーを考えることが人間には可能なのかとね。

だがそれらがどうでも良くなるような、忘れてしまうような出来事が起きた。

それは、ウルトラマンシリーズだ。そう初代ウルトラマンが大いに私の根底を揺るがした。何せ前世でゼットン星人に嫌という程行動パターンをラーニングさせられたターゲットこそが他でもない初代ウルトラマン本人だつたのだから。

最初は驚いたが、その次には興味が沸いてきた。自らが殺した相手は、自分と相見る前はどの様な行動をとつたのだろうか？人間とつるんでどうだつたか？

大体こんな感じに興味を持つた。

あくまでも目的はウルトラマンだつた、そうだつた。

だが、そうではなくなつてしまつた。

ウルトラマンを見ていくなかでウルトラマンだけでなく人間を応援している自分が居た。

最初は疑問に思つたよ何故、どうしてとね。

主役であり主人公でもあるウルトラマンならば違和感を抱かないだろう、何せ彼が負けたら物語が進まない。

なのに関係ない人間を何故自分は応援しているのか？この疑問は案外早く解決した。

人間が弱く、矮小だと言うのに、自らよりも強く偉大なる存在に戦いを挑んでいたか

らだと言う結論に達した。

その理由とは何か、それは大切な物を守るため。
救いたい物、一緒に居たいと思う存在の為、誰かの笑顔の為。
こんな理由だと思う。

個人的な解釈ではあるがしかし、的はずれでは無いだろう。

彼らは自らの正義と勇気を振り絞り怪獣や宇宙人と言つた侵略者相手に逃げずに戦つた紛れもない真の勇者だ。

それを裏付けるのが初代ゼットン・・・つまりは私の撃破と言う事だ。

その場面を見た私に来た感情は感激以外の何物でも無い物だつた。

彼等はウルトラマンが倒され、死んでしまつても諦めず策を練り私を倒して見せた。生きる事を諦めず、最後まで戦い・・・そして宇宙^私恐竜打倒した、して見せた。

最初は人間ごときに・・・なんて思つていたのだがあの怪獣王を唯一人間の力だけで打倒して見せた博士（私を倒した兵器開発者の中の人）が芹沢博士と一緒に相手ではね、まあ是非もなし。

勿論ウルトラマンシリーズの中では、どう仕様もない悪人も登場した。

だからと言つてそれは重要ではない。

悪人だろうが、そうでなかろうが大切なのは諦めを乗り越えるかどうか、その先を求

めるかどうかがであり、その程度些細なことだ。

悪人が善をなす事もあれば、善人が悪をなす事もある。結局のところ根性を見せるか、命をかけるかどうかだと私は思う。

彼等の様な人間でいたい、なりたいと私は強く思つた。この思いは私と言う化物が彼等の猿真似をしている様な気がしてならないし、彼等に対する冒瀆になるのかも知れないが、私も大切な何かを守りたいと思つてしまつたのだから仕方が無いと割り切るとしよう。それに今の私は人間だしね。

そんな思いを胸に秘めて警察官を目指す事にした。少しでも彼等の様な存在に近付きたくて、立派な胸を張れる存在になりたくて。

そんなこんなで勉強や筋トレを頑張った、特撮（主にウルトラマンや仮面ライダー等）やアニメ、漫画等を見ながら頑張つた。

そうして晴れて警察官となり（階級は警部で現場叩き上げ）、無事に2020年を過ごす事が出来たし、可愛い妹が警察官つまりは私の同僚と去年ゴールイン。

しかも今月には第一子が誕生して家族皆が幸せの絶好調な一年だつた。

だが、人生の終わりとは案外早く来るもので2020年12月31日に私の人生の幕が下りた。

理由は狂人（セレブロ？）から見ず知らずの親子を庇おうとした私の中でもつとも死

んで欲しくない奴の代わりにナイフで腹をブスリと刺されたからだ。

何故いきなり狂人（セレブロかな?）が出てくるのかと言うと、この大晦日に家族皆にお年玉を渡そうと思い至つた。思い至つたら即断即決で銀行に寄つたのだが、そこに強盗グループが押し入つてきたのである程度一人で殲滅したら（死人なし）見ず知らずの親子が人質にされてしまつたのだ。

この親子を救うべく強盗犯を叩きのめすのを止め、相手の要求を飲んだ。

その要求は警察が来るまで私に暴行を働き、音を上げなかつたら大人しくお縄につくという物だつた。

要求を受けた理由は見た感じ彼等は約束は守る様に見えたし、私が物凄く暴れまくつたと言う事もありこちらとしては願つてもない申し出だつた（それに彼等は自分たちからは人質に危害を加えてはいなかつたし、不意打ちで遠慮なく暴行を先に働いたのが私だつたので氣まずい）。

銀行員に警察を呼ぶ様に命令しているリーダーらしき人物をしり目に、暴力に耐えに耐えた。

その甲斐あつて警察官の後輩と義弟が増援を引き連れてやつて来たのでもう大丈夫だと思ったのだがそう旨くは行かなくて、人質の一人が投降する準備を始めた身近に居

た強盗犯をすり抜け前に居た老人に不意打ち気味にナイフで攻撃を行つたのだ。

『日本猿なんかと一緒に扱いを受けて、ウリは限界ニダ!! 愚かなる日本猿どもが何人死のうが知つた事がないニダ!! ウリは生き残るニダ!!!』

なんて叫びながら進行方向を塞ぐ老人に切りかかつた。

・・・恐らく聞き間違えだと思うと言うより聞き間違いであつて欲しいが、この狂人が老人に切りかかる前に『キエテ・カレカレータ』と囁きながらゾツとする様な笑顔を浮かべていた、この時、この狂人の片眼が赤くなっていたな。

・・・話を戻そう。間一髪で強盗団のリーダーが間に入ることで老人は助かつたものの、逃走を続けようとする狂人（信じられないが、恐らくセレブロに寄生されている）は自分の前に立ち塞がつたナイフを持つた強盗犯をあろう事か見ず知らずの親子の前に突き飛ばし、威嚇射撃をしようとした警官に襲い掛かり（この時襲い掛かる直前で何かをしていた様に見てた）足を擊たれて御用となつた。

そして、それと同時に私はナイフに刺された。

物凄く痛かつたが死ぬ事への恐怖はなかたな、何せ二度目だし。

心残りと言えば、ウルトラギヤラクシーファイト大いなる陰謀を最後まで見れなかつたことか。

何せジョーニアス出てくるのが前情報で分かつていたから余計に。まあウルトラマ

ンレジエンドとウルトラ6兄弟の勇姿を見れたし良しとするか。

『先輩!! 先輩!!』

『おい、しつかりしろ!! 意識をしつかり持て琴乃!! おい、死ぬな!! 僕を庇つて死ぬなよ、恩返しさせろよなあ!!』

『やかましいな・・・たぶん、大丈夫・・・だからね落ち着けよ・・・』

『血が、血が!・・・先輩しつかりしてください!!』

言われてみて腹を見てみると、真っ赤だった。私を刺してしまった強盗犯が止血しようと試みてくれているが、助からない。

今思えば、家族や警察の同僚にも恵まれたし、恩返しだのほざく今月パパになつたばかりのアホを守れて良かったな。私の愛しい妹の夫、つまりは可愛い義弟を守れて嬉しい。

『フフ、私の事そんなに大切に思つていてくれたのか、嬉しいぜ愚弟』
『軽口叩いている場合か!! 僕は、まだ何も! 本当に、何も・・・・・・』

『場合だよ。もう助からんし、悔いもない。それにもう十分すぎる程貰える物は・・・貰つたしからね、強いて言う・・・なら・・・おかしくならずこの件を乗り越えて・・・妹を、幸せにする事を・・・約束し・・・ろ・・・よ・・・信じて、る・・・そ・・・』
こんな感じに私は死んだ。

本当に悔いは無い。

悔いは残さない様に生きてきたし、ウルトラマンZを最後まで見れた。やりたい事やしたい事は粗方やつたし、見たい事も読みたい事も十分したらから（ウルトラギヤラクシーファイト大いなる陰謀と僕のヒーローアカデミアの続きが読みたかつた。特にヒロアカはまだまだ急展開の途中でやつと始まつたと言う感じだつたのに残念無念。まあ、是非も無し）悔いは無い。

こんな感じで、私は二つ目？ハイペーゼットンを含めると三つ目？まあどっちでもいいか。

とにかく私の冒険はもう終わつた、筈だつた。

・・・・先ずは違和感が私を襲つた。

人間だつた時には失われたはずの頭部と言うよりはおでこかな？にある発光機関から内から外に熱が放たれようとしていた。

幸い、万が一に備えてイメージトレーニングは入念に40年間やつてきたから、そう繰り返しをすれば直ぐに収まつた。

しかしコレは、一体どう言うことだ・・・

そう思つて声出そうとしたら泣き声が自分の口から止めどなく涙と共に溢れてきた。涙目で何とか前を覗くと・・・知らない天井と自らの物らしい、泣き声、親らしい笑

顔が二つ。

そして、

「ほら、元気な女の子ですよ。この子の“個性”はこの見た目かしら？・・・見たことが無い見た目ね・・・まあ問題は無いでしよう。おめでとうござります」
なるほど転生二回目？

そういうのもあるのか・・・てつ“個性”!!!

ということは・・・私ヒロアカ世界に転生したのかー!!
はい、と言うわけでヒロアカライフ始まりますよ・・・不安だな。

転入生は宇宙恐竜

今世でははじめまして、前世からだとお久しぶりです。

では、自己紹介をさせて頂こう。

私の名前は滅火羽織。ほろびはおり

今年で10歳となるプリティーナな小学四年生の女子だ。

好きな事はイメージトレーニングと読書（漫画や小説）と映画鑑賞や料理、そして個性を鍛え万が一をなくす事だ。

恐らく私が産まれた時に力を制御していなければ、病院ごとあたり一帯は、焦土と化していた事だろう。

だからこそ無意識下でも力を制御できるように訓練をすることにした。

具体的には近くの山にテレポートしたり、火球の温度調節や規模を完璧に制御出来るよう暗黒火球を射てるよう練習したり（そのせいで山が1／5燃えてしまった。幸いと言うか自分以外に生き物が居ないかどうかしつこい程確認してから練習をしていた為、被害者は居ないし直ぐに火は消し止められたので問題ない。心臓バクバクしたけど）した。

まあ・・・色々あつたけどその甲斐あつて完璧に能力を制御することが出来るようになつた。

それにもう一段階姿を変えることが出来るようになつた（俗に言う最強形態。ウルトラマン乙で例えるとデルタライズクロ一、ウルトラマンゼロだとシャイニングウルトラマンゼロにあたる）。

それと両親には自分の個性がどれ程恐ろしい物か説明した上で受け入れられている。
最悪自分が化物になるかも知れないけれど、信じてくれるかと言う問い合わせでイエスと二人とも答えてくれた。嬉しい。

それと母親がゼットン星人擬人化に見えるのは気のせいだと思つたら、地球に惚れて自分を地球人に魔改造したゼットン星人の女らしい・・・。

名前はエドと言うらしくM78世界出身らしい。何故か私が初代ゼットンであるか知つていたので、私と言う初代ゼットンを作りゼットンと言う存在の体系を作つた個体なのではないのかと推測している。

本人はノーコメント、つまり無言の肯定でその他にも地球に私を送り込む様に指示したのもこの人らしくて、私が地球人に倒されたのを見て地球人に対して興味を持ちいつの間にか自身がDNAレベルで人間となつてしまつたとの事、正にミイラ取りがミイラになつた典型的な例だな。

それは「発光する赤児」が生まれたというニュースだつた。

以後各地で「超常」が発見され、原因も判然としないまま時は流れる。学校の授業ではこう習つた。

当時はどの様呼び名で個性持ちを呼んでいたのかは学校の授業でも教えられなかつたが、良い扱い方はされなかつたと思う。

それは当時の僕、つまりは当時10歳になる自分でも何となく理解できた。

『はーい、静かにしてください。今日は皆さんに伝えなくてはいけない事があります』この担任教師の声で騒がしかつた教室が少し静かになつた。

当時の僕は担任の話を聞きながら、オールマイトやヒーロー達について考えていた。

何故ならありふれた日常的な事だつたからだ。

何にも変わること無く、日常を過ごすのだろうと考えていた。

だがしかし、そんな小学四年生の考えはこの日突然崩れ出す。

『完全に静かにしなさい』

完全に静かになつた。

当然担任教師の発言が気になり、担任教師の次の言葉を待つてゐる意味での静けさと

この担任がここまで念を押す事は珍しい事だつたと言うのが理由だ。

この優しく穏やかな担任が命令口調だつたから怒つてゐるのだろうかと言う恐怖もあるだろう。

この人に怒られると必ずと言つて良いほどトラウマになる（それだけ生徒の事を大切に思つて、寄り添つていてないと考へてゐる証拠だから当然生徒や同僚、保護者からの人気と信頼は強い。怒ると怖いけど）。

『はい、静かになつて先生嬉しいです。さて、伝えたい事は新しいのはクラスメイト、つまりは転校生の紹介をしたいと思ひます。彼女は家庭内の事情で転校してきました、失礼の無いように。はい、滅火さん教室に入つてきて下さい』

この教室に居る全員の視線が教卓横の入り口に集まつた。

転校生と言う小学生にとつては一つのビックイベントと言えるだろうから、まあ無理もない（僕もその一人だ）。

ピポボボボボボ。

突然こんな音が扉の後ろつまりは、廊下から聞こえてきた。

只の電子音に聞こえなくも無いが、聞いたら存在を恐怖で縛り付けるような不気味な、とても生物が出す音には聞こえなかつた。

ピポボボボボボボボボ・・・ゼットーン。

何らかの名前を発音した後、突然として扉が開かれた。
そして彼女は、僕にとつて近い将来掛け替えの無い友人になる存在が、教室に進入した。

そして、苦笑いを浮かべている担任の隣にやつて来た。

この出会いによつて僕と勝ちやんこと爆豪勝己にとつての日常は変化する。

それは良い意味か悪い意味かは今でも結論が出ていないけれど、コレだけは言える。
これは・・・

『はい、滅火羽織と申します。愛称としてゼットンと呼んでください。これから宜しく
お願ひします』

僕ら三人にとつてのオリジンだ。

蛇足・転生秘話

今年2020年12月始めから地球上で異変が起こつていた。

初めは韓国首都ソウルで起こつた。

その異変の前兆は

- ・緑色の靄がかかつている。
- ・触ると生気が抜かれてしまう。
- ・長時間触れていると死んでしまう可能性あり。

その報告を受けた当時、英國女王と会食していた韓国大統領はコレを隠蔽して高くこの情報を英國に売り付け、共に日本国を陥れ様に脅迫しようとしていたので行動が遅れてしまい、異変が起きていた韓国国会議事堂で韓国議員の殆どが避難していない状態で丸ごと大爆発（大統領が避難せず報告を続けろと命じたのもある）。

次は英國首都ロンドンで起こつた。

異変が起こつたのは人が良く集まるとあるショピングモールで、報告を受けて対応を迷っていた議員に女王は直々の命令として直ぐ避難指示を出し、被害者ゼロの状態で大爆発（この時情報を売り込もうとしていた韓国大統領は女王に睨まれ、自分の話を聞か

なければ後悔すると豪語していたが、後悔したのは自分だった)。

世界中で起こっているコレを重く見た日本政府は現総理大臣と昔から交流があるヤクザ組長と協力関係を結ぶびヤクザ組長の組が保護していたとある韓国人と協力関係を締結し、その韓国人(以降科学者Kと表記)の話により緑色の靄の正体が判明。

・緑色のエネルギーの名前はMAエネルギーと呼ばれるエネルギーで、数多くの使い道がある万能エネルギー。

・MAエネルギーは実は星の生命その物で、使いすぎれば星が死滅してしまう。

・MAエネルギーは生命体の生命エネルギーを吸収したら高エネルギーとなり視認できる程になるが、直ぐにコレを回収しないと大爆発が起きる。

・韓国政府はコレを嘘偽りだとして、全く信用していなかつた。

科学者Kはこれを使い草木一本も生えない土地を緑で溢れさせたいと願いMAエネルギーを見つけ出したが、韓国政府はコレを世界中で売り捌きエネルギーが枯渇したら、全責任を日本国に押し付け滅ぼそうとが策していたらしい(だから国をあげて情報収集をしようとしてあの様)。

・科学者Kは自然学問の権威として、その分野では知らぬ者は居ないと言われる程の凄い人。

・博士とその助手はちゃんとした歴史を自分で調べて知つており嫌悪している。

・その嫌悪具合は韓国は嘘偽りばかりの国で日本に物乞いをしまくっているのに助け
て貰った恩も返さず偽りの歴史をでつち上げ日本を陥れようとする恩知らずの蛮族だと非難している程

・韓国人でいたくないと言う理由で名無しの権兵衛と英國女王や天皇に自己紹介する程（因みにこの人韓国がまだ日本だつた頃から生きている人を祖父に持ち、祖父が仲間と一緒に話している際に日本国だつた当時は今よりも良かつたと発言した時に当時の事を録に知らない自称愛國者な若者多数にリンチにされており、この時世論から科学者Kは▣売国奴を祖父に持つた不幸な孫▣だとして同情され、ありもしない歴史が本当であると洗脳されかけた）。

・その為、韓国ではこの人の事を日帝支配を認めている売国奴として、昔から嫌悪されている。

- ・科学者Kは韓国に完全に見限り、研究成果や実験結果、そして自らを利用した政治家を殺し犯罪者となり知人の日本人の手引きで日本に逃亡したらしい（そこでヤクザ組長に出会い昔からの付き合いにやつたと言う）。

- ・韓国に資料を残した覚えが無いし、人間を超越した超科学でもなければM A工ネルギーを視認出来る程実体化出来ない。

そして、今回の主犯らしき韓国人に取り憑いていると思わしき存在を特定する。

対象：寄生生物セレブロ

・発覚した理由

科学者Kの助手にして唯一無二の友の体を目の前で奪つて、自己紹介したから。

・目的

MAエネルギーを集め、MAエネルギーを不死の靈山（富士山）に捧げ、地球上の全てのMAエネルギーを富士山に集中させて太陽に発射して偉大なる何者かを復活させる事が目的。

尚、セレブロを途中で止めてしまえば計画は破綻するらしい（セレブロ談）。

（因みに全て証拠として録音データも残っている）

これ等の情報をもとにヤクザ組長をリーダーとしチームを結成し、セレブロの計画を止める共に出来れば滅ぼすために銀行強盗団を装い突入し、科学者Kの側近を保護する事に成功。

しかし、セレブロが警察官（周りに嫌われている程汚職警官）に憑依すると事を許してしまい、セレブロは異世界へ逃亡した為、結果的には今回の地球の危機は去つた。

今回の事件での死傷者

怪我人：ヤクザ構成員二名

二名とも大怪我だか、命に別状無し

な一つの体と完璧な一つの精神を与えてやつたこの私をな。．．．我が偉大なる計画には失敗は無い。今に見ておれ不俱戴天の敵ウルトラ戦士どもよ!!!貴様らウルトラ一族を根絶やしにし、最後に笑うのは我々ヤプールだ。フハハハハハハハハハハハハハハ!!!」
その男は聞いた者を恐怖で体を震わせるであろう高笑いしながら異次元空間から去つていった。

回想＆過去編1：宇宙恐竜と炎魔戦士前半

……どうも、派手な失敗をやらかしたゼットンさんこと滅火羽織ほろびはおりです。

自分が家庭の事情……と言うよりも父方の祖母が私の力に目を付けて、私をヴィラン組織売り飛ばしたのが原因だ。

え、それで何故無事なのかって？

私を誰だと思っている、天下無敵のゼットンさん（正確には初代ゼットンの転生態）だぞ。

私をどうにかしたければヒーローだと全盛期のオールマイト、ヴィランだと全盛期のオール・フォー・ワンでも連れて来い。さもなければ、この世界を恐怖と絶望で覆い隠してやろう！！

まあ冗談だけど、この二人位でないと私を止められないのは本当だ。

コレは決して自惚れているのではない。オールマイトからのお墨付きだ。

何故、ここでオールマイトが出て来る理由は……私がはつちやけたのが原因です、はい。

待つて、私悪い怪獣じやないよ。だから無重力弾撃ち込まないで下さいお願ひしま

す。あの感覚は完全に人間になってしまった私では耐えられないから……。

コホン、話を戻そう。

私がはつちやけた理由は被害者が私一人では無かつたのが原因だ。

まあ私一人ならば何にも問題ない。

直ぐにテレポーテーション（日本語で瞬間移動）で何時でも逃げ出せるのだが、それでは私一人だけでしか助からない。

そんなの目覚めが悪いし、生憎と見捨てられる様な精神構造はしていない。

これから回想としてお見せしよう。



＼＼＼＼＼

先ず初めに私は自らを縛っていた縄を怪力で引き千切り、

ピポボボボボボボボと鳴いてみた。

周りの視線を私に集中させるためだが、コレがうまく行つた。

「な、何だよお前!!自分が置かれている状況が理解で、出来ていいのかよ!!」

何か恐れをなしているご様子。

おかしいな鳴き声を発しただけなのに何でそんなに怖がるのだろうか?

まあ良いか。

「自分の置かれている状況を理解しているかだと？ フフフ、コレは傑作だな」「なつ何を言つていやがる！！お前一人で何が出来るんだよ！！」

良し、挑発に乗つたぞ！！

・・・心なしか物凄く足が震えている様に見えるが、畳み掛けようか。

「貴様らの様な自らよりも弱い弱者にしか威張れない屑ごときが、この私に勝てると思つてゐるのか？もし思つてゐるのならば、試してみるかね？」

さて、どう出る？

リーダーらしき人物は、フードを被つたまま動かない。

あの如何にもキリエロイド擬人化態ですと言わんばかりの見た目と何かヤバそうな洗脳装置みたいな首飾りを着けている奴……恐らくアイツは別格だろう、自分は出来れば雑魚処理をしてから戦いたいものだ。

「言わせておけば、調子乗りやがつて!!!身の程をしつかりとその体に叩き込んでやるぞ

!!!」

おつと、襲い掛かつて來たな。

おお!! 呟えた奴が先陣を切つて数人で來たぞ！

ビビりかと疑つたが、お前意外と根性アルネー！！

・・・何か一瞬口調がおかしくなつた氣がするが、まあ良いだろう。

勝負ネ!! 勝負ネ!!

さて武装しているのは一人で、個性を使っているのは五人か。武装している奴はリボルバーか？・・・・ヒロアカ世界にまだ、重火器あつたのから知らなかつた。

もうとつくに淘汰されているのだと思つていたが有つたんだな。

しかし、リボルバーか。良いねー、回転式拳銃は私も好きだよ。なんたつてあの次元大介が使つているし、ジャムらない。

敵前でジャムるとか本当に危険だし、生きた心地がしないからな・・・今世ではそう言う体験をしたくないものだな、身を守る物がない状態でね・・・本当にね・・・トランマは後で思い出そう。今は目の前に集中集中、そして深呼吸。良し、気分転換終了。

さてと一人目は目からビームを出そうとしているな、二人目は火球を吐いてきた避けたけど・・・あとは今は分からん。

よし、分かつてない奴から潰すか。未確認要素何て、分からなくていいんだぜ。

先ずは、飛んできた火球を避けて瞬時詰める。

「え？」

男の一人が思わず上げた、間の抜けた声が耳に届く。

まあ、そんな声を上げるのも仕方ないだろう。何せ私の歩幅で目測でだいたい十歩分はあつた筈の距離を、私がたつた一歩で詰めたのだから。

滑る様に移動する『活歩』の歩法。熟練の域になれば脚捌きも無くこれ以上の距離を詰めるらしいが、私ではしっかりと足を動かして最大で精々十五歩。

しかし、それで問題ない。

唚然としたところにジャストど真ん中ストレートを胸に一発!!敵さんは速やかに後方へゴーシュート!!

先ず、一人目。

一人目があつという間にやられた事に唚然としている隙だらけな奴に回し蹴りを頭部に食らわせ二人目、二人目を踏み台にして空を飛んでいた奴より高く飛び上がり、飛び膝蹴りで三人目。

「……嘘だろ」

「化物!!化物だアイツは!!」

「……酷いな。私は体術しか使つてないと言うのに、酷いな。」

さてと、うん?仮名キリエロイドが掌から火球を出して私とは別方向に放つて……
クソ、人質に放ちやがった!! しかも早い!!

コレじゃあ間に合うぜ!

瞬時にテレポートで子供達の前に移動して、相殺したら子供達に熱風が行つて子供達が危ないからバリアで防ぐ。

ドカン!!!

衝撃波來ていなが、物凄い音が響き渡り眼前に凄い勢いで炎が私を焼かんと迫り左右へと流れていった。背後には当然行つていながし、子供達も全員無事だ。

・・・お返しに一兆度を越える暗黒火球を食らわせてやろう!!!

「・・・」

奴め無言で、しかも簡単に避けやがつた。そして大きい爆発音が奴の遙か後方で鳴り響く。

凄い身のこなしだな・・・本当に人間か？

・・・・まさか、しかしそんな事あるのか？

まあ今は、置いておこう。今はコイツをどうかしなくてはな。

回想＆過去編1：宇宙恐竜と炎魔戦士中編

「はあ・・・はあ、何処にいる？ 焦凍!!」

・・・今の状況を説明する前に貴様らに基礎知識を教えておこう。
今現在、世界人口の多くが能力を持つていてる時代。

その出来事の始まりを超常黎明期と言う。

人類社会で超常を発現させる者たちが突如増えだした混乱期を指す言葉だ。

当時の事は資料にはあまり残ってはいないが、高校生の時にある程度習う事が出来る。その内容は以下の通りだ。

人類社会において超常能力の存在がフイクションでなく現実のものとして国際的に認められたのは、中国の輕慶市で「発光する赤児」が生まれたニュースだとされており、この報道がなされた日時が超人社会の始まりとされている。

この時代は徐々に特異体質となるものは増えていたものの、まだ超常能力を持たない人類の方が多かつた時代である。

この時代では超常能力のことばは『個性』ではなく『異能』と呼ばれており、すなわち人類社会において「普通とは異なるもの」という扱いであつた。現代に置いて『異能』が

『個性』と呼び変えられるようになつたのは、当時はマイノリティだつた超人たちが後にマジョリティになつてしまつた逆転の歴史を表していると言われている。

超常黎明期では人間という種の規格がそれまでの常識から大きく崩れ、世界中が壊滅的な混乱に陥つた。

この時代の混乱がなければ人類はとつくに外宇宙に生息領域を広げるまでに科学を発展させていたと言われている程だ。

そして今の異能の呼び名を紹介しよう、その呼び名は『個性』と言う。

“個性”

先天性の超常能力。

基本となる人体に特別な仕組みが $+ \alpha$ されたもの。また特別な仕組みにより発現する何かしらの超常現象の事。

現在全人口の約8割が何らかの”個性”を発現している。通常4歳頃までに両親のどちらか、あるいは複合的な”個性”が発現する。それぞれ世代があり、今の世代は第5世代と言われている。

能力によって「発動型」「変形型」「異形型」の三系統に大別している。

それ以外だと世代を経ることに混ざり、より複雑に、より曖昧に、より強く膨張していく”個性”があるとする。その個性の持ち主は容量の膨らむ速度に身体の進化が間

に合わず、容量に身体を適応させなければ人は制御できなくなる現象があるらしい。その兆候は第4世代からあつたらしい。コントロールを失う現象として個性特異点と言う用語もあるが、学術的信頼が薄いとされている。

他にも異次元人の侵略とか、太古の地球に侵入していた精神生命体の仕業とか、色々な資料が確認出来た記憶がある。

話を戻そう。

その後、異能者が普通の人（当時の社会における「無個性」の人）よりも増えていき『異能』は『個性』として社会の多様性の1つとして認められるようになる。

この時超常能力の扱いが法整備され、公的な場での『個性』使用は原則違法行為。

つまりは個性乱用・危険行為として扱われ、その中でも他人を傷つける事に使った場合は敵ヴァイラン（個性犯罪者）として取り締まられる事になつた。それに対応する形で自警団的な活動を国が世論に押される形で追認し、後述のヒーロー公認制度によるプロヒーローと呼ばれる制度が誕生した。

因みにこの俺もプロヒーローの一人だ。

日本ヒーローランキングN.O. 2ヒーロー、ヒーロー名エンデヴアーレとして活動している。

本名は轟炎司とどろきえんじ。

個性は『ヘルフレーム』。

燃え盛る轟炎！炎を自在に操り悪を討つ！

なんて謳い文句でTVなどで紹介されているが、眞面目な説明をすると身体中から炎を噴出することができる個性だ。

世間では炎系統では地上最強クラスと言われる。

出力は自由に調節でき、直接相手に浴びせる他、噴射の勢いを利用した高速移動、空中でのホバリングなど様々な場面で活躍する事が出来る。

・・・・さて、今の状況について詳しく話そう。

連續強個性誘拐事件。

コレは丁度五年前に起こった事件で強個性つまりは、個性特異点である可能性がある人物が連續で誘拐される事件が起きた。

この事件は当初超常黎明期から暗躍している魔王の犯行だと考えていた。

しかし、その魔王の行動はこの事件の解決に協力すると言つても良い態度だった。

誘拐された人物が集められている場所を襲撃し、後の事は俺達ヒーローや警察に任せると言うスタンスを取っていた。

・・・実はまだ正式に魔王の行動だと決まっている訳ではないが。

では何故俺が魔王の仕業だと断言したのかと言うと、オールマイトがその可能性が高

いと宣言したのが理由だ。

個性溢れる超人社会に “平和の象徴” として君臨するN.O. 1ヒーローにして俺が越える事を誓う存在だ。

オールマイト。

本名、個性、年齢等が不明ながら絶大な力と人気を誇るN.O. 1ヒーロー。
高校卒業後はアメリカに入学し、大学に通いながらヒーロー活動を続け、25年前に日本に帰国しそれ以降存在そのものが敵犯罪の抑止力とされ、“ナチュラルボーンヒーロー”、“平和の象徴”と称される生ける伝説。

そんなオールマイト曰く、

『奴はこう言う犯行には証拠を残さない。我々に分かるのは個性が抜かれたと事実だけだが、今回の事件は奴による犯行にしては誘拐の証拠を残しすぎているし、襲撃時の証拠だと思われる物は確認出来ない』

と言つていた。

自己紹介の時にリキュールと名乗っているのも、誘拐が魔王の犯行ではない証拠でもあるのではないかとも言つていたな。

・・・・今の状況は切羽詰まっているのが現状だ。

それは何故か？

それは俺の息子、名前を轟焦凍（こうきしょうとう）がさらわれてしまつたのだ。

さつきも言つたが、対象は個性特異点だと思われる個性の持ち主が対象として狙われているこの誘拐事件はもう解決している。

順番こうだ。

①魔王と思わしき人物リキュール（何故分かつたのかと言うと、さらわれた被害者達に名前を聞かれ、取り敢えずの名前答えたらしい。因みに怪しい仮面を着けていて素顔は分からなかつたとの事だ）によつてまだ無事だつた人達が居るアジトが襲撃される。

②この騒ぎが原因で一般市民から通報が届きそのお陰でアジトの場所が分かり、オーラマイト率いるプロヒーローと警察が現場に突入。

③突入した結果主犯格らしき人物はおらず、雇われた者ばかりだつた。

④そのほとんどが大怪我をしていたが命には別状は無く意識はあり、主犯格の目的については雇われた連中は知ら無かつた。

⑤更に奥に進んだ結果は、非人道的実験跡だつた。瓶詰めされた人間の腕、瓶詰めされた脳味噌、瓶詰めされた・・・ここから先は覚えていない。

衝動的に燃やそうとして、オールマイトに気絶させられた。

まあオールマイトも良く見ないで逃亡してしまい覚えていないと僅かしそうに言つていた。その答えを聞いて、平和の象徴も人なんだなあと親近感が少し沸いたのは内緒

だ。

だからと言つて同一犯による犯行でない証拠は無い。ので、息子もそうなつてゐるかもしれないと考えるだけで、何故か胸が苦しくなる。何故なのか分からぬ、アイツは俺の代わりにN.O.・1にする最高傑作以外の価値など無いはずなのに…俺は何を思つてゐる？何を感じてゐる？俺は何を考えてゐる？

答えの出ない問いを考えながら俺は今辺りをしらみ潰しに探してゐる。だからと言つて根拠も無く探している訳ではない。

実は昨日、情報を探してそろそろ行動に移そうとしていた時に突然警察官の制服を着た男が弱つた老婆を引きずりながら連れてきて、

『あんたの子供もさらわれたんだろ!!何で知つているかって？警察官なめんな!!やろうと思えばこれくらい造作もない。だが、俺に出来ることはここまでだからあんたに託す』

といきなり言われ、色々な情報を貰つた。

・・・・・去り際に、

『家族を大事にしろよ、ヒーロー。力だけが正しい事じやない、俺は娘のお陰でそれを再確認出来た。あんたなら娘を止められるだろうよ、アイツの助けになつてやつてくれ』

と言われた、娘とは一体？

とにかく焦凍を探さなくてはと思い足を進めるスピードを上げていると、ドカン!!

と大きな爆発音が近くで響いた。

方角はあの警察官が集めた情報と同じ範囲内だつたので、もしかしたらアイツは警察の中でも結構な立場に居るのではないかと思いながら、アイツから託された思いを無駄にしたくないと新たに沸いた感情を胸にそこに向かつた。

そこで俺が見たものとは、

「こつちの動きを予測しやがつて！大人しくお前を操つているヤプール製首輪を寄越せ！」

《どうだ？初代ゼットンよ、我々ヤプールの最高傑作である個性生体決戦兵器キリエロイドの性能は！！ハハハハハハハハハハ！！》

謎の怪物の姿をした少女達・・・・名付けるなら怪獣娘同士の戦いと怪しい男の声だつた。

回想＆過去編1：宇宙恐竜と炎魔戦士後編

…………私は誰なのだろうか？…………何か大事な事をやつていた気がする…………。
私は…………何者かにお師匠様と呼ばれていたような。
では、それは誰？私は、誰？

《フフフ、貴様には必要ない事だ。我々ヤプールの道具足る貴様には、な》
…………そ…………れ…………が…………私…………なの…………か？
《そうだとも、貴様の所有者の我々の意思のままに動くがいい》
…………分…………か…………た。

《復活の機会など与えるものかよ。人間に転生し人と共に生きようなどと下らぬ理想を

抱いたキリエル人の最後の生き残りよ、人間になりながらこともあろうか我々に歯向かいあの魔王と共に我々の邪魔をした愚か者よ。最後まで我々に歯向かつたと言う罪は貴様の愛弟子を自らの手で殺してこそ償える物だ・・・ククク、その時は貴様の意識も甦ろうよ？なあ、志村奈菜よ。ハハハハハハハ!!』

~~~~~

「ピポポポ・・・・ゼットンツ!!」

『フフフフ、ハハハハ！ 楽しいぞ！』

・・・・・・・・ 強い、コイツらは物凄く強い。

特にゼットンと鳴いている少女だ。強力な個性に頼らないで動ける身体神経、相手の行動を正確に捉えられる反射神経、経験と修練に裏打ちされたと直間出来る程の格闘術、相手の動きを正確に分析する状況判断力・・・全てにおいて俺を凌駕している。

そして、

『ハハハハハ！ なんと言う力、なんと言う学習能力か！ ククク、流石は初代ゼットンにして初代ハイパーゼットンに疑似転生した存在なだけはある。我々の様に性能に頼りきつている者には羨ましい限りだ』

「ほざけ！ その身体を操っているのは貴様だろう！ つまりは、その戦闘技術は貴様本来

の物だ！」

『……ククク、ばれたか。慢心してくれれば、楽に体を回収できると思つたのだがなあ、残念だ』

・・・・・ その相手も相手だ。

今、俺は何を・・・ 考えた？

オールマイトを待つ？ オールマイトに任せると？ ふざけるな！ そんな事あつて良い訳がない！ 俺はオールマイトを越える、必ず越えると昔、自らに誓つたのだ！ そして、力と身の丈にあつたN o. 1ヒーローになると誓つたのだ！ 名実ともにトップに立つ、それを成し遂げるのだ！

それを成し遂げる為にアイツに、俺の息子である焦斗に全て託した！

しかし・・・ 俺も越えたい、その為にも俺はオールマイトに頼らずに、俺がどうにかしなければならないとかん・・・ たが、俺に出来ることなど、

『家族を大事にしろよ、ヒーロー。力だけが正しい事じやない、俺は娘のお陰でそれを再確認出来た。あなたなら娘を止められるだろうよ、アイツの助けになつてやつてくれ』  
そうだ・・・ 俺は託されたんだ。

俺に自らの子供を託せると信じてくれた者から託されたんだ。

・・・自分で出来ることをして、他者に後に託す。簡単な事の様で実際、物凄く勇気のいる事だ。自らが信頼した存在が自らの望んだ通りするとは限らない。

それとは逆方向に行動するかも知れない、そもそもするつもりが無いかも知れない、叶えられないかも知れない。

それでも、俺に何の疑いもなく・・・まああるかも知れないが、俺に託してくれた。それは、無下にしてはならない物だ。

ならば俺に出来ることを、出来るだけやつてみるとしよう。

・・・・・確かに、拐われたは個性特異点と思われるだいたい十歳ぐらいの子供だとあの男に貰った資料に書かれていたな。

丁度俺の息子轟焦凍はそれに当て嵌る・・・あの男、本当に何者だ？まあ、良いか。個性特異点について分かりやすく説明するとしたら、俺の息子轟焦凍を例に出したら分かりやすいだろうな。

アイツは父親であるエンデヴァーつまりは俺の炎操る燃焼の個性、母親・・・俺の妻である冷の氷操る氷結の個性・・・つまりは俺と妻の二つの個性が混ざり合い生まれたのが轟焦凍と言う最高傑作だ。

アイツの個性は半冷半燃。燃焼と氷結を同時に有するわけだ。  
つまり個性特異点とは世代を重ね、個性が合わさりながら更なる進化を迎えた物と言

える現象だ。

・・・俺はオールマイトを越えるためにあらゆることした。人に誉められない様な事も色々やつた。それは子供への虐待だったり、自らの考えを押し付けたり。自分に反対した妻を追い詰めた・・・その結果妻は精神病院に長期入院と言う結果になつた。それを間違つたとは思わないし、否定しない、後悔もないが・・・今は別のやり方があつたのでは無いかと思う様になつた、あの警察官らしき男に思いを託された後か。だからと言つて、不快な気持ちにならなずに心地良く思う、今まで感じた事もない様な気分になる。不思議な気分だ・・・悪くない。

さて、気分を切り替えて話を戻そう。

つまり、個性特異点とはハード→身体、ソフト→個性と考えた時、ソフトが大きく（強く）なりハードが対応できない状態で、更には個性は世代を経るにつれてその形・能力・性質すべてが複雑に混ざり合いよりアップグレードされていく事を指す言葉だと思う・・・全ては個人的解釈だが、そう間違つていはないだろう。

・・・その解釈だと、俺の息子にもそれが当て嵌るかも知れない。よく見てこなかつたが、そう言えば不安定で俺の言い付けを守れなかつた事が多かつたな。それもある意味、俺の罪とも言える物だろう・・・ならば、俺は罪に少しでも罪に向き合いかつて俺が理想としたヒーローに一步でも近づくためにも家族に対する態度を少し改めるか。

例え遅すぎて、家族に受け入れられる事は無いとしても、俺もあの警察官の様な父親になつてみたい・・・そして、かつて夢見た当時の俺が考えた最高のヒーローになりたい。何故か無性にそう思う。

「シユンシユンシユン、ピポボボッ!!」

『ハハ、どうした？さつきから碌に攻撃してこないでは無いではないか？フフフ、さつきまでの威勢はどうした？ククク』

あちらも状況も変化してきたみたいだ。

・・・・・ そう言えばあの黒い服を着た少女は黒幕らしき人物に攻撃を仕掛けていいな  
い・・・ そう言えば、身体を乗つとてていると言つていたけれど、どういう意味だ？

詳しく述べるためにも、状況を知つていてるであろう拐われた子供達・・・そして焦凍にも、な。

・・・さて、何処に居る？拐われた子供達は何処だ？

・・・居た。

「焦凍」

「ツ親父！・・・何で、ここに居る！」

「お前等を助ける為に、ここに来た」

「・・・本当か？お前が・・・拐われた人達を？本当に？お前か？」

「・・・別に俺を信じなくとも良い」

「凄い！N.O. 2ヒーローのエンデヴァーだ！」

「本当だ！」

「本物だ！」

「・・・でも、オールマイトイや無いの」

一人の少女が発した、その一言でシーンと静まり返った。

・・・まあ、世間には俺の性格は受け入れがたい物だろうからな、オールマイトと比べられるのは仕方ない事だ。だが、ここにプロヒーローは俺しか居ない。

「お嬢さん」

「ツ、なつ何ですか・・・」

「俺をオールマイトの様に信じられないのは分かる。しかし今オールマイトは居ない。・・・それに、俺もプロヒーローだ。信じられないかも知れない、期待出来ないかも知れないが、頼む、俺を信じて欲しい」

「・・・・は、はい！分かりました！」

「俺もあんたを信じる！」

「私も！」

「親父、あんた・・・・」

「焦凍、話は後だ。・・・君達にお願いがある。俺に詳しく述べてくれないか？」

そして以下の情報が分かつた。

- ・今戦っているのは初代ゼットン（以下ゼットンと呼称する）と言う存在の転生体とヤプールと言う存在（ゼットンは恐らく、あの警官の娘だと思われる）。

- ・ヤプールはあの少女の身体に首に着いている首輪を依代として寄生している。

- ・そして、あの少女はヤプールが何かの群体を無理矢理一つの身体と精神にまとめ、何者かの魂をコアとして作つた兵器。

- ・その何者かの精神は断片的だが残つており、何時目覚めるかも知れない。

- ・それを目覚めさせるのをヤプールが阻止している。

- ・ヤプールを倒すとその存在は消えてなつてしまふ。

- ・何らかの条件を満たせば解放できるが、分からぬ。

- ・その存在は誰かは拐われた子供達には分からず、ヤプールがその存在を言つていたが距離があつて聞き取れなかつた。

- ・それを聞いてから、ゼットンは攻めることをやめてしまつた。

- ・そしてあの身体は再生能力を持つているが、限界が分からぬ。

と言う情報が手に入った。

・・・・ 分からん、どう行動に移せば良いか分から無い。情報は揃つたが、決定だが無い。

それに、

「ピボボボボボボボボッ！」

・・・・ あちらも切羽詰まつてゐる。

ゼットンは下手にてを出せない状況で、それに対しても好き勝手出来る。何故ならば、その身体本来の精神を壊しても問題ないからな・・・・・

ならばせめて、その存在の正体を掴まなければ、この戦いの勝利には繋がらない・・・・・  
 せめて、その存在の正体を知らなければ、この戦いに勝利と言える状況にはならないな」

「・・・・・ わつ私！し、知つてます！」

「何!!!」

「ピイ！」

「おい、親父！怖がらせてどうする！」

「あ、ああ。すまなかつた・・・コホン、では教えてくれないか。その人物の名前を」「はつはい！えつと、私の個性は遠くの音を自由に聞き取れる個性で、何を聞くか無意識的に判断できるの・・・い、いえ出来ます！・・・だからあの二人の会話を盗み聞きし

たら、聞こえて……彼女の名前は志村奈菜さんと言うらしいです！」

「……それは、本当、なのか？聞き間違いではなく？」

「はい、間違い無いです！確かに言つてました！」

「……なんと言う事だ、本当になんと言う。その、名前は……オールマイトから……聞いた事が、ある……師匠の、

『その写真は何だ？お前の想い人の写真か？まああんな物を見た後では、無理もない。平和の象徴も人間臭い所があるのだな』

『H A H A H A H A H A H A ! そんなんじや無いさ。と言うよりも、私何かがおこがましい……このお方は私のお師匠さ！』

『……師匠？なら、プロポーズするのか？』

『そんな事と無いさ！……彼女は、既婚者で子持ち、そして故人だ』

『……申し訳無い。触れてはならない物に触れたようだ』

『……この時のアーツの顔は、今でも忘れない。物凄く余裕の無い、常に笑顔のたえないアーツの笑顔を無くした顔を見たのはあの時しか無い。

つまりそれ程までに大切な存在、汚してはならぬ存在、例え罵倒した存在が一般人だとしてもアーツは手を上げかけるだろう。そう思わせる様な迫力がある、そんな思いの積もった顔だった。どれ程の苦痛を味わえばあんな顔をする事が出来る？

『ツ・・・H A H A H A ! そんなこと無いさ ! でも、お師匠は変わった人でね』

『変わった ? いきなり、どういう意味だ ?』

『気分転換に付き合つてくれ、嫌なら構わない』

『良いだろう。で、どういう意味だ ?』

『ありがとう。・・・えと、なんと言うか。人間らしく無い雰囲気と言うか、人間らしくわざとしていると言うか・・・変わった不思議な感じの人だつたよ』

『・・・随分、可笑しな奴だつたのか ?』

『まあ、そんな感じだね。後、本人に聞いてみたことがあるよ !』  
『・・・・・は ?』

『本人曰く、当たりだそうだ ! ・・・どういう意味 ?』

『知るか・・・後、そう言うのは聞くの控えるぞ普通』

『・・・・え、そうなの ?』

『・・・だから、無自覚煽り魔なんだよ。貴様は』

『え――!』

『はあー。本当に、貴様は・・・まあ貴様らしいと言つたら貴様らしいかな、うん』

・・・こんな、感じだつたな。

・・・と言う事は志村奈菜は、元は人間では無かつた ? では、あの資料にも信憑性も・・・

ならば、

「なる程な、ならば見えたぞ。勝利への道筋が」

「は？ 親父、何言つて・・・」

「おい、焦凍」

「なんだよ」

「聞くが、あの首輪が押さえになつていてるとヤプールは言つていたのだろう？」

「・・・ そうだが、それがなんだ？」

「なら、勝ち目はある。ゼットンのだが、引き出せる」

「・・・ 助けると言う事？」

「助けるの？」

「勿論。だが、コレは賭けだ」

「な、親父！」

「・・・ 信じなくとも良い。ただ、俺を見ていてくれ」

「・・・ ククク、足がすくむ。本能的に行きたく無いと思つてしまふ。だが！ 男にはやらねばならぬ時があるので！」

さて、行こうか！

俺は個性を使わず、自らの足で向かいそして、

「ピポポボボボツ！ シュンシュンシユンツ」

「おい」

「——ツ！ エンデヴァー、貴様どう言うつもりです！ 貴方は拐われた者達を……」

「……やはり、気付いていたか。なら、話は早い。賭けに出る……見方によつては部  
が悪いが俺にとつてはそれで十分弱体化出来る！ 俺を信じてくれ、頼む」

「……その目だと、大丈夫そうですね？ なら、弱体化は宜しくお願ひしますよ、エンデ  
ヴァーさん？」

「ふ、任せろ」

・・・俺の考えが正しければ。あいつは、志村奈菜の正体は。

？個性は異次元人と太古の地球に侵入していく精神生命体の仕業か！？

？精神生命体、正体判明！ 炎魔人キリエル人！？

？キリエル人は女性！ 彼女は何をしにこの星へ来たか？？

・・・この資料に信憑性がある。例え意味の無い事だとしても、やる価値がある。

それこそが、俺が理想とするヒーローだ！

『お前は何だ？ 何の真似だ？ 貴様』ことが我々の敵になろうと言うのか？』

「……そうだろうな。お前には俺は雑魚にしか見えないだろう。・・・フフフ、だから  
こそ、だ」

『・・・？何を言つて・・・・』

「慢心した高次元生命体に用は無いんだよ！・・・おい、志村奈菜！お前の正体はキリエル人だろう！」

『——ツ！貴様あ！・・・止めろ、止めろお！』

「フフフ、当たつているだろう？ヤプール！」

やはり、志村奈菜の意識は目覚めさせられる事が出来る！ならば、「おい！志村奈菜、いやかつてキリエル人だつたものよ！お前はヤプールと敵対していたのではなかつたか！」

「・・・」

チツ！決定打にはならんか。

なら・・・・ツ！右下からのハイキック！避け——それは凹か！右ストレートが！くそ、何とかどちらも避ける！

左に体を持つていきハイキックを避け、右ストレート腕を前に持つていき、掌を当て受け流す、余計な力を使わずに、横へ流すように据えるだけ！

——良し！避けた！

『・・・・クソ、よけられたか！虫けら風情が！』

なんとか避けたか。だが、次はどうする？ 考えろ、思考を回転させ・・・いや、こ

う言う時こそ畳み掛ける！ それに限る場合もある！

「・・・超常黎明期に個性発祥について信用出来る内容を書いていた、とあるオカルト雑誌があつた。そのオカルト雑誌の内容の一部が高校の教科書に載る程だ！ そこに貴様の写真が載つていたぞ、志村奈菜！ オールマイトに見せて貰つた写真の人物と瓜二つと言ふより、同一人物と言つた方が良いレベルでな！」

「――ツ。 オー・・・・ルマイ、ト」

「そうだ！ お前の弟子のオールマイトだ！ そいつは――」

『わめくのならば、全ての記憶を消し去つてやる！』

何だ？ 奴の手が光つて・・・

「その光を見るな！ 後、そして光を放つている右手にストレートブチ込みなさい！」

訳が分からんが慌てて、目を塞ぐ。そして言われたままに右ストレートを打ち込む！

その時、大規模な爆発が起つた。

『・・・なんて、無茶苦茶な！』

「それはお互い様だろ？ そしてエンデヴァーさん。今の光を見ると見た対象の記憶を全て消し去つてしまふ怪光線だつたです。 アイツが教えてくれたんですよ、でも対策はあなたのお陰で容易でした！ 素直にしたがつたくれて、ありがとうございますね！」

・・・・マジかよ。そんなヤバイやつだつたのか。

《――ツ。何処まで我々を虚偽にすれば、気が済むのだ初代ゼットン！見たのはこのプロヒーローと貴様を入れて十五人中十一人で、コレは一秒以上見なければ完全な効果はない！精々今回の出来事を完全に忘れるだけだ！》

「そうでしたつけ？なーんだ、拍子抜けしたわね？そして、左右両方でリキヤストタイムは二時間だった筈ですね？」

なら左手には炎の纏つた拳だ！

《――おのれ！人間風情が！》

「・・・なる程、腕に炎を纏わせる事が出来たのか。だがな！防げたぞ！」

「・・・これで、光は使え――」

・・・・何だ、奴の腕の再生途中である事を示すであろう赤い炎が、青くなつて、

《フフ！》

ズリュ！

・・・・な、なんだ？衝撃が、突然来て・・・なる程俺の顔の左・・・側が抉れたのか・・

意識が、無くなつてだが、やれる事は・・

「・・・フフフ、あれは無理、惜しかつた、残念とはならないだろう？まだだろうプロヒー

ロー！」

「ここまで魅せておいて、退場はあり得ない！　この宇宙恐竜をここまで魅せさせておいて、ここまで来てアンタはそれで、ここで終わりでねえ、ダメでしょう！　そうでしょう、エンデヴァーさん！」

「……俺はまだ・・・クソ親父、あんたを追い越していい！　まだ、あんたを見ていないと！　だから・・・負けるな、勝てよ・・・頑張れエンデヴァー！」

——いいや！　まだだ！　まだ、俺は！

「——死んでえたまるかあ！」

『な、何だと！　何故だと言うのだ！　人間風情が、ここまで！　一体何故？　何故だ！』

「——志村奈菜！　お前は弟子の、オールマイトの成長を見たくはないのか！　ここで諦めて良いのか！」

「——！」

「オールマイトは強いぞ！　俺が全てを掛けて這い上がつても、決して誉められる様な、手段を選ばない方法を取らなければならぬ程に、アイツは凄い奴だ！　ナチュラルボーンヒーロー、平和の象徴、No. 1ヒーロー！　アンタの愛弟子はここまで凄い事をやつている、なら！　師匠が見届けないでえどうするのだあ！」

「——とし、のり・・・オール・・・マイ・・・ト！」  
良し、反応したぞ！　それに、

「その青い炎はヤプール、貴様の再生能力では無いな！」

《！》

「見ていて分かつた！貴様の再生能力は恐らく赤い炎だろうよ。ならばその青い炎が制御できていないのにも、それで説明出来る！」

・・・・・ならば食らえわせても問題ない！

「食らえ、プロミネンスバーン！」

《その程度で・・・いや、まさか！》

・・・そう、貴様が狙いでは無い。俺の狙いは首輪だ！

「コレで、首輪は、外れたな」

《――ツ、貴様あ！》

「おつと、コイツも食らえ！」

《――ツ！》

今さら反応しようが、遅い！

プロミネンスバーンを右手に集中・・・熱い！腕が自分の個性で焼ける！

「親父！」

・・・だからなんだ？焼けるから何だと言うのだ！俺はオールマイトを越える、必ず越えねばならん。今のままではそれはなせないとしても・・・俺なりのやり方で、俺

なりの方法で奴を越える、越えてやる！

だからこそ、俺は今出来る全力を一点集中で、顔面に打ち込んでやろう！コレをなせば・・・

「これが、今俺に出来る全力だ！土壇場、新作必技プロミネンストスラッシュユ！」  
《ツ！ダメだ！避けら——がああああああああああああああああああああああああああ！》

良し、食らわせたぞ！しかし、倒せていない。弱体化が俺の限界だ、

《貴様あ、プロヒーロー！よくも、よくもやつてくれたなあ！だが、今まで限界の様だな。ククク・・・最後に、この我々を相手にここまで苦戦を強いた強者の名を聞こう。貴様の名はなんと言う？》

・・・・・コレは驚いた。俺の名前を聞くのか。フフフ・・・悔しい様な、嬉しい様な・・・不思議な気分だ。

「はあ、はあ、はあ・・・ゴホ、ゴホ・俺の名前は、轟炎司で、ヒーロー名はエンデヴァード。覚えておけ」

《轟炎司、ヒーロー名エンデヴァードか。覚えておこう、では死ねい！》

・・・・・後悔は無い。しかし、

(父親らしい事は・・・少しあして、みたかつたな)  
そして、死を受け入れ目を閉じる。

「——ならば、演者には最大限の称賛あつてしかるべき！ここで退場とはならんでしょう！」

・・・・・遠くで轟音が鳴り響いているのが聞こえ、痛みは来ず・・・足が地面についてない。恐る恐る目を開けると、

「ゼットン・・・ピポボボボボボボ・・・」

・・・宇宙恐竜が俺を抱いて立つていた。

フフ、良い物を見させてもらつたぜ。本当に、良い物をな。

「——ならば、演者には最大限の称賛あつてしかるべき！ここで退場とはならんでしょう！」

テレポートでエンデヴァーの元へ飛び、ヤープールに暗黒火炎を直接打ち込む！

《貴様！》

「次の相手はこの私だ！・・・しかし、ちょっとお待ちになつて？」

《ふん、良いだろうてつ、熱い！》

そりやねえ、暗黒火炎を至近距離からじや熱いでしようよ、そりや。さつてど、

「ゼットン・・・ピポボボボボボボ・・・」

「・・・・これは、一体?」

良し、エンデヴァーが起きた!

「・・・選手交代ですよ、プロヒーローさん?」

そして、コイツを落とす!・・・ついでに生命エネルギーを送るのも忘れずに。コレで死ぬ事も、失明もしないだろう。

「えーと、親父を助けてくれてありがとう?」

「・・・疑問系なのには目をつぶりましょう。この人に私の生命エネルギーを少し分けました。コレで彼が死ぬ事も、失明もしないでしよう。面倒を見ておやりになつてはいかがです? 後私の事はゼットンさんとお呼びなさい!」

「ああ、分かつた! ありがとうよ、ゼットンさん!」

はは、原作キヤラにお礼を言われるとは悪い気はしないな。

・・・・・さて、挨拶と行こうか、魔王。

「あんた何者ですか?・・・まさか、噂に聞く魔王様ですか?」

誰にも聞こえない、相手にしか聞こえない声量でコイツに言つた。コイツの顔は正に前世と今世合わせてトップに入るヤバイ奴の顔してる! ワンチャン、コイツ A F O だつたりして・・・

オール・フォーワン

そんな事を考えていたら、

《正解さ、お嬢さん》

テレパシーが飛んできた・・・終わつた！マジで、終わつた！本当に、本当に終わつた！短い人生だつたな。

《この個性は考えは読めないけど、悲観している感じかな？・・・僕は君に危害を加え

ないよ。さて、ゼットンさん君の本名は？》

《滅火羽織だ、A F Oさん》

《・・・》

さあ、どうする

《当たりだよ。やつぱり、君はあるのサイトのゼットンか！と言う事は本物のゼットンだつたか！・・・因みに僕もA F O・・・君の言うところの魔王本人さ！普段は悪事をしながら、あのサイトの管理人をやつている。それにしても本物のゼットンだつたか。やつぱり、ユーナームを新たに考えるのは面倒くさいか・・・僕の場合友のせいでオール・フォー・ワンと名乗る様になつたと言つても過言では無いから、当時は個性名をユーナームにしていたんだよねー。ハハハ、今じやちよつとした笑い話さ》

《大丈夫だよ。この個性で繋がっている場合は時間は気にする必要は無いよ。まあ、高

スピードでの会話とでも周りの時間より速く会話をしているとしても思うといい。楽しいだろう？・・・この個性を友人から受け取つて良かつた。当時無理矢理物々交換をするように言われてさ、まあ仲良が良い人達だつたから問題なかつたのだけれどもねえ少し・・・いや、色々あつてね。その個性達がちよつと僕と相性最高だつたのもあつて混ざつちやてさ』

### 『フムフム』

『・・・しかも同時に他二つそなつた個性があつて、血反吐をはいてしまつて・・・嫌な予感したんだよなあ当時は。まあそれで相手に伝えたい事だけを伝えられてかつ、超高速思考的なやつを脳に負担が掛からぬ様について言う高性能な個性になつて、他二つはそれ以上の強個性になつたから良いけど・・・当時は死を覚悟したね。自分の個性を当時しつかりと理解していればなと思つたね』

・・・もしかして、コイツ苦労人では？

『貴方今も苦労してます？もしそうなら美味しい珈琲の入れ方か、紅茶の入れ方を教えましようか？ストレス発散にちょうど良いですよ？』

『ありがとうございます！気遣つてくれたのは君が始まつだ！・・・コホン。じやあ紅茶の入れ方を教えて貰おうかな。珈琲は間に合つてるのでね』

と言う事で、前世でおいしかつた紅茶の入れ方（私はどちらも行ける派だ）を教えた。

前世では本当に世話になつたよ。

『……フム。僕は珈琲派だが、君はどちらも行ける派なのか。そう言うのもあるんだね。因みに僕は友に恵まれてね。好きな時に美味しい珈琲を飲めるのだけれど、この際だ紅茶も飲んでみようかな。そう言えば何故君はこのレシピを知つているんだい？ネットかな？』

・・・・・どうしよう。ああ、そう言えば、

『母が紅茶派なんですよ。ですので、教えて貰つたのです』

珈琲も作れるぞ、まあ両方独学だかな！因みに母親にコレを教えたら、

『お前は、まさか琴乃羽織か！……警察官でありながら、珈琲や紅茶、料理の本を出版した異質な存在！そう言えば、彼女は特撮オタクとしても知られていたな。特にウルトラマンシリーズが大好きで、そう言う本も出していたと記憶しているし、テレビにも出ていたな。うん、そのウルトラマンシリーズへの熱き思いはお前にも当て嵌るし、このレシピを何にも見ずに完璧に出来るのは考案者本人しか居ない！ファンだつたぞ！私、貴方の世界に潜伏している時に貴方の本を読んで自分のレシピをアレンジした事がある程だぞ、酒に酔つたきよいで本を三冊書き上げ出版し本場英國と米国で大ヒットした本の作者の転生者が私の娘だと？なん足る幸運だ！』

『ちょっと待て、なんだそりや――――！』

・・・・本がそんなに売れているなんて知らないぞ、本当に。本を出したのは覚えているが、全部親と妹に任せたから知らんし、そんな事言つてた事なんて、

『おい、愚かな妹よ！』

『い、いきなり何よ！』

『こんな出鱈目は止めろ！私の本がこんなに売れている訳無いだろうが！』

『・・・・本気で言つてる？』

『うん！』

『・・・・はあー』

・・・・ああ、あつたな。そう言えば、こう言うやり取りあつたな。

その後メールでレシピとか纏めておいてとか言われたつけな。今思えばそれ、新作本の出版依頼か。当時は特に考えずに新作レシピを書きまくつてたなあー。特撮（特にウルトラマンシリーズ）や娯楽が第一過ぎてそう言うの全然意識した事無いな、はあー。『どうしたのかな？大丈夫かい？・・・・まさか僕が知らないデメリットが！』

『大丈夫です!!心配ご無用!!イイネ?』

『アツハイ！・・・・コホン、君怒ると恐ろしいタイプか。こう言うタイプ程本当に怒ると恐ろしくなるんだよなあー。まあトラウマらしき事には踏み込まないでつと、今回僕は観客に務めさせて貰うよ。・・・・ただし君には死んで欲しく無いからこちらが危ない

と思つたら直ぐに割り込もう、良いね？』

『はい。了解しました』

コレは願つてもない事を言つてくれたな！

『ああ、そうそう』

ん？

『後でサインくれないかな？初代ゼットンさん、お願ひします！』

そう言えば、コイツ筋金入りのウルトラマンオタクか、私と同じくらいの。こう言う場面でサインとか・・分る！私も初代ウルトラマンにあつたら・・。

『貴方はやはり同士です！私も初代ウルトラマン会つたら絶対どんな状況でもサインを求めてします！分かりますよ！』

『分かつてくれるかい！さて、そろそろかな？』

『・・ええ、お相手の本当の準備が整つた様子で。気分転換の時間を下さりありがとうございます。サインは後日で良いなら、お書きします』

『ああ、何時でも良いよ！――さあ頑張れ、宇宙恐竜！』

さて、行くとしようか。

ハイパー・ゼットン・テレポートであいつの眼前に、

「ピポボボボボボボボ・・・・・ゼットン・・・」

『来たか！……その姿が、貴様の本気の姿か、ハイパーゼットン！』

「その通り……お前には時間が無いだろう？後、その憑依はその身体をボコボコにすれば解ける！」

『フフフ、バレたか。その通り、我々には時間が無い。あのヒーローエンデヴア－のお陰で大きな損害を被つたが、再生能力は無くなつておらん。どうする、宇宙恐竜よ？』

「……決まつている」

私の歩幅で目測でだいたい十歩分はあつた筈の距離を一步で詰める、滑る様に移動する『活歩』の歩法。

「お前は……その動きは見きつた！ と言う」

『その動きは見切つた！——ツ！グ、ゴファ！……フフフ、殴り合いかあ！だが、貴様の負け試合だぞゼットンよ！』

「そうだろうかな？——ガ！、ゲホツ！、けふつ！、ゴホ！、……つ！、……チツ！

一撃一撃が重い！だが！

『ゲホツ、ゴホツ、かはつ、くはつ、……つはあつ！』

それは、相手も同じ事だあ！

「我慢比べと参りましょかあ！」

『――望むところだあ！』

ドゴツ！、ドスツ！、ボスツ！、ドンツ！、ボコツ！、ボゴツ！、ガツ！、ポスツ！、トスツ！、ドグツ！、バコツ！、ゴツ！、ドツ！、グオツ！、ブシツ！  
 「グホツ、ゲホツ、けふつ、ゴホツ、ゴアツ、ガツ、アガツ、グアツ、グアアアツ、ドブアツ……はあ！」

《グツ、かはつ……、グウツゲホツ、ゴホツ、かはつ、くはつ、つはあつ！、ぐおつ！、ぬあつ！、う”つ！、くそ、再生能力が——ツ！まさか、いや負けるかあ！》

くそ、ブーストされたか！だが、だが！私は！

「お前は確かに強い……しかし、私は宇宙恐竜ゼットンだ！……それにあの戦いで貴様の再生能力の限界を見た！ならば！」

こちらもブーストだあ！

(なる程ね。真つ正直からの殴り合いを更に加速させた。コレではゼットンが不利……と見えるだろうね、普通は。フフフ、見ていて楽しいなあ！宇宙恐竜よ！)

ドカツ！、バキツ！、ガガ！、ガギツ！、ボゴツ！

《——押し負ける！我々が、こいつにい！》

「げほ、げほ、ごほ……」

「親父！大丈夫か！」

「焦斗……アレをどう見る？」

「・・・ゼットンが不利だと思うが。親父増援を！」

「無理だ、こここの建物の中に入る時に結界らしき物が張られた。・・・・・恐らくオールマイトでも破れん。しかし、それはもう問題ではない」

「は？――ツ！」

「気付いたか、焦凍。そう、あの殴り合いをヤプールが受けた時点で――  
気が遠くなる。意識が途切れそうになる、苦しくなる。

・・・だから？だからなんだ？私は、私は――

「お前に再生能力があるのならば、必ず限界がある！ヤプール、お前が力で私を倒そうとするならば、更なる力でねじ伏せよう！」

右ストレートは右手で相殺！左上からの拳は頭を右下に回して回避！蹴りには蹴りで返す！フフフフフフ・・・・奴の炎が青く――迫ってきた火炎には火炎をぶつける！

《・・・ぐ！オオオオオオ――》

とつ言つても私にも余裕な無いけど、ね！

《おのれ！》

拳に暗黒火炎を纏わせて、ストレートでえ殴る！炎も、拳も突き破り、

「ヤプールよ、こんな言葉を貴方は知つてらして！ 更に向こうへ、Plus Ultra

a！」

『——ツ！おのれおのれおのれおのれおのれおのれえ、ゼットンめえ！』  
ふつ！・・・『は

勝つたぜ！彼女の身体からヤプールが抜けたぞ！彼女は彼女で息してる！やつたぜ  
！

『くそ、ここは引かせてもらおう。さらばだ、ヒーロー共！フフハハハハハハハハハハハハ！』

・・・・・ヤプールの精神態には逃げられたか。

まあ、良いかな。・・・終わった、

「S  
M  
A  
S  
H!!」

は？・・・まさか、

「ナチュラルボーンヒーロー？・・・マジ？」

「・・・たぶんな、オールマイトだろう。アイツらしいな」

（・・・奈菜、僕は少し心配だ。キリエル人から人になつた君がO-F-Aを継ぐと言つた時は無理をしないと言う約束をしてどうにかなつたが、弟子を取る事になつた時に随分と心配した物だ。まあ、君が有能だと言つっていたのなら信用でk）

「親父、結界は？あるんだろう？」

「ぶち壊すと言う感じでは無いか？ヤプールが倒されたので、結界は弱くなっているだ

ろうからな……そうでなければ、たぶんずっとぶん殴っていたのでは？その方があい  
つらしい」

（……まあ、大丈夫だよね。うん、そうだよね。君が信じた存在だしね、うん。大丈  
夫——）

「私が、空から来た！」

その時、空からマツスルが降り立つた。衝撃が辺り一面に吹き荒れ、キリエロイドが  
飛ぶつて……ぶつ飛んだ！不味い！

あ、オール・フォー・ワンが子供の姿のままキヤツチして潰された！  
(君がキリエル人だつた時からの付き合いである僕は君を信頼しているが奈菜、一言言  
わせてくれ。……君は見る目が無いのかあ！)

《そんな訳無いけど……まあ、久しぶりオール・フォー・ワン》

《…………やあ、無能で愚かな志村奈菜》

《な！》

《この筋が！》

《…………何で、私をバカにするんだ？それより、私はどういう状況に置かれているの  
だ？確かに、ヤプールの策略にはまつてお前に殺してもらつた筈……》  
《僕の記憶を覗けば良いのでは？君なら歓迎さ！》

『なる程……なら、早速……やらかしたく！くそ、迷惑掛けた！お詫びとしてウルトラ銀河伝説～ウルトラマンZまでの映像データと資料を持つてくるから許して！今はヒーローでは無いから絶交は嫌だ！』

『ウルトラマンの新作。何でもするからください、お願ひします！……まあ、それよりも退いて、重い』

『あ、ゴメン。……後お詫びとか、何でもしなくて全部やるから好きに見てくれ……さて、どうしようかな？この状況を。

## オールマイト・オリジン

あれは何時の話だつたか。・・・そうそう確か、私がまだ小学生低学年だつた頃の話だつたと思う。

あの出来事は今でも忘れられない、否・・・忘れたくない、大切な、私が平和の象徴となりたいと思うようになつたオリジンたる出来事だ。

・・・私はあの時家族と共にとある山にキャンプに行つたんだ。その山は大きな湖があることで、そこには怪獣が眠つていると当時良く噂されていて都市伝説にもなつていつたんだ・・・私は当時その噂を信じていなかつたが。

当時私は湖に行つてみたいと親に言つたのだが、駄目だと言われてしまつた・・・しかし、私はそこに向かつた。

その理由は今思えば、子供らしい幼稚な理由と今だから言えるが・・・よく私と仲良くしてくれているとある少女が自分の個性を使つて壁をすり抜けて現れたのをビビり散らかしたら、バカにされたと言うのが理由だ。

その彼女は当時から大人びた雰囲気をしていて、彼女は生まれつき比類なき勘と類稀な幸運を併せ持つてゐるんだ。

その勘は何でも勘で言い当てる事が出来る程出来て今でも私が助力して貰う為に会に行く程だぜ！

・・・さて、彼女の個性の特徴についてより詳しく説明しよう。

彼女の個性は『空を飛ぶ程度』の個性と言うのだが、コレは彼女に出来るだけ秘密にして欲しいと言わっているのだが・・・空を飛ぶ能力とあるが、正確には何事にも縛られないという意味で、最大限に使うと存在自体を浮かしたり、物のすり抜ける事が出来るらしい。

・・・コホン、話を戻そう。

勿論、当時子供だった私は不機嫌になる・・・その私の様子を見ていじめられたと誤解して心配していた私に親にいじめられてない事を証明する為に学校での出来事を私は親に話した 私は当時仲の良い友に恵まれていた。。

そしたら、そのキャンプ場がある山に関する言い伝えを話して貰つたんだ。

その言い伝えは、

？ 悪しき異界の呪術者の手で墓場より蘇りし怪しき獣、ここに封じん？

と言うもの。

・・・より詳しくその言い伝えについて話すと戦国時代に異世界より現れた呪術者  
魔頭鬼十郎まとうきじゅうろうと言う悪しき存在がこの世界を我が物にする為に怪獣墓場と言う場所から

もう死んでいる存在を召喚させ、暴れさせていたそうだ。

そんな時キリエルの巫女と名乗る者が民衆の声に答え、異世界から呪術師を封じる事が出来る程の大剣豪錦田小十郎景竜を連れて来て、その大剣豪が怪獣を湖に封印してしまつたらしい。

更に親に見せてもらつた写真にはそこにあつた古い祠の壁画には全身が蛇腹の様な凹凸に覆われていて、高さを強調する様に足元から頭頂部への体形は細い外見をしている怪獣が描かれていた。

あまりにもうさん臭いので当時は信じていなかつたのだ・・・それが事実なのにも関わらず。

私はそのキャンプの話をイタズラしてきた少女に話し、家族ぐるみで行く事になつた・・・そして、前述の通りで私達二人は湖がある場所へと向かつた。

柵は私達が子供だつた為にその下を潜ることが出来た。

・・・湖に向かつた私達を直ぐに嫌悪感が襲つた。生命力を吸われるような、急激に疲れていく感覚と言うべきか何とも発言の仕方に困る現象に陥つてしまつた。

「・・・封印が破れている。嘘でしょ、何故！」

彼女は封印は溶けるとしても後百年は大丈夫だと自信ありげに宣言していた・・まるで結界と言う物について知り尽くしていると宣言している様な感じだつたな。

それにこの封印は星の生命エネルギーを循環させ、更に抑止力を押さえに出来る祠を設置する事で強力な結界を維持していると親に見せて貰った資料に書いてあつた。

だからこそ彼女は結界の要かる祠の寿命が百年後だと宣言した。

・・・だからこそ狼狽えていたんだろう。

祠は完全に破壊され、封印は何者かの手によつて破られた後・・・そして湖は怪しく輝いており、私達は逃げようとした。

「ピイギヤアオオオ」

湖から鳴き声が聞こえ、湖から丸い何が浮上してきた。

・・・浮上して来たそれはドクロの様な顔をしていた。

その怪獣は浮上してから、

「ピイギヤアアオオオオオオオオオ」  
と鳴き祠跡地を殴つた。

更に、

ドン！ドン！ドン！

ドン！ドン！ドン！

何度も同じ場所を殴り続け、ついには――

――、つちを見てる！早く逃げるわよ！早く、俊典！」

「靈夢君……うん、分かつた！」

「その言い方は止めなさいよ！——ツ！危ない！」

彼女は言うが早いか私を突飛ばし、自分も突き飛ばした方向へジャンプした、その時……私達が居た場所に大きき岩が落ち、私達が向かおうとした出入口も大岩に塞がれた。

……どうやらかの者は我々を逃がすつもりは無いらしいかつた。

「……俊典、逃げて」

「は？……逃げるなら一緒に——」

「甘つたれた事を言うな！貴方だけなら逃げられる！それに……私の足じやもう無理よ」

言われて彼女の足を見ると碎けた岩に挟まってしまっていた。

……確かに彼女を見捨てれば、私は生き残れる。小さい時から足は早いし、力も強かつた。

だが、

「やだ！」

「どうしてよ！骨は折れてない、だから——」

「君が泣いているから、助けて欲しそうな顔をしているから……それに友達を見捨てたくないんだ！」

そう、彼女を見捨てたくない・・・私は当時そう思つた、そして今もそれは間違いだ  
と思つていない。正しい行いだと胸を張つて言える。

しかし、怪獣は今だ健在。

私は震えて彼女の前に立つ・・・無理なのを承知で守る為に、前に立つ。  
「ピィギヤアアオオ？」

そんな私を怪獣は不思議そうに眺めた後に覚悟があると受け取つたのか確実に私達  
を殺そうと拳を振り上げた。

迫り来る死を前に私達は目を瞑る・・・しかし、痛みは来なかつた。

・・・目を閉じていてる時に大きな物が湖に衝突する音が響き、明るい光が私達を照  
らしているのが感じられたので目を開けると眩くされど暖かく優しい光を放つ赤き球  
体が空に浮かんでいた。

そして、光が收まるとそこには身長50メートル、赤と銀の体、胸の中心に青く光り  
輝く丸い球体を持つ巨人が立つていた。

『もう、大丈夫』

巨人が敵か味方か分からぬ・・・しかし、安心出来る声色で彼はこう続けた。

『私が来た』

そう続けた後に巨人は怪獣と相対し、睨みあつた。

先に動いたのは怪獣の方だった。

新たな大岩を拾い上げ、頭上に構えた――

「ジユワツ!!」

すかさず巨人はチヨップを首に加えたが、堪えた様子は無い。

怪獣は巨人には目もくれず、私達を殺さんと大岩を投げようとするが・・・私達を見て首を傾げ、少女を見る。

私はどういう意味か分からなかつたが・・・少し思い付いた事があつたので少女に聞いてみる。

「・・・靈夢」

「何?」

「今回の鍵は君にあると思う」

「なる程、そして私に疑問に思うところはあるか聞きたいのね」

私は驚きを顔に表した。

「勘でもあり、付き合いが長いからと言うのもあるわ。そして答えも出てる・・・恐らく

結界が何者かの手によつて無理やり破つた犯人が私だと警戒しているんだと思う」

言われて怪獣を見ると私達を警戒している様な、見定めている様な気配を感じた。

『話し聞かせて貰つた』

脳内に先程の声が聞こえる・・・見れば怪獣にも聞こえている様だった。

『少女よ、君の考えは恐らく当たりだろう。先程からこの怪獣・・・レッドキングは君達を殺していない。本来レッドキングの気性ならば君達を殺していても可笑しくは無い』  
「なら、倒さなくともいいの？」

「それは無いわね。コイツ・・・レッドキングとか言う奴はこの湖に近付いた者を何でも殺すでしようね」

「そんな！」

「あくまで私がこの歪みをどうにか出来ると踏んでるからこそ、私達は生かされているのよ・・・それにアーツはある巨人に容赦なく攻撃しているし、傷が回復し続けているわ」

確かに巨人が手に集めたエネルギーをギザギザした光輪状にして相手へと放ち腕を切り飛ばしても直ぐにくつついてしまい、首をへし折っても直ぐに治ってしまった。

レッドキングは苦しそうに身体を屈める。

巨人はそれを見て狼狽えて攻撃の手を止めてしまう。

「ゼ・・・アア・・・ッ!」

そして狼狽えた所を強力な正拳突きを腹部に受け、後方に下がってしまう。

『頼む、君達の力を貸してくれ』

「歪みをどうにかして欲しいと言う事？……なら大石と足をどうにかしてちょうどいい」  
 ……レッドキングは話を聞いて少女を見ている。

巨人は頷き何かを念じて大岩を浮かした後に目から光を放ち何と少女の足を治してしまった。

「約束は……守らなければね」

そう言うと彼女は目を閉じる……すると彼女の身体が輝き、空間が澄みわたった感じがして心なしかレッドキングも物凄く元気になつた気がする。

「ピイギヤアアオオオオオオオオオオ」

と鳴き、こちらを向きお辞儀した後巨人に向き合う。

相対す巨人も頷きながらこちらにサムズアップした後に腰を落とした著しく猫背の体制となつた……ここから彼の気配のような物が変わり、本気になつたのを感じた。  
 「ピイギヤアアオオオオオオ」

レッドキングの拳を手で払い落とし、かの者の腹に自らの拳を打ち込むが――――

「ツ！ ジュワッ！」

レッドキングに捕まれ掛けた後方に飛ばうとするが、アツパークットを食らつてしまいよろける。

「ピイギヤ！ ピイギヤア！」

コイコイとレッドキングは巨人に合図を送るが、

——ピコン、ピコン、ピコン。

急にタイマーの様な音が聞こえる。

レッドキングは巨人を眺め心配そうに近づくが、巨人に手で制される。

『私は地球上では3分間しか戦えない。……ここからは全てを掛けてレッドキング——

——君を殺す』

……気迫が感じられた。歴戦の戦士そう呼ぶに相応しい気迫が。

『だからこそ君も手加減せずにかかるてこい』

「ピイギヤアアオオオオオオオオオオオオ！」

《——良し、こい！》

レッドキングは手加減無用でラッシュを仕掛け、巨人は躊躇しながら腕を突き出して緑色の渦巻き状の光線を放つが決定打にならず。

レッドキングは雄叫びを上げて巨人の顔を殴り飛ばそうとするが自らの腕を掴まれ投げ飛ばさるが、巨人の腕を掴み頭突きをお見舞いして怯んだところを踏もうとするが蹴り飛ばされる。

レッドキングが巨人の胸を殴るが巨人は大胸筋で撥ね飛し、殴ろうとしたところを畳み掛けられ後退する。

「二人とも楽しそう」

「そうだね・・・後もう少しで決着が着く」

余裕綽々と言う感じのレッドキングはふらつき始め、巨人も弱っている。

——その時両者が動いた。

巨人は十字型に腕を組み、右手部分から光線を発射し、レッドキングは岩石を三個纏めて巨人に放つた。

レッドキングは光線を浴び倒れ、巨人も大岩三個を諸に食らいしやがみこむ。

・・・レッドキングは立ち上がったが、膝をつく対して巨人は立ち上がり胸を張つた。

——勝敗が決した瞬間である。

レッドキングは満足そうに頷き、私達を見詰めた後目蓋を閉じて崩れ落ち爆発した。巨人には湖に満ちたエネルギーが優しい輝きと共に集まり、彼の胸の輝きは蒼き光を取り戻した。

「こここのエネルギーは今ので尽きたわね」

『・・・分かるのか?』

「勘だと思います」

彼女はサムズアップを私にしてきた・・・私は渾身の笑顔を見せたら彼女も笑ってくれた。

『さて、私はもう行かなれば』

「またこんなのを解決しに行くの？」

『ああ、それが私達宇宙警備隊の使命だ』

「……宇宙つて大きく出たわね』

『フフフ、我々宇宙警備隊は宇宙の助けを求める者を守る為にある組織だからな』

それを聞いて私は啞然とした。

だって宇宙だぜ！

私はこの星のヒーローにすらなれていないので、彼は宇宙の平和の象徴となつてゐし、口だけでは無いのは先程証明された。

『じゃあ』

「——あの！」

氣付いたら声をかけていた。

『少年、何かね？』

巨人は静かに耳を傾けてくれている……少女は静か私を見つめる。

「僕も、貴方の様なヒーローに——」

『無理だろうよ、君は地球人で異星人ではない。そう言えば少年よ君の名前を聞いてなかつたな』

私の名前を知りたがつた……何故と言う疑問を感じながら私は答える。

「八木俊典です」

『貴方の様なヒーローになりたいのか?』

『……私が死んだ事があつたとしてもか?』

『……この時思考停止に陥つたのを今でも覚えている。』

『死んだ回数は一回……ゼットンと言う最強の怪獣と相対し私は完膚なきまでに叩きのめされた』

彼は静かに、何かを私に伝えようと話を続ける。

『如何なる技も、今まで培つてきた経験も何もかも通じずに……果ては自らの必殺光線をはね除けられて、私は死んだ』

「……何時の話よ、それ」

『もう一万里以上前になるかな。そうそう、長い話になるが私の話を聞くかね?……とその前に』

巨人が光輝く……光が収まつたらそこには見知らぬ男が立つていた。

「……急に姿を変えて驚かせたのは申し訳ない。そう言えば自己紹介をしていない。……遅くなつたが私の名前はウルトラマンと言う』

彼『ウルトラマン』は自らが地球に降り立つた理由や科学特捜隊員ハヤタ・シンとの出会い……その地球の出来事について優しくそして丁寧にしつかり教えてくれた。

「平和の象徴と言うべき存在じやない貴方」

「うん！すごいですよウルトラマンさん！」

そう言われた彼は真剣な顔で左右に首を降つた。

「科学特捜隊の皆が居たから勝てた敵の方が多いし、私は一番肝心な、負けてはならないところで敗北してしまった……でも、負けて良かつたのかも知れない」

何故？どうして？死んでしまったのに何でそう思うのか？当時の私には理解できなかつた。

「地球が蹂躪されるからではないでしようけど、どうしてよ？」

「ゼットンが人間の力で倒されたからさ」

「は？」

そりや理解など出来る筈も無い。

ウルトラマンが人間を超越した存在である事は先程の話から分かるし、それが嘘では無いのはあの戦いを見ていれば明らかだ。

……だからこそ、信じられなかつた。

「……私達ウルトラマンは神では無いのだ、負けもすれば死にもする」

「・・・」

「・・・それで？」

「さつきも言つたが私は科学特捜隊の皆と共に戦つてきたんだ。・・・彼等は私に依存しなかつた、共に戦つた同士で戦友だ。彼等は私が居なくとも地球の平和を守る為に懸命に戦つて、ゼットンを倒したのは当然の結果に過ぎない」

・・・彼は自信たっぷりにされど自慢げに笑つて、  
「私は何とか生き返る事が出来たのさ。・・・さて、八木俊典君。やぎとしのり君はヒーローが必要だ  
と思うかい？」

と私を試すかの様に言葉を続けた。

## 回想＆過去編2：平和の象徴と宇宙恐竜前編

・・・どうしようかな、この状況は。

まあ来ては欲しいと思つていたけれども、今来るか！

今更過ぎるよ！

うん、どう見たつて全盛期としか言い様が無い雰囲気しているな。

そりやあ A<sup>オール</sup> F<sup>・</sup> O<sup>・</sup> がジャガイモ梅干しヘッドじやない時点で原作前だと分かつてはいたけどね。

・・・・・原作加入どうやつてすれば良いのか分からいんですけど。

恐らく原作開始五年前と言つたところかな・・・。

最適解はデク君・・・緑谷出久と同世代で雄英高校に入る事だ。

しかし・・・。

雄英<sup>ゆうえい</sup>高校<sup>こうこう</sup>

確か原作設定だと世界総人口の約8割が何らかの特異能力「個性」を持つ世情に個性の悪用による反社会活動に身を投じる犯罪者勢力『ヴィラン』への対抗勢力『プロヒーロー』の養成学科を有する日本トップクラスの高校だったと記憶している。

折れない心を育て弛まぬ努力に打ち込む事で限界の殻を打ち破る  
「P<sup>ブル</sup>u<sup>ス</sup>u<sup>ルトラ</sup>l<sup>ラ</sup>t<sup>ラ</sup>r<sup>ア</sup>a！」（意味は更に向こうへだつた筈）と言うの校訓の下に第四世代N.O. 1ヒーローオールマイト並びにN.O. 2ヒーローエンデヴアーレを筆頭に多数のスーパーヒーローを排出した実績とネームバリュード、ヒーローを目指す日本全国の中学生の憧れの的となつてゐる名門中の名門と言う設定だつた気がする。

・・・そう言えば所在地は不明だけど麗日の人事物紹介に「雄英高校入学のため上京した」とあつたから所在地は東京かその付近だと思うんだよね――

「Hey!」

うん？

「Hey、Hey、Hey！大丈夫かい！カッコいい格好をした少女！・・・もう大丈夫！何故つて？それは、私が来たからさ！」

暑苦しいが物凄く安心するなあ。

うん、安心するんだけども私には・・・ジャンプ読者として、ウルトラマンと言う正義の守護者を殺した身としては確かめたい事があるのだ。

それは・・・

「貴方は何時も一人で戦つているのですか？オールマイト」

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

↓↓↓↓↓

先ずは自己紹介といこうかな。

私はオールマイト。

自慢じゃないが世間では存在が敵犯罪の抑止力とされていて、”ナチュラルボーンヒーロー”、”平和の象徴”と称されている程の超有名人なんだぜ、私は！

先ず初めに個性と呼ばれる物について説明しよう。

### 個性

その出来事の始まりを超常黎明期と言う。

人類社会で超常を発現させる者たちが突如増えだした混乱期を指す言葉だ。

当時の事は資料にはあまり残ってはいないけれども、高校生の時にある程度習う事が出来る。

その内容は以下の通りさ。

人類社会において超常能力の存在がフイクションでなく現実のものとして国際的に認められたのは、中国の輕慶市で「発光する赤児」が生まれたニュースだとされており、この報道がなされた日時が超人社会の始まりとされている。

この時代は徐々に特異体質となるものは増えていたものの、まだ超常能力を持たない人類の方が多いかった時代である。

個性の始まりはこの時代では超常能力のことは『個性』ではなく『異能』と呼ばれており、すなわち人類社会において「普通とは異なるもの」という扱いであった。

現代に置いて『異能』が『個性』と呼び変えられるようになつたのは、当時はマイノリティだった超人たちが後にマジョリティになつてしまつた逆転の歴史を表していると言われている。

現代では『個性』として受け入れられている能力も、黎明期は異能と呼ばれ、覚醒した者は、良くて遺伝子病患者、悪ければ異形の怪物扱いを受けて差別され、個性を悪用して犯罪に手を染める者も増加していた。

そんな中、他人の個性を自在に奪い取つて自分の物とし、更には他人に個性を与えるというその個性を用いてとある存在が暗躍していた。

その存在の名はA-F-O。  
オール・フォー・ワン

奴は超常現象が起きて間もない時代に多くの人々から個性を奪い、計画的に人を動かして悪行を繰り返し、勢力を瞬く間に拡大して悪の支配者として日本に君臨した私が知る限り最大級の巨悪だ。

奴の個性はA-F-Oと言う。  
オール・フォー・ワン

他者から個性を奪い自分の物にして使え、それを他者に与える事も任意にできる個性。

奪つて自分の中に収めた個性を自由自在に管理出来て、更に複数の個性を組み合わせて同時に発現させることもできる。

・・・本人の才能によつてか、数々の個性を適切な力加減で操作し、複数の個性をバランスよく組み合わせて発動させる事も簡単にやつてのける。

この力を使つて実験も兼ねて他人の身体と人生を弄ぶ傍ら、当時個性に悩む人々を救済して意図的に恩を売り続け、敵対者は圧倒的な力で消し去り、人々を恐怖と畏怖の念で支配下に置いていた正真正銘の化物であり、正に『魔王』と言うべき存在。

コイツは私のお師匠・・・母親とも言える大切な存在であつた志村奈菜を殺害した怨敵であり、私の個性の産みの親でもある。

・・・話を続けよう。

オール・フォー・ワン

A\_F\_Oは個性を奪う個性によつて、人類に個性が次々と発現したことで社会秩序が崩壊した世界で、時に個性を奪い、時に相手が望む個性を与えるなどいち早く混乱した日本の秩序を回復させることに成功した。

その反面、人々を自分の手駒となる様に洗脳し、恐怖で人々を支配することで悪の力リスマとして裏社会に君臨した。

そんなA\_F\_Oに対して、真っ向から対立したのが彼と血を分けた実の弟であつた。

虚弱な上に無個性と見なされていたの弟は、兄の所業に心を痛めながらも常に対立す

る姿勢を貫いたが、兄である A-F-O は「愚かな弟」と言いながらも彼を自分の仲間に引き入れる為に八方手を尽くした末に、弟に力をストックする個性を与えることにす る。

・・・ 実はそんな彼にも彼自身は疎か A-F-O さえ知らない、それ単体では何の役にも立たないそして地味な個性を与える個性を持つていたのさ。

そして力をストックする個性と個性を与える個性が混ざり合い、その結果個性を育て上げ、譲渡すると言う個性・・・O<sup>ワンド・フォー・オール</sup> F A<sup>ワンド・フォー・オール</sup> が誕生した。

大まかな概要是、

### ①個性の譲渡。

この個性は所有者が自分のDNA情報を持つた何か（髪の毛とか）を他人の体内に取り入れさせることによって譲渡する事が出来る。

因みに譲渡条件は現所有者側の譲渡すると言う意思だけあれば人種、性別、年齢、個性の有無など一切関係ないのさ！

・・・ とはいえば不相応な者がもらい受けても良くて「名刀を拾った素人」、悪ければ体が壊れて障害が残りかねず、何より O-F-A の存在理由を考えると後継となる人間は慎重に選ぶ必要があるのだがね・・・。

また、「ある程度育った人体に後天的に付与される身体機能」という性質上、継承者は

器の強化と同時に制御感覚を一から把握する必要があり、トレーニングは慎重に行わねばならない。

②代を重ねることに出力が増していく。

O F Aには「力を蓄える」という機能がある。継承者は譲り受けた力に満足せず鍛錬する（そういう人物を選んで譲渡される）。そうしてより大きくなつた力を次の継承者が受け取る事で更に大きい物となり、次の誰後継者へ・・・。さて長々と話してしまつたので、次は私について話そう！

私がヒーローデビューする前はこの超人社会は今とは比べ物にならないほど混乱し、個性を悪用する犯罪が横行して人々は犯罪者の影に何時も怯えながら暮らしていた。

・・・私は出来るだけ多くの人々を救い出し、ヴィランを次々と打ち倒していく。その結果世間では私の出現前と後が一つの時代の区切りとされており、犯罪への抑止力となり『平和の象徴』と呼ばれる様になつた。

さて、自己紹介を終えた後で私の今置かれている状況を整理しようと思う。

・・・それは五年前起こつた非人道的個性特異点だけを対象とした連続誘拐事件について話さなければならぬ。

詳しく話すと長くなるので要点を纏めて話そう。

①魔王と思わしき人物リキユール（何故分かつたのかと言うと、さらわれた被害者達

に名前を聞かれ、取り敢えずの名前答えたらしい。因みに怪しい仮面を着けていて素顔は分からなかつたとの事だ）によつてまだ無事だつた人達が居るアジトが襲撃される。

②この騒ぎが原因で一般市民から通報が届きそのお陰でアジトの場所が分かり、私率いるプロヒーローと警察が現場に突入。

③突入した結果主犯格らしき人物はおらず、雇われた者ばかりだつた。

④そのほとんどが大怪我をしていたが命には別状は無く意識はあり、主犯格の目的については雇われた者達は知ら無かつた。

⑤更に奥に進んだ結果は、非人道的実験跡だつた。瓶詰めされた人間の腕、瓶詰めされた脳味噌、瓶詰めされた・・・ここから先は出来れば思い出したくない。

平和の象徴とも言われている私が逃げたいくなる様なそれ程に・・・本当にヤバイ状況だつた。

因みに私と一緒に見てくれたプロヒーローはエンデヴァーと言ふ人物さ！

日本ヒーローランキングNo.2ヒーローで、本名は轟炎司。（どろきえんじ）

個性は『ヘルフレイム』。

燃え盛る轟炎！炎を自在に操り悪を討つ！

身体中から炎を噴出しができる個性だ。

世間では炎系統では地上最強クラスと言われる。

出力は自由に調節でき、直接相手に浴びせる他、噴射の勢いを利用した高速移動、空中でのホバリングなど様々な場面で活躍する事が出来る。

・・・正直彼には助けられたよ。

彼が咄嗟に部屋を燃やそうとしなければ私は正気を保てなかつただろう。

そう言えばこの時は滅火瀬居さん**(ほろびせい)**に本当に世話になつたなあ・・・。

彼は不思議な人で、お師匠も良く世話になつたと言つてたけれど彼は一体何歳なのだろうか？

彼はお師匠が故意に飲ませたらしい若返り薬のせいで私がアメリカに行く時は小学一年生と変わらない年齢になつてしまつっていたので、今は外形年齢三十六歳くらいだと思われる。

・・・うん、彼には五年前の事件の際には本当に世話になつた。

『オールマイト』

『・・・瀬居さん申し訳ない、私が居ながら――』

『いいや、良くやつてくれたよお前は。・・・ここは俺等に任せて、お前は他のプロヒーローにここに近付かない様に言つてくれ』

『・・・お二方はどうするので？』

『俺の嫁はこう言う事は本当に頼りになるし、俺も若返る前・・・つまりはお前がガキの

時から同じ事やつてるんだよ。だから心配するな』

『しかし……』

『お前は平和の象徴だろ？こんな事でコンディションを崩して、お勤め果たせなくなつても良いのか？』

『・・・分かりました！ここは任せます！』

『うん、それで良し。頑張れよオールマイト』

『はい！』

うん、世話になつたよ。

この後彼等から連絡があつて今回の事件で解剖被害にあつたのはヴィランや路地裏の小物を対象としていたらしく、あと一歩リキュールと名乗る者の突入が遅ければ堅気の皆様が被害にあつていたかも知らなかつたらしいよ・・・防げて良かつた、本当に。うん？何故五年前の話を今したのかだつて？

H A H A H A ! 勿論今回の件に関係あるからさ！

実はついさつきエンデヴァー事務所に所属するサイドキックが訪れてね、その時に今回の方を聞いたのさ。

・・・今回の件は五年前の事件と同一犯の可能性が高いからだ。

コレについては、エンデヴァーのサイドキックから貰つた資料の内容を搔い摘んで話

そう。

- ① 対象となつたのは十歳ぐらいの子供達で、個性特異点に分類される程の強個性の持ち主達。
- ② 拁つたのは前回と同じ雇われたチンピラで、この者達は路地裏の小物や無名のヴィラン。

③ 本拠地としているであろう場所は三十年前に倒産した工場跡地で、夜な夜な呻き声が聞こえると言う理由で近所の者は近付かない。

④ 拁われた者の人数は14人。

・・・ ここだけの話、コレだけの資料を作れるのは瀬居さんしか居ないので?と思ふくらいの完成度だ。

瀬居さんと言えば確かに、瀬居さんの産みの親は国際的に有名だつた朝鮮人テロリスト集団“朝鮮半島歴史守護会”的所属していたらしいが、このテロリスト集団は六十年前にオール・フォー・ワンの逆鱗に触れて産みの親以外皆殺しになつたと朝鮮歴史館と瀬居さんの話から分かつた。

瀬居さんの話によれば、当時母親は日本人の父親と瀬居さんの教育方針で口論になり父親を殺そうとしたが返り討ちにあつたそうだ。  
その時に母親が仲間に助けを求める為に電話して、それに出たのがA  
オール・  
F  
O だつたら

しい。

A  
F  
O から、

オール・フォー・ワン

『“朝鮮半島歴史守護会”は僕が壊滅させたよ。何故って？それは簡単さ……貴様等が僕の堅気の友人達を傷付けたからだ。そつちから僕と言う悪党に喧嘩吹っ掛けといて無事にすると思ったか？……残念、君以外皆殺しだ。しかし、君は見逃してやろう』（脅しの為に母親がスピーカーモードにしていたので、この会話を聞けたらしい）

と聞いた母親は一時的に放心状態になつた後行方不明になつたらしい。

その後は再婚した母親と父親の二人に育てられ、警察官への道を進んだと聞いている。

……そう言えば、最近個性コールドスリープを持つた老婆がとある山の冷凍庫の中から発見されたと言うニュースを見たが、確か育ての親の個性がコールドスリープと瀕居さんから聞いたが、何もなければ良いが。

……話がずれてしまつた。

では、話を戻すか……うん？何処まで話したのだつけ？

ああ、そうだ！資料の話からだ！

コホン……資料はエンデヴァー事務所にボロボロの老婆の首根っこを掴んだ警察官から貰つたらしい。

サイドキックはこの資料からエンデヴァーだけでは解決出来ないかも知れないと自ら判断したエンデヴァーの指示で私の事務所に訪れたと彼女は言っていたよ。

そこで私はサイドキックに貰った資料に書かれていた場所に急行したのだが――

「・・・何だ、コレは」

そこあつたのは謎の赤い結界だつた。

廃工場の周りを謎の赤い結界が覆つていて、廃工場に近付けない。

しかも私の全力の拳を何度も何度も打ち込んでも効果もなく、逆に私の拳が痛くなつて血が出るほどに強固ときた。

・・・それでも私は諦める訳にはいかない。

何か手がないかと思い、結界の頂上によじ登つてみたら廃工場の天井に大きな大穴が空いていたんだ！

・・・何故か超高温でぶち抜かれたかの様な溶け具合を遠目から見ても確認出来るが、細かい事は気にならない！

その大穴から中を覗いて見たら・・・エンデヴァーの顔の左側が、敵少女（白少女と呼ぶ事にしよう）によつて抉られた所を目撃した。

「――エンデヴァー！」

私は急いで彼の元に向かおうと結界をありつたけの力で殴つて殴りまくつた。相変わらず結界はビクともしないが、エンデヴァーの元へ早く駆けつけなければ——

「——！嘘だろ！」

顔が抉れているのに・・・彼は倒れること無く、何かを叫び立ち上がつた。何を叫んでいるのかここからは確認出来ないが、並々ならぬ決意は感じる事は出来た。

彼はボロボロの体なのに・・・自らの個性で少女がしていた何かを破壊して、彼女に渾身の一撃を食らわせてダウンしてしまつた。

止めを刺されると言うところで白少女とエンデヴァーの間にテレポート的な物で現れた謎少女（こつちは黒少女と呼ぼう）が白少女の攻撃を防ぎ、黒き炎を白少女に向けて放ちエンデヴァーをつれて再びテレポートで撤退した。

その後は白少女と黒少女の殴り合いが始まつたのだが、私は黒少女に驚愕した・・・何故つて？理由は簡単さー！

・・・遠目から見て彼女の一撃一撃が私の100%以上の威力があるよう見えるし、同じ箇所を高速で繰り返し殴る事で敵の再生能力を上回つてゐる。

・・・彼女がヴィランになつたら最悪オール・フォー・ワンや私おも越える存在にな

るかも知れない。

それだけは避けねばならないと考えていたら、白少女から何かが抜け出したのを目撃したのだがソイツが今回の黒幕なのだろうか？

・・・結界が弱くなっている！

今だ！

「S  
M  
A  
S  
H!!」

良し、結界が破れたぞ！

「私が、空から来た！」

うん、反応は微妙だし白少女が白髪の少年の上まで吹っ飛んだが・・・後で謝罪しよう。

さて、

「エンデヴァーーー！」

「遅いぞ、オールマイト。まあ、貴様でもあの結界相手では仕方ないか・・・とりあえずお前に今の状況を教えておこう」

①十一人の子供達は今回の記憶が消されている。

②白少女はキリエロイドと言うらしい。

③主犯の名前はヤプールと言って、逃げた精神体がそれらしい。

④キリエロイドは現在消耗していて話を聞ける様な状況じやない。

⑤今回の最も活躍した黒少女はゼットンと言うらしく、私が来てから何やら考え方をして動かない。

「ふむ、挨拶してみよう！」

「・・・何かやな予感がする。気を付けろよ、オールマイト」

・・・彼の予感は良く当たる。

「分かった、身体に気を付けろよ。エンデヴァー」

「ふん、勿論だ。やかましい、早く行け！」

「分かった！」

さて、1kmくらいの距離かな？ならマツハで移動して声をかけてみよう！

「Hey！」

ポカーンとしている・・・どうしよう？

「Hey、Hey、Hey！大丈夫かい！カッコいい格好をした少女！・・・もう大丈夫！何故つて？それは、私が来たからさ！」

更に置み掛けてみたら、彼女の顔が暗く怪しく歪み・・・笑つた。

「貴方は何時も一人で戦っているのですか？オールマイト」

「・・・一体、何を言つて――」

「貴方は一人で平和の象徴と呼ばれる様になりましたよね・・・」

「・・・彼女は、何を言っているんだ？」

「そうだ。私は一人で平和の象徴と呼ばれる様になつたが、それは先人達のお陰――」

「今は？貴方は常に一人。戦う時も、事件を解決する時も・・・全て一人でこなしてしまうそれが貴方です」

「・・・そうだ」

しかし、それは私が目指した平和の象徴として当たり前の事だ。

「それは問題ないとと思うのだが・・・それが平和の象徴として当然だと思う」

「確かにその通りです。・・・しかし、貴方が倒されたら次は誰が平和の象徴になるのでしようか？」

「！」

「貴方の代わりは？貴方を助ける者は？貴方と共に戦う者は？」

「この子は・・・私に何を伝えようとしているんだ？」

「自己欲が殆ど無いように感じる窮屈な貴方は、自分が死に掛けると一体誰に頼るのです？」

「・・・」

「たとえ誰であろうと全ては人間一人では救え無いのです。・・・貴方はそれを分かつているのですか？誰かを助けると言う事は誰かを助けないと言う事です」

「だが、私は関係ない」

「貴方も人間ですか？・・・貴方も傷付く、衰える」

「——ツ」

「何なんだ、この娘は・・・私の何を、分かつていると言うのだ・・・私に何を伝いたいと言うのだ。」

「貴方の力を試めさせて下さい、オールマイト」

「はい？」

ヽヽヽヽヽヽヽヽ

ヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ

良しそれポイ事言つて、オールマイトの成長具合を志村奈菜に見せる事が出来るぜ！  
 ・・・後、志村奈菜がキリエル人ならばオールマイトのO F Aワン・フォー・オールに介入出来るだろ  
 さ。

フフフ、フフフフフフ・・・オールマイトスーパー・マン化始動だ。クククククク  
 ククククククク。

# 回想＆過去編2：平和の象徴と宇宙恐竜後編

オールマイティと宇宙恐竜の決闘は意外な結果に終つたと言つべきか・・・否、想定通りの決着となつた。

相手は平和の象徴と呼ばれる程の“英雄”であり、言うなれば人類を守る守護者……正しくヒーローと呼ぶべき存在。

だが悲しいかな、宇宙恐竜とはヒーローを殺す者。

一番始めて地球に飛来したM78星雲人であり、地球の守護者、生命の守り神とも言える存在であり、後の後輩達から生きた伝説であり真の英雄と称えられる原点にして頂点たる者……栄光の初代ウルトラマンを殺す為に地球へ送り込まれた、最強の怪獣。

あの初代ウルトラマンの技の尽くを寄せ付けず破り続けて……果てにはかの初代ウルトラマンの必殺技であり、数々の敵をその絶対的な威力で屠ってきたスペシウム光線さえ吸収して彼の心臓とも言えるカラータイマーを破壊し、殺害して見せた最強ヒーロー殺し。

ならばオールマイティが私を前に地に転がつてゐる事は別に可笑しな話では無い  
か・・・。

平和の象徴

彼をスーパーマンにするつもりだった、彼の成長を志村奈菜に見せるつもりだつた・・・ただそれだけの筈なのに殺意が止まらない。

あのウルトラマンには及ばずとも、地球だけを守護しているといえども・・・オールマイトは私のヒーローだ、それは否定しない。

だからこそ彼を殺したい、蹂躪したい、滅ぼしたい、根絶やしにしたい・・・止まらない、止められない、どうしようもない。

ウルトラマンは例え彼が殺されようともゾフィー隊長が後に控えていた・・・そして私は人間の防衛組織であり、初代ウルトラマンの盟友であり戦友でもある科学特捜隊の者達の手によつて殺された。

第二、第三と策と仲間を揃えていてこそその地球の勝利と言う結果だつた。

・・・ならば？オールマイトは誰が助ける？手を貸すと？彼だけが戦つて来た場合は彼が倒れたらどうすれば良い？打つ手無しそれが彼の運命だ。

「人一人ではやれる事に限界があるし、人間は種としては弱すぎる。・・・それ故に人間は群れる、知恵を集める、力を合わせる、共に戦う」

「・・・クツ」

オールマイトが血反吐を吐きながら、傷だらけの身体で立ち上がりうとするがまた崩れ落ちる。

「だが、貴様は一人だオールマイト……結局貴様はそこまでなのだ平和の象徴よ。貴様一人ではここまでなのだ」

陥しい顔しているエンデヴァーは先程全力を出し切り動けず、息子に支えられている。

「……ああ、殺したく無い。やつぱり私は憧れるべきでは無かつたのかな、彼らに――

「……科学特捜隊にそれに続く者達に、私もなりたいと思つては駄目だつたのかな……私はヒーローを殺す者だつた、でも今世ではなれると思つていた」

「……止めたくても口が<sup>私の連れ</sup>勝手に動いてしまう、弱音が漏れてしまう。

「でも、オールマイトよ。貴様は私に破れた。私と言う存在に敗北したんだよ……それはつまり私のあり方は変われないと言う事に他ならない」

それは仕方が無いけど、私も――

「――私もヒーローになりたかったなあ」

「……何だ？突然オールマイトから光が漏れた気がしたが、気のせい――

「それが君の本音かい？ゼットン少女。君は私と戦つている時……そして今も泣いている」

言われて目に手を当て、確認すると……確かに手が濡れている。

「君が私に何を伝えたいか、分からなかつた。何故泣いているのかも分からなかつた」  
「・・・傷だらけで戦う力すら無い筈の男が今立ち上がるとしている。

「・・・君はヒーローになりたいと願つてているのか？でも無理だと諦めているのか？私が君のあり方は変えられると信じてくれているのか？」

「ならば負けられない・・・私はまだ負けていないぜ、ゼットン！」

――平和の象徴が眼前にて不敵に笑い、構えている。

（～～～～～）

十分程時間を遡る。

ゼットン少女が私に勝負を挑んできた時に何者かの気配を感じたが・・・目視では確認出来ない為に気のせいと判断したのだが――

「余所見している暇があるのですか・・・なめられたものだな！」

ゼットン少女は正拳突きを仕掛けてきたのでそれを避けるが、避けた所にピンポイントに火球が迫ってきたのを紙一重で避けようとするが、火球が私を掠める時に本能的に危険を感じたので物凄く距離をとる。

「正解ですよ、オールマイト」

彼女の言葉通り私が距離をとつて直ぐに後方の壁が少し溶けてしまった。

この廃工場は250年以上前に英國政府と日本政府が共同で開発した特殊な工場らしいのだが、そんな古くからあるとは信憑性がたりないと（まあ、個人的には宇宙生命体と接触した身としてはあり得ない話では無いと思ってしまう）思う。

・・・超常黎明期時日本政府がこの工場を買い取つて、以前作り出した事のある新たなエネルギーを使つた製品を数多く作つていたらしい（本当かどうか分からぬが、人工太陽の実験も行つていたと書いてあつた）30年前に機械の故障で天井に大きな穴が空いてしまい安全上の理由で閉鎖され、廃工場となつたとエンデヴアのサイドキックがくれた資料に書いてあつた。

・・・仮に資料を作つたのが瀬居さんならば、彼が嘘を書くとは思えない。

それに事実なのだとしたら高温に耐えられる設計の壁が人一人の個性ごときで傷付く訳がない・・・しかし、彼女がウルトラマンさんが話してくれたあの『初代ウルトラマンを殺した存在』ならば、あり得る話だ。

「・・・何か？」

気付けば私はゼットン少女を見詰めていた、気まずいな。

弁明しなければ、私が変態だと誤解されてしまう。

「君の個性は何か気になつてね。・・・そしてこの工場跡地の壁は物凄い熱体制がある。

それを溶かしてみせた炎をどう言つた物なのかと」

「私の個性は『宇宙恐竜』で、私の火球は一兆度と高温です。言つておきますが加減したのを放ちましたよ、今のはね」

・・・・強い、強いぞゼットン！

私が聞いたゼットンと同じ強さじやないか！

「H A H A H A、宇宙恐竜！ 聞いた事が無いけど、何とも強い気配のする個性じやないか！」

私の言葉を聞いた少女はキヨトンとした顔をしてから真剣な顔になつてから、「確かに私の個性は強力無比です・・・しかし、大きすぎる力には必ず責任が付きまとう物です。だからこそ悔いのない、自分だけの為ではなく自分が守りたいと思つた者の為に使用しなければならないと考えています」

とこう続けた。

正直少女からこんな話が聞けるとは思わなかつたので、少々面食らつてしまつたが・・・コホン、気分を切り替えて私をどう思つているか聞いてみた。

すると、

「・・・強いて言うならば、貴方はヒーローとしては私の中ではまだまだ足りないと感じています」

こんな答えが返ってきた。

・・・私が平和の象徴多くを救う者となりたいと願い、それになろうと挑んだ結果が平和の象徴としての今のあり方だ。しかし、彼女は別の視点で私を見ている気がする。

「・・・さて、こちらから仕掛けさせて貰いましょうかね？」

「・・・」

彼女の余裕な表情は崩れない。

彼女の実力は未知数・・・故に手加減など考えるだけでも愚策、どう動かれても反応できる様にしなければならない。

私がそんな事を考えていた時――彼女は不意に姿を消した。

私はただの高速移動等の個性ならばそれを追い越す事など造作もない程の力はあるし、それを使いこなせる実力も持ち合わせている・・・でなければ平和の象徴などと呼ばれるまでのヒーローに成れないのだが、そんな私が瞬間移動を使用する時の彼女を捉えられなかつた。

背後に気配を感じて私は拳を振り絞り、気配が消えた後に次に現れると予測した場所に拳を放つ準備をして待ち構えた・・・果たして彼女は現れた。

タイムログを出来る限りなくして拳を振るつたのだが、またしても捉える事無く空を切り・・・私が宙を舞う。

それは何故か？……ゼットン少女が私の腕にテレポートして降り立つた後に私の顔正面掛けて蹴りを入れてきたのを首を傾けて回避したかと思ひきや——彼女は私の真正面に現れて私の腕を掴み、私を投げ飛ばした。

急いで床に向けて拳を振るつて体勢を整え床に着地して、彼女を探すと……羽を生やして空を飛び私に向かつて迫つていた。

「——ツ！」

驚くと同時に何とか迎撃しようと構えて地上に降り立つたゼットンを待ち構えるが・・・また不意に消える。

しかし消える前に何とか見ることができた足の動かし方は今は亡き師匠に教わり見て貰つた、

『これは滑る様に移動する「活歩」の歩法と言う。私以上の熟練の域になれば脚捌きも無く私の十歩以上の距離を詰めれる。この「活歩」の歩法の対処法は相手の脚捌きを注目して見て、相手がどこに現れるかを出来るだけ正確に予測してそいつに拳を振るつてしまえば解決だ！うん、なんだ？ O-F-A 全力で殴つても良いとかつて？・・・お前はそんなんだから1／2人前なんだぞ、俊典。いいか？相手が「活歩」の歩法を使って、お前が脚捌きしか見られないと言う事はない——』

——こちらが技術で圧倒的に劣つている！

ゼットン少女の個性は強力無比だ、それは間違いないのだが・・・彼女の身体捌きは個性を使う事を前提とした動きでは無い、つまり個性に頼らずともこれだけの身のこなしが恐らく可能と言う事だ。

テレポートばかりを使っていたのは、恐らく私にテレポートを使つた戦法を先入観として植え付ける目的があつたものと思われるな・・・師匠に教わつていなければ私はテレポートだと誤解して、攻撃を無防備に受けていた事だろう。

「・・・悔れませんね平和の象徴」

彼女は私が想定していた所から1m誤差がある場所へ現れたが・・・こちらとしては

好都合！

「CAROLINA SMASH！」

これは両腕を十字に組んで突進して、左右の手刀でクロスチョップを放つ技で威力調節を行えば物を切り裂く事も出来る強力な技なのだが・・・。

「なめるな！」

両腕を掴まれて技を途中で受け止められてしまつたが、畳み掛けるまで・・・ツク！

ゼットン少女は足を上げ、私の腹に蹴りを入れようとしていたのを何とかこちらが足を勢い良く出す事で相殺する事が出来たが、更に彼女は額から炎を放つ準備をしている！オマケに私はまだ拘束されたままときた！

「O k 1 a h o m a s M A S ! 」  
——ならば！

これは空中で体を急速回転させて複数人の敵に拘束されていたとしても、遠心力で相手を振り飛ばす事で拘束を解く技だ！

良し、外れて彼女が遠くに飛んで行つた——この隙に畳みかける！

「N e w H a m p s h i r e S M A S H & T E X A S S M A S H ! 」  
T E X A S S M A S H は本来パンチを繰り出して強烈な風圧で相手を吹き飛ばす技なのだが、N e w H a m p s h i r e S M A S H を使つてゼットン少女に迫つて、彼女を殴り飛ばした。

《貴様は初代宇宙恐竜ゼットンであり、唯一栄光の初代ウルトラマンを殺した存在……即ち最強のヒーロー殺しだ》

突然脳内に声が響き、私がウルトラマンと戦っている時の光景が映し出された。

初代ウルトラマンが私の動きを止める為に金縛り光線を発射したが、私はいとも簡単にそれを打ち破り、瞬間移動でウルトラマンを翻弄し八つ裂き光輪をバリアで防ぎ……ウルトラマンのあらゆる攻撃は全く寄せ付けず初代ウルトラマンは格闘戦でも私に敵

わざ追いつめられる。

起死回生に放つたスペシウム光線も吸收され、逆に増幅されてカラータイマー目掛けで反射されて、その光線の直撃を受け・・・私の手によつて初代ウルトラマンは敗北した。

・・・コレは何だ？何故、私はコレを前前世の私のオリジンの記憶を見ていると言うのだ。

《更に良い、面白い物を見せてやろう》

この声の後に視界が一瞬暗転し、その後新たな記憶が目覚めた・・・。

『この美しき姿。コレが、コレが、コレが完全体ハイパーゼットン！私はついに全ての宇宙に死をもたらす神となつたのだ！』

・・・黙れ。

『命は誕生した時から必ず消滅へと向かう。そうだ、全ての物は滅び去るのみ』

黙れ。

『ゼットンこそが宇宙を支配する法則、滅亡その物なのだよ！その力で全ての宇宙の命を根絶やしにし、私が全宇宙の神として君臨してやる！ウハハハハ！ウハハハハハハハ！・・・さあ、絶望の前にひれ伏せえ！』

黙れえ！

私は人間だ！怪物じや無い、ちゃんとした人間だ！化物じや無い、私は……。

《貴様は本当にヒーローに、命を救う者になれると思つてているのか？……貴様の本質は全てを滅ぼす滅亡その物だ。守るのではなく殺し、蹂躪し、滅ぼし、根絶やしにする存在こそが貴様だ》

・・・違う・・・私は・・・ヒーローに・・・なりたいんだ。

《憧れた？自分を倒した者達の決意に恋い焦がれたとでも？……それを常に奪う側だつた貴様が言うか？貴様には次があるのか？数々の物を奪い、怖し、葬り去つてきた貴様がか？では、貴様に奪われた者には？滅ぼされた者には次はあるのか？……そう今まで自分で考えていたのだろう？》

あ、ああ・・・私は、わ、た・・・し・・・。

《さあオールマイトを殺せ、平和の象徴を殺せ。貴様の本分を思い出すが良い》  
平和の象徴を・・・い・・・や・・・殺すそれが私、宇宙恐竜だ。

《ヤプール、貴様の企みを利用させてもらう。宇宙恐竜ゼットンよ、所詮自らを肯定出来ぬ強者の末路は悲惨な物となる定めだ。・・・恨むのならば自らの存在やあり方を相応しい物だと考えられずに迷い続け、果てには自らを否定する事を考えて続けた貴様自身を恨むがいい》

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

＼＼＼＼＼＼＼＼

私がゼットン少女を殴り飛ばした後に彼女の気配が突如として変化した。

彼女の気配は優しく、強い物だつた……それが今はどうだ？物凄く殺氣だつている……まさか、あの謎の気配が関係しているのか？

「……オールマイト」

「——ツ！」

なんと言う殺氣だ。だが、しかし……何故、何故彼女は——

「……何か悲しい事でもあつたのかい？ゼットン少女よ」

「……何を言つているのです？」

——泣いているのだろうか。

ウルトラマンさんが言うにはゼットンと言う存在は数多くの悪意を持つ宇宙人達に利用される兵器だつたらしい。

その理由は何故か？……ゼットンが想像を絶する強さを秘めた最強の怪獣だからだそうだ。

目の前の姿を変えた彼女は……どうしようも無い程の絶望をはらんだ気配を感じる。

「知っていますか、オールマイト？宇宙恐竜はヒーローを殺す者であり、  
あらゆる物を滅ぼす者なんですよ」

殺  
戦  
器

私  
は

彼女は本当にそう思つてゐるのだろうか？

「それが私と言う存在の本質……ですのでオールマイト、貴方には死んでもらいます」  
そう言うと姿を変えた彼女は先程とは比べ物にならないスピードで瞬間移動を行い、私の眼前に立つた。

「死なないで下さいね？ オールマイト」

私は本能的に迎撃の為に本気で拳を振るつたが彼女が消え、直ぐに強力な衝撃が私を襲つた。

今まで感じた事が無い攻撃の重さに思わず、思わず込み上げてきた血反吐を無理やり飲み込む。

彼女は先程までは全力では無かつたのだろう。姿を変えてからのテレポートは私の目では追えず、攻撃の重さも増した……だからこそ何故自分が死んでいないかが疑問だ。

コレだけの実力があれば私など一思いに殺す事など造作も無いだろうに先程から私の攻撃は私を死に至らしめていないのだ。……まあ、一瞬でも気を抜けば気絶してしまいそうな状況ではあるが。

——そんな時だ。

「赫灼熱拳ジエットバーン！」

後方からエンデヴァーアーの叫び声が聞こえ、後方から熱線が飛んできた。

状況を見たエンデヴァーアーが後方支援すべきと判断したからだろうが、その攻撃をゼットン少女はバリヤを張つて防いでしまった。

「——それは想定済みだ！さあ、食らえプロミネンスバーン！」

攻撃が防がれた後もエンデヴァーアーは間髪を容れずに更に畳み掛けた。

・・・確かにあれはエンデヴァーアーの必殺技の中でも最高火力を誇る物だったと記憶している・・・しかし、それが迫つて来ていると言うのにゼットン少女は余裕の表情を浮かべ、腕を眼前に構える。

すると腕の正面に孔の様な何かが出現した。

「フフフフ、残念。宇宙恐竜は光線を吸収・増幅して波状光線として撃ち返す事が出来るんです、エンデヴァーアー？」

——光線を打ち返す事が出来る！

ゼットン少女が腕を前に伸ばし、同時に両腕の間から彼女の言う通り波状光線として私に迫ってきた。

それを急いで全力で回避し、距離を取る。

そして、私は先程まで自身が居た場所が大きく抉れ、深い穴となつてゐるのを目撃する。

もしコレが自分に当たつてまつていたらとそんな事を考えながら地面に着地すると腹に重すぎる衝撃に食らつてしまふ。

衝撃で血反吐を吐きながら地面に転がり、さつきまで居た場所を眺めると・・・ゼツトン少女がそこに立つていた。

彼女は生氣の無い、虚ろな目から涙を溢れんばかりに流しながら言葉を綴る。

「人一人ではやれる事に限界があるし、人間は種としては弱すぎる。・・・それ故に人間は群れる、知恵を集める、力を合わせる、共に戦う」

「・・・クツ」

私は血反吐を吐きながら、傷だらけの身体で立ち上がるうとするが崩れ落ちてしまう。

それを見ながら、彼女は話を続ける。

「だが、貴様は一人だオールマイト・・・結局貴様はそこまでなのだ平和の象徴よ。貴様一人ではここまでなのだ」

エンデヴァーに助力を頼もうとしても彼は元から重症をおつていて、しかも先程全力を出し切り動けず、息子に支えられている。

ああ、彼女の言う通りだ。私は自らの力を過信してしまった。……私ならば彼女を止められると確かな証拠も根拠も無く、自分が平和の象徴と言う大変おこがましい理由で――

「……科学特捜隊にそれに続く者達に、私もなりたいと思つては駄目だつたのかな……私はヒーローを殺す者だつた、でも今世ではなれると思つていた」

「……雰囲気が、話の流れが変わつた。

「でも、オールマイトよ。貴様は私に破れた。私と言う存在に敗北したんだよ……それはつまり私のあり方は変われないと言う事に他ならない」

「……」

「――私もヒーローになりたかつたなあ」

「そうか、彼女の本心かコレは。

少女の言葉を聞きながら、私は自身のオリジン足る出来事を思い出して――

「私は何とか生き返る事が出来たのさ。……さて、八木俊典君。君はヒーローが必要だと私を試すかの様に言葉を続けた。

「……」

正直な話し私なんぞが答えて良い話かは疑問に思つてしまつたが……私は自分で考えた考え方を自分で話すべきだと結論づけた。

「……この国には“柱”が、象徴的存在がいないと思つています。ですので、“柱”足るヒーローは必要だと考えています」

コレを聞いた少女は飽きれ、彼は困つた様に笑つた。

「うん、そうだな……君達この地球の人類が直面しているこの個性による超人社会問題を一つの壺と例えてみるとしよう」

そう言つて彼は少し考えてた後に言葉を続けた。

「君の言う“柱”とはその壺の中身の頂点に立つ者と言う考え方で良いのだろうか？……ならば私は賛同しかねる」

「……何故ですか、ウルトラマンさん」

コレは素朴な疑問だった。

私はこの考え方が正しいと今でも思つている……しかし、この後に続く言葉の意味を理解しかねていたんだ。

「人一人には限界があるし、勿論それは私にそう。誰かを救うと言つた事は誰かを救わ無いと言う事……誰かを守ると言うはその分誰かを見捨てる行為と言えるし、それに守れなかつたら『どうして助けに来てくれなかつた！』『俺達を見捨てたのか！』『どうし

「でもつと早く来てくれないんだ！」etc. etc. . . 地球人類はこう言う言葉を  
良く浴びせてくる

コレは当時子供だった私には衝撃的な内容で、思わず身動きが取れない。  
彼は関係無い星で義理も見返りも、報酬すら無いと言うのに命を掛けて戦った真の英  
雄だ。

・・・それなのにこんな言葉を浴びせる何て信じられなかつた。

そんな時、

「そんなの事は無いし、お門違いだと思うけど」

と彼女は口にした。

ウルトラマンさんは驚いた様な顔をして彼女の顔を凝視した。

「・・・何故お門違いなのかね」

「さつき自分で言つたでしょ？――ウルトラマンは神ではないって」

「――」

「貴方は関係無い星で義理も見返りも、報酬すら無いと言うのに命を掛けて戦った真の  
英雄と言うべき存在だと思うわ・・・少なくとも私はね。それに神にだつてやれる事と  
やらない事があると思う。なら神でさえそうなのだから神でもない貴方が気に病む必  
要はこれっぽちもないと思うけど、どうかしら？」

こう語つた後に彼女は渾身のドヤ顔を披露したが、私はノーコメントとさせて頂こう。

因みにコレを見たウルトラマンさんはポカーンとした後に、笑い出してしまった。

それは当時子供だった私から見ても『そう言う考え方もあるのか！』と驚いている所に小さい少女のドヤ顔を見て、思わずツボつてしまつた』と言う事を言外に語つてゐる様に思えだし、その笑いを受けて靈夢のドヤ顔はうーんとなあ・・・凄さを増したとだけ言わせて貰おう。

ウルトラマンさんは笑いまくつた後に呼吸を整えて、頷いた。

「そう言う考え方もあるのか、勉強になる・・・だが私が救えなかつた命は実際多いし、的外れな言葉と私は否定したくない」

先程よりも真剣な表情で言葉を続ける、

「第一地球人類は私の知るなかで最も弱く脆弱な種族で、それと同時に最も勇気ある種族だと私は考えているんだ・・・限界と言う名の壁を仲間と力を合わせて乗り越えるられる強く、勇気ある者達だと」

ここまで言つた後に彼の体が輝き、また巨人の姿になつて更に言葉を続ける。

《確かに象徴は大事だろう・・・しかし、真に大切なのは誰かと力を合わせて困難に立ち向かう地球人一人一人の勇気だと私は思う》

そこまで言うと彼は手を私達に向ける・・・すると赤く優しい光を放ちながら私の眼前に何が飛来してきた。

それを掴むと・・・私の手の中に丸い赤い石が握られていた。

『今の物は『ウルトラの星』と言う物で、私と君達の友情の証しとして受け取つて欲しい。例え宇宙を隔絶していたとしても、君達と私との友情は不滅だ――その『ウルトラの星』に誓つて』

それに私達はその言葉に頷き、ウルトラの星を眺る。

『ヒーローが必要なんだ、八木俊典君。多くの者達の勇気と希望となるヒーローが・・・。君ならば自分なりの象徴を見つける事が出来ると私は信じている・・・では去らばだ、勇気ある者達よ』

その言葉を最後にウルトラマンさんは空へ飛び立つた。

# 滅火羽織：オリジン

オノレオノレオノレオノレオノレオノレ

途轍もなく小さな声・・・敢えて言うなば世界を跨いだ遠くから響き渡る様な声だ。

オノレオノレオノレオノレオノレ

だが、少しだけ声が大きくなつた。

オノレオノレオノレオノレ

遂には世界の違ひなど関係の無い事だと言わんばかりに聞こえる大きさとなつた声は何処かの誰かへ向けた憎悪を宿しながら叫びだした。

“妖怪の賢者”八雲紫いや、それに転生した悪夢め！二度ならず三度までも私の邪魔をしおつて！

何者かはとある個人に対して酷く立腹のようだ。

私はあの愚かな父親とはチガウ！私は楽園を『忘れられた者達の樂園』の愚か者達の血を使つて神なつたのだ！悪夢——サー・ナイトメアめえ！樂園の強き力を持つ者達の血を、身体の一部を、肉片をそれら全てを樂園中を回つて集め一つの文字通りの“神”となり強き力を持つ者達の魂その物を奪い『真理』をソシテ愚かな父親を取り込み副王す

ら超えた存在になれた筈なのにい！

やれやれそれをその私に言わずに何も出来ない魂に言うとは本当にコイツは小物・・・こんな奴を止める為に私はあの穴特異点を使って転生するとはな、ハアー。

ヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモ

そろそろやかましいな、全く。

・・・八雲藍に黙らせようかしら？

——チガウチガウチガウ！今は『悪夢が転生した存在妖怪の賢者』八雲紫は関係ない！目の前の強力な魂をケンジヤノイシにしなくては！あの悪夢にバレる前に！

ケンジヤノイシイ！

・・・・・・

ケンジヤノイシイ！

「やかましい」

——ツ！

何驚いているのかしらね？本来魂がここにある訳無いでしょに。ここはあの世死後の世界では無く、世界の狭間——私の世界なのに何故私にバレないと思つたのかしらね？・・・と言うか本当に私に気付いていなかつたのね。

「相変わらずバカね、貴方」

ダマレダマレダマレダマレダマレダマレダマレダマレダマレダマレダマレ——

「——消えろ」

「フウー……何とか追つ払う事が出来たわねえ。」

「ここは破棄して別の場所に移動しましようかね」

「……私が一を考えてここに罠を仕掛けて置きましたよか、意味無いでしようけど……まさかアソイ、私が移動する事を考えてないなんて事はないでしようね?」

「まさかね」

「そんな訳無いでしよう……幾らあいつが馬鹿でもそれに気付く筈よ。」

「……それにしてもこんなにも早くアソイに見付かるとは思わなかつた」

「ちゃんと結界は張つてあるから大丈夫と慢心していた。」

「……まあそれだけこの子——初代ゼットンの転生体の持つていてるエネルギーが凄まじいと言う事かしらね……まあそれはそれ、これはこれね」

「何やらかすか分からぬ程のアホ相手にするのは疲れるわねえー、ハアー……まあ、収穫もあつた事だし良しとしましよう。」

さて、キリエル人なのにも関わらず人間と共に存しようと考へた集団のリーダー足る志村菜奈の心核——魂の核はヤップールが持つていて、その情報を私が彼女の配下にこ

キリエルの巫女  
志村菜奈の心核

——

そつと情報を流したから今頃戦争している筈ね。

彼等相手にこちらの存在を悟られず、違和感無く自らが集めた情報であると誤解されるのは苦労したけどまあ一結果オーライと言うやつかしら・・・キリエル人つて心核さえ無事なら幾らでも転生と言う形で復活できるから多分、ヤプール辺りが魂を集めて志村菜奈復活させるでしょうね。

訳を話せば配下もノリノリで魂の半分くらい分けてくれるでしょう・・・それで全員転生しているから志村菜奈はある意味最後の生き残りと言えるかも?まあ人それぞれかしらねえー。

それにしても、

「『個性』ねえー・・・身体と言う枠を超越して魂そのものを表する力である『能力』ではなく精神と魂を繋げる身体に依存している物、差し詰め『能力』の下位互換と言えなく無いわね」

『個性特異点』と言うのも良いわね————これを見つけた科学者とはいい酒が飲めそうよ!これを超えた先が私の『境界操る程度の能力』と同等ね!・・・まあ、流逝にそこまで見抜いているか分からないけど我が教え子足る彼——Aオール・フォー・ワン F Oは見抜いていそうね。

確か遺伝子を操作する個性・・・早い話がジーン・ドーパントとで、この力を使つて

“個性因子”に干渉して『能力』にならないように防いでる様だけど。

「……しかし、彼が今や裏社会の支配者になつてゐるとはね」

私が転生したのは西暦2000年前半辺りだからあのまま行けばそうなるとは考えていたけど、まさか『個性を与えて、個性を奪う』なんて言うチートじみた力を手に入れるとは流石にこの私と言えども予想外よ。

『個性：並列思考に個性：分裂と個性：分身、そして個性：性転換が混ざつて個性：並列存在になるんだろう？まあ同時に存在出来て便利だとは思うけど——何で並列存在が本体以外女になるんだよ、巫山戯るなー！』

ククク、何時思い出ても愉悦が止まらないわ！多分ジャグラスジャグラーやヤプールも分かってくれるでしようね！彼等は西暦1970年にこの世界にやつて來たからAFOと私にとつて旧知の友ね。

・・・キリエルの巫女は西暦2000年後半にやつて來たから私と入れ違ひね。

・・・それとしても個性とは面白い物ね。混ざつて艦娘あきつ丸まんまの能力と見た目になつちやうとはねえー確か14個の個性が混ざつたんだつけ、面白いなあー。

「無駄な思考はここまでにして、ヤプールは十中八九私が裏に居ると考えてAFOに協力要請を出した後にオールマイトをキリエロイドを使って仮死状態にして、志村菜奈の意識を目覚めさせようとする筈」

私の愛弟子

自分  
の後  
継  
者

これを利用しない手はない……確かにアブソリュートタルタロスとか言う奴が世界と世界を無理矢理繋げる穴<sup>擬似的異端点</sup>を調べていたから800年前の情報を意図的に流して行動を起こさせるとしましょうか。

上手く行けば別の——私と違う『幻想郷』の住民の魂が流れ込んで来る筈よ……流石に地球<sup>星</sup>の抑止力もそれは見逃して補佐するでしょう、ただの『能力』だと消されかねないけどね。

時は来た！

「さあ、始めましょ。私のシナリオ通りに『悲劇の様な喜劇』を『喜劇の様な悲劇』を作り上げるとしましそうかねえ……この子を主人公に当てる事で」

彼女と言う存在と私が出会つたのはまさしく『運命』と言えるかもね。

・・・ そうだ転生させる前に別世界の A·F·O の様に挨拶しときましょ。

「貴方は既に私のシナリオ<sup>人生のレール</sup>に縛られている。貴方は所々でかつて無い選択を迫られる事でしょう、それ等全て私が仕組んだ人生の分岐点<sup>強制イベント</sup>……勿論逃げる事は出来ないし、貴方がどのようない人生を贈ろうがお構いなしに、私とは関係なしにそれ等は貴方に襲いかかる」

まあ、こんな感じかしらね？……ああ、そうそう伝え忘れる所だつたわ。

「そして最後に——私のシナリオなんて気にせずに自分の思うがままに、後悔の無い様

に生きなさい・・・この私がどの様な事をしようが、貴方を産んだ存在こそが貴方が大切にすべき母親で家族よ。私なんてお構いなしに自分の道を突き進みなさい」として、転生させるとしましようかね。

「・・・そう言えば」

作戦名を決めていないわ。

転生は今さつきやつてしまつたし、今更だけど決めましょうかねえ——フフフ、早速良いのが思い付いたわ！

名付けて、

「ウルトラ怪獣ゼットンヒーロー化計画」

## 回想＆過去編3：英雄とは前編

（オールマイト…それが私が考えたヒーロー名だ。全てを救える象徴的なヒーローに、ウルトラマンさんが言つていた様なヒーローになりたいと思つて付けた名前だ）  
『限界だーって感じたら思い出せ、何の為に拳を握るのかを。それが原点、オリジンつてやつさ！そいつがおまえを限界の少し先まで連れてつてくれる』

かつてオールマイト…八木俊典が今は亡き師匠志村奈菜に言われた言葉。  
自分の原点とは何か、そんな物はもう彼の中では決まっている

『皆が笑つて暮らせる世の中にしたいです』

それがオールマイトの、彼のオリジンだ。

「それが君の本音かい？ゼットン少女。君は私と戦つている時…そして今も泣いている」

彼は少女に伝えたい事を伝えると、やはり無自覚だつたらしく不思議そうに手を運び涙腺に触れて確認する。

やはり、彼女の意思は先程の言葉が本心だとオールマイトは確信する。  
（先程感じた何者かの気配はヤプールとは恐らく別人だと思う。その者が彼女を洗脳、

いやさつきの発言を鑑みて元から自身を化物、存在してはならない者と考えて否定的だつたのではないだろうか）

彼が過去ウルトラマンから聞いたゼットンと言う存在は数多くの命を奪い、怖し、葬り去つてきた存在だ。

彼がエンデヴァーアや意識が残つている者達、特に白髪の少年の話では、

『彼女は恐らく気にしなくて良い事も気にしてしまう質だと思いますよ、オールマイト』  
『どういう事だい、少年？』

『例えは前前世で數え切れない命を奪い続けた兵器で、前世が数多くの命を救つてきた警察官だつた場合は普通は±0と判断しても可笑しくないし、普通はそうする。……しかし、彼女は±0どころか一に考えてしまつていてる感じます』

（そう言つていたつけな、彼は）

【それだけじや無いぜ！自身に一二、三度目の人生があるならば自らに奪われた者には？減ぼされてしまつた者には次はあるのか？……そう言う事を考えていると私は感じたな】

（うん？何か聞き覚えがあるな。安心出来る声が聞こえてきた様な気がしたが……まあ、それは置いておくとして成る程そう言う事か）

「君が私に何を伝えたいか分からなかつた、何故泣いているのかも分からなかつた」

……オールマイトは彼女が何を考えているのか、思っているのかそれが分からなかつた。……だが、分かつっていたとしても。

（この状況は私一人では――）

――私一人ではだと？ はあ、この半人前め。この力は何人もの人がその力を託して来た物だと前に言つただろうが、愚か者め。皆の為になります様にと、一つの希望となります様にと・・・一人だけの力でどうにかするのを止めていい加減受け継がれて来た力を、他者を頼れよ俊典》

（――ツー・この声は・・・しかし、二十五年前に死んでしまった筈）

そう今脳内に響くこの声は自分を庇い、殿となりその結果AFO『悪の帝王』に殺されてしまつた今は亡き師匠志村奈菜の声。

（死んでしまつた者は甦らない――そう言えば）

『なあ、俊典。心半ばで斃れたとしてもO·F·A（ワン・フォー・オール）の中で逢える・・最高にロマンな事じや

ないか！』

嘗て彼女がオールマイトに言つていた言葉だ・・・もしかしてそれなのでは無いかと考へる。

《遠いし惜しい。 O·F·Aは精神の寝台列車と例える事が出来るが、私は厳密には寝台列車の中には居ない。そのネタは何時か言うつもりだけれども・・今は意識を身体で

は無く、内面にに向けろ》

言われてオールマイトは内面に向けると何者がO F Aに侵入しかけていて、自分の師匠を除く先代達が何とか防いでいると言う状況が感じられた。

《言つておくがコイツはA F Oではないぞ。アイツはこんな周りくどい事をせず正々堂々と奪いにくるからな・・・そして、恐らくお前曰くゼットン少女を洗脳しているのはコイツだろう》

五人の先代達が黄金のオーラからO F Aの核を守つていた。

その光景を眺め、驚いていると何者が自分に干渉しようとしているのを感じ意識を向ける・・・その干渉してきた者の正体はファーストたる初代だつた。

《うん問題ないね。まあ、俊典君は悪運が強いし、問題ないと思つてはいたけど初代ウルトラマンと出会つてウルトラの星を貰うとかどんだけ幸運なんだ君は・・・兄さん辺りが知つたら血涙流しながら羨ましいと嘆くだろうね、僕も羨ましいと感じるけど》

《無駄話はコレくらいにして、本題に入りましょう。今の状況は俊典、お前が考へているよりも幾分かマシだ》

コレにオールマイトは面食らつてしまふ。O F Aの核に干渉してきているのだからマシな訳が無いと感じるからだ。

《相手は兄さんじやないド素人だ。もし相手が兄さんなら何の備えもしていない状況だ

と鼻歌を歌いながらO F Aを奪うだろうね』  
 〔オール・フォー・ワン〕

『A F Oは必ず精神つまりは内側から干渉してO F Aを奪いに来るし、そうしなければO F Aは奪えない』  
 〔ワン・フォー・オール〕

それはオールマイトには初耳の事だつた。

(しかし、そんな事は一度も……)

『言つてないからな、俊典！さて、A F Oは意図も簡単にそれをやつてのける。魔王“”と言う呼び名に相応しい怪物だ……そんな化物相手に対策を打たないと言う選択肢は無い』

『だからこそ今回の相手は素人だ。兄さんなら直ぐに感ずいて短期決戦を仕掛けるだろうが相手は察する……たぶん思惑アリだろうけど、それでもマシなんだよ俊典君』  
 (成る程、そう言う意図があつたのですかお二方)

『……更に言うならその存在の目的は歴代の後継者達が君に協力しない様に妨害していると言えるね』

『まあ、相手は奪えない事を端から承知だと思うぞ。真の狙いはお前の進化を防ぎ、ゼットンにお前を殺害させる事だと思う』  
 (……)

『先程彼女が自分で言つたけどゼットンは本来ならば滅びをもたらす存在だ。しかし、

彼女は並々ならぬ歪みを持ちながらも誰かの為に、親しき者達の為に力を振るいたいと願つてゐるんだ……彼女の言葉は嘘じやない』

『今から手が空いている私達一人で、私の個性である浮遊を使う事が出来るようにする（そんな事が可能なのですか！）

『可能さ。でもコレは賭けでもあるんだ……敵はヤップールや兄であるAFOの様に個性についてでは詳しくはないが時間の問題だろう、だからこそ今の君の力では制御できるかどうか分からぬ程のエネルギーを君にぶつける』

『死なないでくれよ、バカ弟子。お前の命はお前一人だけの物じやない……でも死んでも恨むなよ？』

オールマイトは二人の言葉に今の状況では考えられない様な嬉しさと勇気が沸々と湧いてくるのを感じた。

本来は絶望しても可笑しく無いのに……一人だと必ず絶望していただろうに内側には頼れる先代達が居て、外にはコレまた頼れるヒーローが居る。

ああ、自分は恵まれているなど彼は感じる。

だからこそ、だからこそオールマイトは決意を固める。

（私は生きて彼女を倒し、彼女のバカバカしい妄想をぶつ壊して現実と夢に目を向けさせなければなりませんので、それに彼女は、ゼットン少女は私に言外に助けを求めた）

『それがヒーローて事かい？では――』

『全く、俊典らしい言葉だ！・・・さて――』

――負けるなよ、ヒーロー！

二人の気配はこの言葉の後消えたが、不思議と近くに感じる。

物凄い想像を絶する力が内側から外側へ、精神から身体へと流れ込んで来るのを感じる。

何らかの抵抗をすれば直ぐに身体は精神どころか魂その物さえ碎け散りそうなイメージが脳内を駆け巡るが、そんな事は無い・・・立ち上がると同時に意識を集中させん為に深呼吸をし、身体と精神的無駄な力を退かす。

すると物凄い想像を絶する力が收まり、全身に力が駆け巡るのをオールマイトは感じた。

(――うまくいったか)

オールマイトは安心して、誰にもバレない様に息を吐き安堵した(A・F・Oと念話で繋がっていたキリエロイドにはバツチリ見られており、A・F・Oは彼女の弟子自慢に付き合う羽目になる)。

「・・・君はヒーローになりたいと願つているのか？でも無理だと諦めているのか？私が君のあり方は変えられると信じてくれているのか？」

(信じられていたんだ、永劫にも勝る苦しみを味わいながらも前に進む少女に・・なら)  
 「ならば負けられない・・・私はまだ負けていないぜ、ゼットン！」

ヒーローが今、立ち上がった。

対して周りの面々はと言うと。

エンデヴァーはキリエロイドを見据えて、首を縦に動かした。

実は先程のエンデヴァーの攻撃はキリエロイドから、

『隙を作つて欲しい、自分が私とオールマイトの間にパスを繋げる時間をな』

と頼まれて、具体的な要求をされた・・・しかも一緒に聞いていた息子が理不尽過ぎるとぶちギレるレベルのを平然と要求したのだ。

・・・しかしエンデヴァーは、

『ゼットンを救えるのはオールマイトしか居ない、そして俺はゼットンに救われた。そんなお人好しが自分は化物だと世迷い言をほざいているのならば、目を覚まさせるべきだ』

と言う理由で期待以上に、完璧にキリエロイドに答えて見せた（尚報酬として自身にだけO·F·Aワン·フォー·オールの事をキリエロイドから話されて、自分に話して良かつたのかと疑問に思つたエンデヴァーなのであつた）ので父親の評価は上がつたが表には絶対に出さないと誓つた焦凍であつた。

因みにエンデヴァーはキリエロイドに傷を癒して貰い何時でも戦える状態であり、  
A  
F  
O も万が一に備えて戦闘準備を終えている。

オールマイトがマントを翻しながらゼットンに襲い掛かった。

そんな周りの状態など捨て置きオールマイトが、平和の象徴が動き出す。

そんな時今世では初めて、前世では数えきれない程喰いだ死の香りがゼットンの鼻腔をくすぐる。例えるなら黒く粘ついたタルのような、暗い気配・・・そんな香りがしたものだからテレポートではなくバリアを張つての防御を選択した。

・・・バリアを張つて直ぐにオールマイトの姿が消えて、眼前に急に現れた。

「——ツ！」

急に現れた平和の象徴オールマイトは右手に力を込めて愚直なまでに空を裂きながら、物凄いスピードで拳をゼットンが張つたバリアに直行させていた。

——ドカツ！

音すらも置き去りにした英雄の拳を最強のヒーロー殺しのバリアが防ぐ。

まともに喰らえば今頃頭は無かつた、今の一撃はそれ程の威力を感じた・・・しかし攻撃とは当たつてこそその物である、当たらなければどうと言う事は無い。

さて、この拳とバリアによる矛盾勝負と言える勝負は矛——オールマイトの敗北に終わった。

「クッ！」

幾らオールマイトが師匠の力を得て、更にはゼットンから盗み見た技を駆使しようが所詮は付け焼き刃にしかならない。

そこからゼットンがお返し言わんばかりに左手で殴ると誤解させるフェイントした後に本命の右の拳を叩きつけようとする。

しかし、ファーストであり A F O の弟でもある初代から脈々と受け継がれてきた O F A 8代目後継者にして平和の象徴たるオールマイトは何とか見切る事に成功して、ゼットンに殴りかかる・・・その攻撃を相殺され、後方に飛び退くオールマイト。

この間たつたの2秒・・・常人では欠片すら捉えられない、正しく英雄と呼ぶべき者達による高次元の戦闘。

・・・しかし悲しいかな。オールマイトは決定打となる力を持つておらず、ゼットンは何時でもオールマイトを殺せる。

対等になつたと考えるには甘過ぎる状況に思わず苦笑いをしてしまうが・・・状況は悪くない。

そうゼットンはオールマイトに釘付けだ、本命の相手たるオールマイト以外にヒーローが、エンデヴァーが居る事を忘れていた。

彼は考えた、ゼットンと言う化物相手にオールマイトが勝つにはどうすれば良いか？

一人では無理だ——なら二人では？

「オールマイトオ！」

後方から炎がゼットンに向かつて駆け巡る。

それは全て相殺される、しかしそんなのは織り込み済み。

所詮はオールマイトが攻撃を仕掛ける時間を稼ぐ為の行為だ、相殺された所で意味はない。

「ピ。ポ。ポ。ポ。ポ。・・・ゼエツトーン!!」

ゼットンはエンデヴァーを標的と定めた。

ゼットンはエンデヴァーを最初からヒーローと認めているが、オールマイトをターゲットにしていたのは平和の象徴と呼ばれる程の英雄だ。

No. 2ヒーローも英雄と言えるだろうし、その勇姿を見ていたゼットンはエンデヴァーも殺すべきヒーローと認識した・・・それが誤りであると気付かずに。

ニヤリ、とエンデヴァーは笑つた。

ここでゼットンは気付く・・・幾らオールマイト相手に優勢ばだとしても、彼は平和の象徴たるヒーロー。

なら――

「私が、ゼットン少女の真横に来た！」

隙が有れば叩かれるに決まつてゐる。

「——ツ！」

氣付いて対策行おうがどうしようが——今更もう遅い。

〔N e w H a m p s h i r e S M A S H !〕

先程と違ひ拳圧を推進力に長距離を急速移動する技を直接叩き付けられる。長距離移動可能な拳圧、その威力は途轍もない破壊力と成る。

「——ガア！」

後方へ物凄い勢いで吹き飛ばされるゼットン——だがしかし、彼女は“宇宙恐竜”<sup>〔全セツの力〕</sup>と言う名の個性を持つ怪獣娘なのだ。

「シユンシユンシユン、ピポボボボッ!!」

翼を生やして飛ぶ事など造作も無い、ゼットンは空中で暗黒火炎を連續で発射する。それを、

〔P L U S U L T R A プロミネンスバーン！〕

エンデヴァーに全弾相殺どころか、バリアして防ぐ事を強制された。

バリアを展開して防がねばならない程の威力や熱を全面的に前方へ放つ正確すぎる熱制御。

コレはゼットンも驚いた。

原作では周りを巻き込まない様に何も無い空中で放っていた技だ・・・それを完璧に制御して見せたのは驚愕に値する。

「お前のお陰だ、ゼットン。・・・お前が生命エネルギーをくれた時お前の記憶も一緒に送られて来た」

「・・・エンデヴァー、それは？」

オールマイトは驚いた顔をしているし、ゼットンも同じく驚きを顔に表した後に何か納得した顔をした。

「血とは魂の通貨、命の貨幣。命の取引の媒介物に過ぎない——成る程な、生命エネルギーもそれに当て嵌ると言う事か・・・どの世界でも当て嵌る理か」

?血とは魂の通貨ら命の貨幣、命の取り引きの媒介物に過ぎない。血を吸う事は命の全存在を自らの物とする事と言うだ?

・・・HELLSINGと言うの漫画のキャラクターであるインテグラル・ファルブルケ・ウイングエツ・ヘルシングの台詞だ。

血とは生命を司る重要なエネルギー・・・つまり生命エネルギーと言える物であり、存在その物と言えよう。

だからこそエンデヴァーが言つた言葉は何分可笑しな話では無い。

「・・・だから何だ?私の前世に何を感じたか分からぬが、何を言いたい」

「何、お前が馬鹿らしいと感じただけだ」

「————！貴様！」

「エンデヴァー幾ら何でもそれは————」

「お前は黙つていろオールマイト！コイツの前世の記憶と今世の記憶をある程度だが把握する事が出来た……コイツは多くの修羅場を潜り向け、多くの命を救つてきた存在だ」

「……前世で多くの命を救つてきたのは事実だが、だから何だと言うんだ？ゼットンをして私が奪つて命には次がある——」

「——そんな事俺が知るか！第一生まれ変わっていると言う事は殺されたと言う事だ」

「————！」

「エンデヴァー、君は……」

初代ゼットンの怪獣娘は驚いた顔をして固まっている。

そんな事考えた事も無かつた、考えて良いと思つても見なかつた……そんな顔だ。

そんな表情を見て彼女の過去を見た者は溜め息を洩らす。

そして、言葉を続ける。

「いちいち前世など考えてられるか。記憶を持つていようが、知識があろうが……そんな者は所詮別人だろうよ」

「な、何を言つてゐる！」

驚いた殺戮兵器<sup>滅火羽織</sup>だつた者はエンデヴァーの言葉に反論する……それに対してもエンデ

ヴァーは涼しい顔だ。

「お前の記憶を垣間見て、俺はお前の事をヒーローだと思つたよ……だつてそうだろう？個性が無い世界で一方的に命を奪える敵から一般市民を多く助けたお前は——間違いなく助けられた者達にとつてのヒーローだろうよ」

「……私が、ヒーロー？……違う、違う、違う、違う！私は宇宙恐竜——」

「だが、貴様が多くの命を救つてきたのは事実だろう！それはヒーローとは言わんのか

！——怪獣娘滅火羽織よ！」

「ツ！私は、私は——」

宇宙恐竜<sup>殺戮兵器</sup>だつた少女は揺れ動く。自分は何になりたいのか、どうして欲しいのか……。

「……私はオールマイトを殺したい……でもそれ以上に——」

一瞬、今にも泣き出しそうな顔になつたゼットンは直ぐに殺戮兵器の顔になつた。一瞬だけ——それでも平和の象徴には十分すぎだ。

(どうにかして欲しいと願つてくれてゐるんだ！しかし、どうしたら——そう言えば)

オールマイトはゼットンの言葉を思い出していた。

『血とは魂の通貨、命の貨幣。命の取引の媒介物に過ぎない——成る程な、生命エネルギー

「もそれに当て嵌る』

と発言していた。

つまり血とは存在全てを内包し、魂と肉体を繋げる一種のツールとでも言えるのでは  
ないだろうか？・・・さらに、生命エネルギーもそれに当て嵌るならば――

(O F Aもそれに当て嵌る！)

先程志村奈菜はO F A事を精神の寝台列車と呼称していた――つまりは生命  
エネルギーその物と言える精神（意識・意思・知識・感情・記憶）を蓄積（何故オール  
マイトが精神を五つに分けて考えられるかと言うと・・・酒に酔つた志村奈菜がペラペ  
ラ喋つたから）するからこそ精神の寝台列車と例えたのではないだろうか？

『当たりだよ、俊典君』

ファーストは感心した顔で頷いた。

オールマイトは拳を握り締めて決意を固め、O F A内部の記憶に意識を向けた。

そこで見たのは・・・仇敵足る二人が仲良く過ごしている色々な場面の記憶だった。

数々の場面の中でのオールマイトが重要だと思つた場面が今から出すこの場面だ。

「なあー、A F O

「何だい、奈菜？」

机に突つ伏していた志村奈菜が読書をしていたA F Oに声を掛け、A F Oがそ

れに答えた。

「お前に聞きたい事が二つあつて……一つ目がどういう経緯であきつ丸に成れるようになつたんだつけ？」

そう言われて A F O<sup>オール・フォー・ワン</sup>は少し考えた様な素振りを見せた後に黒い陸軍制服を思わせる上着にプリーツスカートに軍帽、背嚢といふにも陸軍らしさを匂わせる衣装と黒いマントを身に付けた黒髪ショートヘアの少女の姿形になつてしまつた。

オールマイトはコレに驚愕の表情を表した……と言つてもリアルでは余裕たっぷりな笑顔のままだがキリエロイドはそれを見て、

『クククク、無理してゐる……可愛いぞ俊典！』

何て言つて A F O<sup>オール・フォー・ワン</sup>に咎められていたりするのだが……それは放おつておこう。

オールマイトが驚愕の表情（精神世界だけ）をした理由は……

（彼女はミッドナイト君やワイルド・ワイルド・ブシツーキヤツツ達と同期のプロヒーローだ。私も何度も共闘した事がある実力者で、私が知る限りゼットン少女に並び立てる格闘能力を持つていると判断しているヒーローの一人だと記憶している）

そう、あきつ丸は『艦娘ヒーロー』として十五年以上前にプロ入りしたプロヒーローだ。

更には個性を使用しない戦闘技術はオールマイトやエンデヴァーも認める程で、オー

ルマイトの見立てでは並び立てる存在は宇宙恐竜ゼットンか博麗靈夢そして滅火瀨居等の実力者くらいな物だろうと考えてしまう程だ。

『自分は揚陸艦あきつ丸の個性を持った所謂「艦娘」と言う奴であります。どうか今後とも宜しくお願ひするのでありますよ、皆々様』

と言う自己紹介を初対面の者にしている礼儀正しいプロヒーローだ。  
（そんな彼女の正体が…… A オール・フォーワン F O だつたとは）

信じられないと言う感情は不思議と沸いてこない。

そう言えば自分を見る目が……例えるなら、そう盟友の後継者を見ている様な感じ  
だつたのと常日頃から自分は悪党の方に向いていると言っていたのを思い出した。

（お師匠絡みかな？例えば自分が死んだ後で良いからヒーローになつてくれないか何て  
言われたとか……お師匠なら充分あり得るな、うん）

### 閑話休題

「自分のこの個性『艦娘』は押し付けられたり貰つたりした個性が色々合わさつた個性……正直ねえ渡す側も貰う側もこうなるとは思つても見なかつたでありますな」「

とガツクリ項垂れてしまつた A オール・フォーワン F O 改めあきつ丸。

恐らく中学生ぐらいの年齢であろう今は亡きオールマイトの師志村奈菜は宿題らしき物を横目にその様子をケラケラ笑いながら見てゐる。

それを見てあきつ丸は不機嫌そうな顔をして、

「勉強を見て欲しいと言われたから自分の本拠地に連れて来たのに・・・宿題しないなら帰らせるでありますよお」

それを聞いた志村少女は急いで宿題を終わらせようとして、また突つ伏す。

それを見たあきつ丸はケラケラ笑いながら、

「雄英高校に行きたいのなら、分からぬ問題は自分と言う専属教師に頼るべきでありますよお」

と発言した。

それに対し志村少女はキラキラした笑顔であきつ丸に抱き付いた。抱き付かれたあきつ丸は、

「ちよつ！異性だと言う事忘れて無いかな！」

何て抗議するが今は同性だと押し返され黙つてしまふのであつた。

その後は分からぬ事はあきつ丸に教えて貰いながらオールマイトから見ても難しいと感じる問題をしつかりやりきった志村少女は先程の続きをとして、何でそんな喋り方なのかと質問した。

それにあきつ丸は

「特異点の友人から『艦隊コレクションのあきつ丸はこんな口調である』と教えられて、

ロールプレイガチ勢としてはそうしなきや気が済まなかつたので……今ではこの姿だと無意識に出来る様になつたであります

それで満足したのか二つ目の質問として

「O F A<sup>ワン・フォー・オール</sup>は個性を与える個性＋力をストック出来る個性だろ？……だつたらどうやつて力をストック出来るんだ？」

それを聞いたあきつ丸は感心した様子で領いて、言葉を選びながら話を続ける。

「そう言うのは愚かな弟では引き出せないでありますからねえ……大方後継者達の個性が混ざつてゴッチャになつてゐるのでしような」

「つまり私の観察眼は凄いと言う事だな！」

「うん、その通りでありますよ」

「良し！」

その後仕切りに喜んでいた志村少女は疑問に思つた事があるようで、

「それって新しい個性を追加してと言う話か？」

と質問したが、その答えは否定だつた。

「追加しなくとも力をストック出来るでありますよ。エネルギーを自力で作り出す事は出来ないであります、電力も火力も馬力もある意味エネルギーとつまりはストック出来る力と言えるでありますよ……但し奪うことは不可能でありますがね」

「じゃあどうするんだ？」

「例えば物凄い拳圧とか、炎を操る個性持ちが発する熱エネルギーとか、風を操る個性持ちが作り出す空風とかね……色々やり方はありますな」

ここでO-F-A<sup>（ワン・フォー・オール）</sup>7代目後継者志村奈菜の記憶は打切られ、オールマイトの記憶は現実へと戻された。

（最後のA-F-O<sup>（オール・フォー・ワン）</sup>の言葉にはまだ続きがある）

そう、微かだがオールマイトには最後の言葉の続きを聞き取る事が出来た。

『まあ発電所から電力を供給してもらうイメージでありますよお～……使い方次第では本当に化ける力でありますから伸ばす事を進めるでありますよ、奈菜』

（つまりゼットン少女やエンデヴァーが作り出したエネルギーを……奪わずに供給してもらうイメージ）

オールマイトはことO-F-A<sup>（ワン・フォー・オール）</sup>に関しては天才的な感覚を持つていた。

O-F-Aを受け継いでからある程度の感覚は直ぐに掴んで見せる程彼と言う存在は天才なのだ——そんな彼がここまでお膳立てされて習得出来ない訳は無い。

・・・まあそれ以外にも、  
『A-F-O！少しは加減し――』

――全てはO-F-A<sup>（ワン・フォー・オール）</sup>と君自身の浮遊、この二つの個性伸ばしを怠っていた君が悪い！

勉強だけで大丈夫かと思つていたらコレだ！雄英高校の受験までの猶予はもう10ヶ月しか無いんだぞ！」

『だ、だとしても、い、幾らお前は個性を使わないとは言え近接戦闘でお前に勝てる訳——』

『この程度僕が師匠から受けた修行に比べれば子供だましも良い所さ！それに僕の動きをある程度見切る事が出来たら遅れが前進になるぞ！——さあ、更に向こうへ！

P<sub>ブ</sub>l<sub>ル</sub>u<sub>ス</sub>U<sub>ウ</sub>l<sub>ト</sub>t<sub>ラ</sub>i<sub>ト</sub>r<sub>ア</sub>だ！』

『勘弁してくれえ！』

A<sub>オ</sub>l<sub>ル</sub>F<sub>オ</sub>—O<sub>ン</sub>によるスバルタ教育のお陰とも言える。

実際O<sub>ン</sub>—F<sub>オ</sub>—A<sub>オ</sub>にはオールマイトの師匠である志村奈菜がO<sub>ン</sub>—F<sub>オ</sub>—A<sub>オ</sub>の事で（志村奈菜が修行をサボつてほつたらかしにしたのが原因だし、オールマイトもそこは理解しているのだが）A<sub>オ</sub>l<sub>ル</sub>F<sub>オ</sub>—O<sub>ン</sub>から受けたスバルタ指導は効率的で理にかなっているのだが、平和の象徴であるオールマイトがガクブルしてしまう程に厳しい物となつていて……まあ、そのスバルタ教育お陰でO<sub>ン</sub>—F<sub>オ</sub>—A<sub>オ</sub>と個性：浮遊の二つの組み合わせは修行していないオールマイトであつても使いこなせた（本当はオールマイトが天才的だったセンスを持つていたからだが……それを指摘出来る者は居ない）。

（……そのお陰でゼットン少女に対抗出来る。要するに当たつて碎けろ————いいや、

勝つ！）

「エンデヴァー」

「・・・何だ、オールマイト」

「試したい事がある」

「・・・勝機は？」

「——ある」

「——なら話せ」

オールマイトは力をストックする方法をエンデヴァーに話し始め、それを見たゼットンは何かやられる前にオールマイトを殺そうと動き——オールマイトを見失つてしまつた。

辺りを見回すがかれさは見当ならない、地上に降りてかの平和の象徴オールマイトを探しても地上には見当ならない。

・・・そう地上には。

「——ツ！」

ここで彼女は思い出す——O·F·Aは先代達の個性を先代達より強力に使う事が出来ると・・・では志村奈菜の個性は何だ？

そんなの決まっている。マントを受けたシルバーエイジコスチュームを着ている

オールマイトを見てスーパーマンみたいだと感じて、

『コレに志村奈菜の個性を合わせたらマジモンのスーパーマンだ!』

と思つたのだから覚えている。

彼女の個性は浮遊だ・・・ならオールマイトは今何処に居るのかは直ぐに分かる。

地上にいる限り狙い打ちされるが落ちだ、ならば空中に居るのが筋と言う物だろう――

急に嫌な予感がした。

またタールの匂いが鼻孔を擦り、背中から冷や汗が垂れ流れる・・・その正体は決まつて――

〔フライ　イン　ザ　スカイ　デトロイト　スマッシュ!〕

平和の象徴の急襲を紙一重で回避する事に成功した。・・・だが、可笑しい。言葉ではどう言えば良いのか分からぬが――――

(――オールマイトの動きが変わつた!)

幾ら彼が平和の象徴だとしても急に自らに昔から染み付いた動きを変える事は不可能だ――見本となる物がなければ。

(O F A) の中に参考にすべき記憶でもあつたのかね?・・・しかし未知数だな O F A 確か個性発動と記憶を垣間見るのは本来別々の筈だ。ファーストが手を出したのか? だとしても、そんな事は今はどうでも良い)

ゼットンは一人正解を導き出しながら、更に強くなつたヒーローを祝福する。  
 幾ら自らをヒーロー殺しと定めているとは言え、滅火羽織と言ふ怪獣娘はヒーローに死んで欲しい訳では無い——自らと言う人類が倒すべき存在を倒して欲しいのだ。

…しかし、ゼットンは別に死にたい訳では無いのだ。

(私はどうして欲しいのだろうか…いや、何て言つて欲しいのだろうか?)

それが分からぬ。この世界に転生してから思つていた筈なのに頭に靄が掛かつて思い出せない。

『■は■■に■■』

(なんだつけ? 大切な事だつた様な、そうで無いような良く分からぬ)

気持ちを切り替え、オールマイトに向けて笑みを浮かべる…涙は不思議と溢れてこなかつた。

オールマイトは考える。

(…幾ら彼女を倒して生き方が変えられると示したとして、彼女の内面は違う)

そう、彼は全てを救いたいと思う者…いやだつたと言うべきか。

オールマイトは人間だ。限界は必ずある…それでも全て救いたいと、救えると思つていた。だからこそその平和の象徴だと考えていた——ゼットンに敗れて、初代ウルトラマンとのやり取りを思い出す前まではそう思つていた。

(全てを救う必要は無い……いや、救える者は救いたいと思う。だがしかし―――人  
は自らの意思でしか救えない。救われようとする気持ちがなければ救えないのだ)

オールマイトは割り切つた・・・そうでなければ成らないのだ。師匠を仕方なしとは  
言え見捨ててしまた彼に――――

『・・・私を殺してくれ A F O』

『まだ他に方法がある。君がヤプールが施した催眠を無闇に破つてしまつたからこう  
なつたが・・・一旦志村奈菜としての記憶を忘れれば君は助かる!』

『それを復元する事は我等ヤプールには造作も無い事だ。故に志村奈菜よ早ま――――

『そう言う問題じや無い、無いんだよ!』

そう志村奈菜は頭を振る・・・その顔は大きな隈が出来ていた。

『例え復元されようとも、忘れるのは耐えられたいんだ!だから A F O いや――――

リキユール、私を殺してくれないか?』

何だ、今のはとオールマイトは一瞬動きを止めた。

「オールマイト!」

エンデヴァーの声を聞いて意識を浮かび上がらせて暗黒火球を回避するオールマイ  
ト。

(今のは・・・いや、今は彼女を意識しなければ)

## 回想＆過去編3：英雄とは後編

気を取り直し、どうすれば良いかそう悩むオールマイトはO-F-Aで垣間見たオール・フォー・ワンと今は亡き志村奈菜とのやり取りを思い出す。

「人の内面を救う力はO-F-Aにはあるのかてつね。私はヒーローになつてからコレが気になるんだよ、A-F-O…人は救われたいと願つている人しか救えないから、その気にさせる力はあるのかなつて」

確かに直前の記憶では救われる気が無い人物が敵に傷付けられて本当は自分は死にたくないと思っていたのに気付き今更助けてくれと死ぬ間際に言つていた筈だとオールマイトは思つた。

それは当然と思つた時

「可能だ

とA-F-O言つた。

彼はニコニコと笑いながら志村奈菜と言う『ヒーローと言う役職につく者』を眺め、彼女の瞳を眺めて目が死んでいない盟友を確認してまた一層深くなつた笑顔でブラックコーヒーを飲んでいる。

・・・すると志村奈菜は、  
「ありがとう」

と何故か礼を述べた。

「ミルク入りでは無いと言う事はそう言う事だろ？」

それを聞いたA F Oは詰まらなさそうな顔をした後にフンと鼻を鳴らして話を続けた。

「・・・O F Aは嘗て言つた通りエネルギーをストックする力がある。ストックと言  
う事は他者に与える事が可能と言う事だ」

「――――」

コレにはオールマイトも驚いた。

力をストックするそれは分かる・・・しかし与えられると言う事は分からなかつた。

「僕の持論だけどあり得ないと言う事はあり得ないのさ。超常黎明期に個性が世界中で  
無差別に発現した。コレは本当に無差別で僕みたいな当時五十歳のおじさんや生まれ  
たばかりの赤子まで幅広く発現した・・・架空は現実に、非現実は現実になつてしまつ  
た。・・・だからこそ僕はあり得ない事は存在しないと思うんだ」

オールマイトも志村奈菜も・・・オール・フォー・ワンの言葉を真剣に聞いていた。

志村奈菜の盟友  
真剣な表情で悪の帝王たる者は志村奈菜の瞳を眺めながら、言葉を続ける。

「あり得ないと決めているのは自分自身で、限界を作っているのもまた己自身だ。僕の先生である『サー・ナイトメア』て言う人が言っていた言葉で、先生は変わった人だった……さて、一旦話をO-F-Aに戻そうか」

自らが入れたプラツクコーヒーを飲み干し、向かい合いながら続ける。

「僕の個性は僕の敵(ヴァイラン)ネームであるA-F-Oで、力は知つての通り『個性を奪い、個性を与える』だ。O-F-Aも同じでやろうと思えば『力をストツク』を『力を解き放す』と言う行為に変換出来ると思わないかな？……その様子だと考えていなかつた様だね——ヒーローは常に命懸けだ。他者を救うと言つてはいるのだから自分の手で救える様に、生きて帰還出来るよう頭を働かせるんだ」

(――ツ)

『ヒーローは常に命懸けだ。他者を救うと言つてはいるのだから自分の手で救える様に頭を働くだ。自分も五体満足で生還しなきゃヒーローじゃないだろ？』

「ヒーローとはピンチを乗り越えて、先へ進む者だと僕は思うよ

『ヒーローとはピンチを乗り越えて、先へ進む者だと私は思う……だからO-F-Aを私は以上に使いこなせよ俊典！』

「だから笑つてはいる方が良い、ピンチな時に笑える奴が僕の経験上一番強いよ……最も内面はどうか知らないけどね」

『どんだけ恐くとも、自分は大丈夫だつて笑うんだ。世の中笑つてるやつが一番強いからな！』

(師匠は A<sub>オール</sub> F<sub>フォー</sub> O<sub>・ワン</sub> )の言葉を受け、自分なりの言葉で私に伝えたのか……)

衝撃はやつて来ない。

これだけ昔からの付き合いだと影響されても不思議では無いからだ。

「それじやあ A<sub>オール</sub> F<sub>フォー</sub> O<sub>・ワン</sub> ! その続きを——」

その言葉を A<sub>オール</sub> F<sub>フォー</sub> O<sub>・ワン</sub> は手で制して、チツチツチツと指を交互に振り立ち上がった。

それを見て啞然としている志村菜奈を横目に A<sub>オール</sub> F<sub>フォー</sub> O<sub>・ワン</sub> は言葉を発した。

「僕は堅気の仕事をして金を稼いで、好きな小説の最新巻を買うのさ♪」

「それは余りにも理不尽だ——」

「答えを教えるだけじや意味がない。至らぬ点を自身に考えさせる！成長を促す！『教育』とはそういうものだ！」

急にオール・フォー・ワンが声を張り上げた。

突然の事に動けない志村菜奈を優しく眺めながら、 A<sub>オール</sub> F<sub>フォー</sub> O<sub>・ワン</sub> は帽子を被つて出口へ向かうと・・・ふと動きを止めて優しく背中越しに声を発した。

「常に考え方を巡らせろ、奈菜。君なら、或いは君の意思を継ぐものなら必ず出来る――要是 P<sub>ブル</sub> u<sub>ス</sub> U<sub>ルト</sub> r<sub>ラ</sub> a<sub>だ</sub>」

そう言うとA-F-Oは何処かへと去つていってしまった。

(つまりはO-F-Aに溜めたエネルギーを相手の精神に流し込む事が出来ると言う事……しかし、これは賭けでもある。ゼットン少女に生きる気合を与えた場合吹っ切れで私を殺しに来るかもしない)

そうO-F-Aがストックした力を相手に精神エネルギーとして送り込んだ際に送り込んだ自らがゼットンに殺されかねない。

(・・・しかし!)

「ハハハ！オールマイト面白い、面白いぞ！」

ゼットンは楽しいと一目見て分かる顔でオールマイト向かつて暗黒火球を放つに。

それをオールマイトは志村菜奈の記憶を頼りに暗黒火球を回避し、テレポートでオーラマイトの真横に来たゼットンが放つた拳を自らの拳で相殺する。

続けてオールマイトに向かつて攻撃を放とうとするゼットンだが――

「フレイム・ケルベロス！」

炎で作られたケルベロスがゼットン目掛けて襲い掛る……ゼットンはそれを握りつぶしその隙をオールマイトに付け入られそうになり、エンデヴァーの近くへ弾き飛ばす。

「大丈夫か？」

大して心配していなさうな様子のエンデヴァーに苦笑いしながらも立ち上がる。

「ああ、ノープログレムさ！」

一方その頃二人のヒーローを眺めながら志村奈菜とオール・フォー・ワンが談笑していた（最も二人共念話とテレパシーのため談笑と言つて良いのか疑問に残るが…まあ些細な事だ）。

『… A F O、流石の私もあんな個性を持つては予想外だぞ』

『ドラッグクッキングの事かい？それはそうだろうよ。あれは僕にとつて奥の手中の奥の手だ…しかしあんなに自信満々だった癖に最終的には僕に頼るのかい』

個性：ドラッグクッキング

触れた食べ物を任意の薬に変えられる個性で、自分が触れたあらゆる食べ物を触れた瞬間に誤差なく変化させる事が出来る。しかし、成分や調合について完全に理解していなければ変化させる事は不可能と言う欠点も存在する。

『仕方ないだろう！お前が無理をするなど言つたんじやないか…良く私がその薬を操る事で傷付いた精神を治す事を直ぐに思い付くとはな』

『逆にそれしかないだろうと思つたんだけどね』

ここで「何故 A F Oがその薬の成分や調合の仕方にについて完全に理解しているのか？」と疑問に思う者も居るかも知れないが、実はオール・フォー・ワンは個性が世界

中で発現する前からオール・フォート・ワンの師や書物、した後もヤプールやゼットン星人工ド等を始めとした協力者から教えて貰つた為に超一流薬剤師と言えるかも知れない。因みに医学的知識と技術も同じレベルである。

『……そう言えばガイアメモリ関連の個性まだ持つていいのか？』

ガイアメモリ

“個性”が発現した五年後 西暦2015年の出来事である。に発見されたアーティファクト。

その正体は「正体は地球の記憶」とそれにまつわる力を内包しているメモリで、何らかの手段で内包された力を取り込んだ者は超常の力を持つ怪人『ドーパント』に変身するのだが……やはりと言うべきか人間にとって過剰すぎる力であり、使用の度に内包する「毒素」によつて変身者の心身を蝕み、最悪の場合は使用者の人格を歪め、肉体に重度の後遺症を残す事もある。

最初はオカルトだと誰も信じなかつたが、使用した韓国人が起こした暴走事件 この韓国人は日本首都でのテロを企んでいたが暴走を引き起こし、自らと同じ思想を持つテロリスト団体（国際個性反対団体）の幹部達と自らの家族をまとめて殺害した後 A F Oに鎮圧されたのだが……ガイアメモリ共々 A F Oのモルモットになつたをきつかけとして裏社会や表社会共々危険視され当時の A F Oや各界隈の大物達の手

オール・フォート・ワン  
オール・フォート・ワン  
A F O 悪の象徴

によつて闇に消された。

『……持つてゐるよ。あの時は本当に驚いたし、急に挿入してきた君に殺意が沸いたね』  
『ここで過去のやり取りを少し見ていただこう。』

『これがお前が押収したガイアメモリか A·F·O ?』

『そうさ、これがガイアメモリさ……しかしこれが中々面倒な代物でね。この内包された「記憶」を個性として抽出出来ないかなと』  
『方法は分かつてゐるのか?』

『……個性：遺伝子操作で「記憶」に合う個性因子を新たに作り出して混ぜ合わせればどうにかなるんだが、先程それをやつた韓国人が爆破しちゃてね』

『つまり再生系個性さえあれば問題ないんだな?』

『うん、そうd——』

『えい☆』

『……は?』

かつての光景を思い出した A·F·O 軽く身震いする。確証はないと言うのに唐突に T のイニシャルが付いたメモリー——『テラーメモリ』を挿入してきたので急いで個性・遺伝子操作をもちいて内包された「記憶」と合う個性因子を新たに作り出して混ぜ合わせ、反動を U N D E A D —不死—で抑え込む事で何とかガイアメモリを摘出しながらに『テ

『ラーメモリ』の力を個性として得る事が出来たのだが・・あの時はオール・フォー・ワ  
ンは生きた心地がしなかつたし、間髪入れずにWのイニシャルが付いたメモリ——  
『ウエザーメモリ』を入れて来た時は全ての工程を一瞬で終らせてキリエルの巫女（当時  
の志村奈菜）の顎にアッパー・カットを打ち込み浮き上がった身体を掴んでバックドロッ  
プを食らわせた。

『あれは痛かつたぞ、最高の魔王』

當時を思い出して愚痴る志村菜奈に殺意を思わず高めるA·F·O···なお、高め過ぎ  
て滅火羽織ほろびはおりが冷や汗をダラダラ搔きながら動きを止め、オールマイトが記憶で見た  
A·F·Oの殺氣を思い出し身構えてしまふ事態となつてしまつたが直ぐ殺氣を収めた  
為に大事には至らなかつた。

···訳では無かつた。

否、殺氣は第三者（志村菜奈とA·F·O以外）には感じられないが、は殺氣を出し続  
けている···それも先程以上の強さで。

それでも志村菜奈とA·F·O以外には感じられないのだ···では理由は何なのだろ  
うか？

『···それはなんの個性だ？』

『U·N·C·H·A·N·G·E——不变——さ』

U N C H A N G E — 不変 —

素手もしくは素足で触れる事で物体の変化を強制的に封じる個性。

他にも固定した空気を操り不可視のバリアを発現させていかなる攻撃も防ぐ事も出来

来て、また空気の「形」を固定して任意の状態にして操る事も出来る。

・・・つまりは自らが発した殺気に滅火羽織ゼットンが反応してしまったので志村奈菜個人に殺氣をあてる為（志村奈菜キリエルの巫女を守ろうと言う意思もあるのだが・・・まあ彼女の態度が悪すぎたと言うのもある）に隔離したのである。

『・・・そんな事より、何か言うべき事は？』

『ごめんなさい』

『分かれば良し・・・そう言えば特異点の友人が『お前は否定者にでもなるつもりか？』なんて言つていたんだけど君は何か知つていてるかい？』

話をしている途中でA F Oは殺気を解きながら個性を使っての防御を更に強化しているようだつた。

『否定者・・・すまないが私も分からいいな』

（まさかオール・フォー・ワンが否定者について知つているとは思わなかつたが、彼女と敵対している『神』について教えたらまず叩き潰すのに協力した後に能力集めし始めそうだよなあ・・・面倒臭い事になりそうだから黙つておこう）

そんな事を思いながら、志村菜奈は思考を巡らしふと今の状態は過剰戦力では無いかと感じた。

ヤプールにA F O等この場面では明らかに過剰戦力だと感じる・・・まるでこんな

事態になる事が予め分かつていたかの様な違和感を感じ、戸惑ってしまう。

・・・何か無いかと記憶を探つてみると嘗て聞いたとある存在が頭を過る。それを含めて考えて見ると全てに置いて納得出来るが――

『・・・2000年以上前に蒸発した筈なのにも関わらず、今もなお暗躍が疑われている『悪夢』――サー・ナイトメアとは一体何者だ?』

――そうサー・ナイトメアは2000年以上前の西暦2000年前半に姿を消した筈なのだ。

『それでも暗躍が疑われる位にサー・ナイトメアと言う存在は大物なのは・・・抑止力や僕等を出し抜き、他者に取つての悪夢自らが描いたシナリオ通りに誰も操シナリオに忠実られていてる事である事に気付かず、自らのみの考えだとしか思えない様にしてしまう怪物が僕の先生なんだ』

辺りを注意深く探りながら自慢げにそして誇らしそうに胸を張つて語るA F O。

『・・・だから『悪夢』と言う別名を付けられたのか』

『うん、後ね確証は今の所無いけれど今思えば2020年に博麗靈夢と伊吹萃香・・・この両名がこの世界に死後やつて来たのも先生の計画通りだとしたら納得がいく』



どの様に言葉を発言すれば良いか分からぬ。その件は  
〔他世界の概念を吸い取る穴〕  
擬似的な特異点の様な何かの暴走だと言う結論が出ただろうと、それ以外の真実など見  
つかりはしなかつたと、志村菜奈が何を言うべきか分からずに唸つてるとA・F・Oは  
〔キリエルの巫女〕  
志村菜奈の頭を優しく撫でながら話を続けた。

『まあ、特異点に関しては君も関わっているのは知つてゐるから仕方の無い事だと思う  
けれども、〔時間と異世界〕  
縦と横を自由に移動できる存在に擬似的な特異点の様な何かの事と約800  
年前の出来事を教え、下準備さえしていれば可能だと僕は考へてゐる……と言うよりも  
〔僕の師匠〕  
悪夢と呼ばれし者ならやりかねない』

それを聞きながら志村菜奈は深呼吸して気持ちを落ち着かせて、情報を整理していく  
く……すると疑問に思う事が出てきた。

『じゃああれはどうなんだ?』

『……あれ?——ああ、個性：不死鳥の事か』

個性：不死鳥

超高温な炎を操る事が可能で、その他にもUNDEAD—不死—と同等かそれ以上の  
再生能力を持つ……しかし不老と言う訳では無く年をとつてしまふがUND<sub>アンド</sub>EAD—  
不死—を持つA・F・Oには関係無い話だ（不老では無い事の解説は『オール・フォー・

ワン保有個性』を参照して頂ければ幸いです)。

『あの個性に関しては先生も把握していないと言ふべきか、想定すらしてないんじやないかな? · · · 何せ発現した経緯があれだからねえ』

### 《確かにな》

そんなこんなで話をしていると · · · オールマイトと 滅火羽織の戦いに動きがあつたのだ。

オールマイトに向けてエンデヴァーが炎を放ちそれをオールマイトが纏う · · · 否、 エンデヴァーの炎を O-F-Aワン・フォー・オーを使用する事で己が力へと変換しているのだ。

『まあ発電所から電力を供給してもらうイメージでありますよお · · · 使い方次第では本当に化ける力でありますから伸ばす事を進めるでありますよ、 奈菜』

(オール・フォー・ワンはお師匠にそう言っていた · · · 成程制御は難しいが、 出来ない訳ではない)

そう思いながらオールマイトは自らの身体を確かめ、 拳を力強く握りしてる。

そして意気よい良くゼットンに向かつて突進をした。

それを見た滅火羽織はしつかりとオールマイト見据え、 迎え撃つように飛び出し拳を叩き付ける。

その時二つの力が衝突した。

滅火羽織はとある事実に驚愕した。

(私に何かが送り込まれてくる!)

そうオールマイトは自分のストックしたエネルギーを滅火羽織に送り込んでいるのだ。

O·F·Aにはエネルギーをストックすると言う権能があり、それを利用して滅火羽織に生きる為の活力を流し込んでいる···しかしオールマイトが懸念した通り活性化した瞬間にオールマイトを殺しかねない。

(···それでも私は言わねばならない)

『限界だーって感じたら思い出せ、何の為に拳を握るのかを。それが原点、オリジンつてやつさ! そいつがおまえを限界の少し先まで連れてつてくれる』

嘗ての師が残した言葉、

『あり得ないと決めているのは自分自身で、限界を作つているのもまた己自身だ』

宿敵たるオールマイトの師匠が残した言葉。

···そして、

『···科学特捜隊にそれに続く者達に、私もなりたいと思つては駄目だったのかな···私はヒーローを殺す者だつた、でも今世ではなれると思つていた』

『でも、オールマイトよ。貴様は私に破れた。私と言う存在に敗北したんだよ···それ

私の憧れ

はつまり私のあり方は変われないと言う事に他ならない』

『——私もヒーローになりたかったなあ』

・・・彼女が望んでいるであろう『言葉』言う為にオールマイトは加速した。

「——ツ！」

滅火羽織<sup>ゼット</sup>は驚愕した。

その理由は何か？・・・そんな物は決まつていてる。

オールマイトが自らを殺すどころか救おうとしているからだ。

滅火羽織<sup>ゼット</sup>は前世で数多くの死線や場数を潜り向けてきた・・・それもオール・フォー・

ワンやそれよりも前の裏社会の支配者達に並び立てる程の数を何度も何度も乗り越えて來た。

だからこそ彼女はオールマイトが自分を殺戮兵器<sup>化物</sup>として見ていないと言うのが分かる。

「お前は何だ！・・・何故私を殺そうとしない！何度も何度も殺しかけただろう」

オールマイトの攻撃を捌き時にくらいながら、彼女は内に流れ込んでくるエネルギー

に・・・暖かな気持ちになるのを必死に抑えながら吠える。

「だが、私は死んでいない！」

それをオールマイトは否定した。

「君がもし本当に殺戮兵器だとしたらここに居る全員が皆殺しにされている筈だ！それなのに私達は生きている、それが答えじゃないのか！」

「——」

「他の者達を見捨てて逃げられたのに逃げなかつた、見捨てなかつた……それが答えだろう！」

滅火羽織<sup>ゼットトン</sup>の動きが鈍る、それと比例してオールマイトは更に加速する。  
オールマイトから逃げ出すようにテレポートし、バリアを張りながら滅火羽織<sup>ゼットトン</sup>はエネルギーを腕に集中させる。

「綺麗事だ」

そして彼女が出せる最強の技ゼットンブレイカーを放つた。

「嗚呼、そうさ」

それでも平和の象徴は止まらない。

「ヒーローは！命を賭して、キレイ事を実践するお仕事だ！」

オールマイトはその言葉を叫びながらゼットンブレイカーを紙一重で避け、彼女のバリアに拳を打ち付けた。

(・・・有り得ない私のバリアが——)

徐々にひび割れる。

「HヘルEエルLフレイFムLアムAオブMスEマツOシユFトSマツMシユAシユSシユHシユ!!」

拳に炎のエネルギーを纏わせて、拳を振り抜く。  
核爆発。

そうとしか言いようの無い一撃がバリアを破る。  
その時滅火羽織の頭が急にクリアになる。

『君は、ヒーローになれる』

言われたかつたセリフが浮かび上がる。

『私はヒーローになれるか?』

「ああ、勿論!」

遂にバリアを突き破り拳が彼女に突き刺さる・・・かと思われたが、

「――ツ!」

オールマイトのエネルギーが滅火羽織に吸收される。

「私の奥の手だ」

高速でオールマイトの眼前にテレビポートして、彼を後方に思いつ切り蹴飛ばした。

その後、

「アブソリュート・デストラクション!!」

稲妻状の強力な攻撃が滅火羽織の背後から襲いかかつたが・・・彼女は最強の怪獣、宇

宙恐竜足る者故に防ぐ事など造作もない。

オールマイトから奪つたエネルギーを上乗せしたゼットンブレイカーで全てを相殺する。

「一応聞くがお前は？」

ウルトラマンとよく似ている…しかし彼らの銀色の身体とは対照的に黄金の体、手の甲には赤い宝玉らしきものが埋め込まれている人物が姿を表した。

「私は究極生命体、アブソリュートティアンの戦士。アブソリュートタルタロス！」

アブソリュートタルタロスと名乗る存在は両腕を上げ、敵意が無い事を表した。

「攻撃してきて、それか？」

「それはそれ、これはこれだ…この世界の法則では有り得ない別世界の記憶を保ちな  
がら転生したイレギュラーであるお前に興味を持ち支配下に加えようとしたがそれが  
不可能ならせめて力を見極めようとしても良いだろう？」

それを聞いても警戒を解く者は居なかつた。

それを見てアブソリュートタルタロスは頭を振りながら、

「不意打ち気味に襲撃を仕掛けて来た存在を信用する事など無いという事か」と納得した。

「さて私は先程も述べたようにアブソリュートティアンの戦士であり、特異点でもある…」

その反応は特異点についての知識が無いな」

特異点と言う言葉を聞いた者達が疑問に思つたのを一瞬で悟り、アブソリュートタル

タロスは言葉を続ける（オール・フォー・ワンが反応したのには気付いた模様）。

「多元宇宙論他にも平行世界とも言われる考え方がある」

静かにアブソリュートタルタロスは言葉を選びながら話を進める。

「多元宇宙論<sup>マルチバース</sup>は世界においてある時点から分岐し、分岐前の世界と並行に連なる別の世界の事だ。詳しい説明は省くが、要はもしもIFの可能性を実現化した世界が、自分が生きているところとは別に存在するかもしないと言う考え方だ」

更に言葉は続く。

「世界と世界とを隔てている壁を突破し、別の宇宙に行くことは、基本的には不可能に近い・・・しかし時折、その事を可能にする存在がまた広い宇宙には存在する事がある——それらを称して、特異点と呼ぶ」

一度言葉を区切りながら話を再開する。

「また特異点の形状は様々で、私の様に人型をしている者もあれば、怪獣墓場のように特定の場所を示すこともあるが、次元を超えることができる存在は限られており、特異点は皆すさまじい力を持つている物だと言う事も覚えておけば良い」

「じゃあそんな凄い存在が何故この宇宙にやつて来た？」

「それはそこのヒーローにでも聞けばよいのだが、まあ良いだろう」

アブソリュートタルタロスはオールマイトを指し示しながら話を始める。

「この世界には『悪しき異界の呪術者の手で墓場より蘇りし怪しき獣、ここに封じん』と言う言い伝えがある」

ここで話を一時終わらせ、ため息を吐きながら思い出したく無いトラウマを思い出すかの如く話を続けた。

他世界の概念を吸い取る穴

「…私はその伝承となつた擬似的な特異点の様な何かの事と約800年前の出来事を小耳に挟みその怪獣を手に入れる為に逆算して問題無いだろうと判断した時間軸に移動して、結界を破壊したのだが…明らかに過剰すぎる強度とエネルギーを兼ね備えた怪獣レッドキングと異空間化した山の中で死闘を繰り広げる羽目になつた」

そして彼は項垂れた。

「…想像出来るか？放置していれば世界を崩壊させかねない  
他世界の概念を吸い取る穴

擬似的な特異点の様な何かを見た私の気持ちが…明らかに世界にとつての自殺行為だ。その歪みを吸収したレッドキングと永遠とも一瞬とも言える時間死闘を繰り広げ、隙を見て脱出したと思ひや星がブラックホールのコアを利用して私を転生させると宣言してきた」

「…」

その場には何とも言えない雰囲気が広がった。

志村 奈  
キリエロイドは気まずそうに顔をそらし、オールマイトはそんな危機的状況だったのかと驚愕し、Aオール・フオーワンFオーフOオーフは自らの推測が当たつていたのに対しても苦笑いを浮かべる。

それ以外の者達は同情する様な視線をアブソリュートタルタロスに向ける。

「…それは今すぐか?」

ゼットンは空気をあえて読まずに質問する。

「いや、今すぐでは無く私が死んだ後に擬似的特異点他世界の概念を吸い取る穴の様な何かつまりはブラックホールのコアを利用して私をデメリット無しで転生させるつもりだそうだ…最も死んだ直後の記憶は忘れるらしいが、些細な事だ」

「私達に手を出したのは?」

「珍しい者を手に入れたいから…もしくは君が良く知っているのでは無いだろうか?」

「…」

ゼットンは言葉を詰まらせ、俯く。

「成程、私の懸念は当たつていた様だな…まあ、転生するその時までしつかり生きて見よう」

「そう言つた後頭を下げ、

「それでは、さらばだ」

アブソリュートタルタロスは姿を消した。

# 悪党達の決闘

「フフ、ハハハ、ハハハハハハハハ！」

「何じや？何か良い事でもあつたのかの、先生」

がらき  
きぬうだい。  
殼木球大。

悪の支配者 A. F. O. に心酔しているマッドサイエンティスト。

容姿は小太りな体型、禿頭で口髭を生やし、歯車型のゴーグルを装着している。

本来の顔では児童養護施設や個人病院などを全国に所有し、自身の研究に利用できる優秀な被験体を探し集めている等している正真正銘の悪党の一人。

蛇腔総合病院の創設者にして理事長。

表向きの彼は気まぐれとも思えるくらいに様々な慈善事業に手を出しておおり、かなり広範囲で行つおり一般的には優しく信用できる人物として、多くの人物に慕われているらしく、原作ではエンデヴァーに追い詰められた際は周囲の医師、看護師が彼を守ろうとした。裏の顔を考えると数々の慈善事業についても、善意ではなく様々な場所から、自らの役に立つ個性の情報収集や実験材料を集めための行動だと思われる。

彼は脳無 A F O の個性の力である個性を奪い、与えるとDNAの混成や薬物などによる改造で無理矢理複数の個性を与える、人工的に作り出した「改造人間」。

本来、馴染み浸透する個性でもない限り一人の人間が複数の個性を宿すことは不可能に近いが、A F O の個性と人体改造によつてそれを無理矢理可能としている。しかし、ごく一部の例を除いて生きた人間ではその負荷に耐えられず物言わぬ人形のようになつてしまふ為、一定の行動（誰かの命令に従う、尋問された際は気絶するなど）をプログラミングした人間の遺体を使うという悍ましい方法でこれを解決した。を作る事に喜びや生き甲斐を感じており、お気に入りの個体に名前をつけたり、完成度の高いハイエンドと呼び、脳無に対する愛着を持つてゐる・・・まあ、どどの詰まりどうしようもないクズ兼小悪党である（今作のA F O が達観していく、独自の美学を持つてゐる為、実は原作程の大規模活動はしていな・・・と言うかA F O がT—ウイルスを始めたのヤバい薬を使ってヤバイ実験をしようとしたりしている 尚赤アンブレラとは違ひ刑務所内の終身刑や死刑の判決が出た極悪人達を秘密裏に攫つて山奥の地下や海底に作つた秘密研究所等何があつてもバイオテロ状態にはならない様にしており、更に1分以内に爆発する自爆装置まで付けていると言ふ徹底ぶりであるのだが・・・徹底している分ヤバイ事を平氣であるのがA F O クオリティー。その危険度は殼木球がらき きゅうたい 大が必死に止めて再考を全力で促した程。）。

## 閑話休題

「フフ、その通りさ」

「ワシにも教えてくれんか先生？・・・無論無理なら構わない」

殼木球がらきゅう大だいがこの様に下手に出ているのには勿論配下である以外にも理由がある。

それはA·F·Oオール・フォーワンが秘密主義な所があるからだが　その理由は世界に個性が発現する前は悪党同士での勢力争いや競争が激しすぎて情報を漏らしてしまつたら直ぐに付け込まれて消されるか死ぬより酷い目にあわされてしまう為。・・・今それをする必要があるのかと言われば、今現在の悪党達はA·F·Oオール・フォーワンから言わせれば小悪党であり最も警戒しているのは日本国天皇家や英國王家の秘密部隊、イギリス諜報機関M·I·6やI·C·P·O等の世界的に活動している組織を驚異と考へてゐる。

特にI·C·P·Oはルパン七世（ルパン三世の玄孫やしゃごとされる女性）専任捜査官としてまた銭形警部の玄孫やしゃごが付いたので警戒しているのだが・・・実はプロヒーローあきつ丸として銭形警部の子孫に協力した際、どちらとも彼女等の先祖に当たるルパン三世と銭形警部の技術と同等かそれ以上の事をやつてのけたので物凄く警戒している。

それ以外にも容姿と服装、射撃技術がかつて見た次元大介本人と思わしき人物を目撃しており、その際ルパン七世が彼の事を『次元』と呼んでいたので子孫か何かだと普通は考えるが・・・A·F·Oオール・フォーワンが記憶していた通りならば彼に妻や子供に当たる人物は居な

いので、かつてイタリアでM I 6が浦賀航 あらゆる分野に秀でた天才科学者で、その中でも脳科学のエキスパートであつたが、研究内容の秘密を記した解読不能の奇書「イタリアの夢」を遺したまま謎の自殺を遂げる。が作り出した解読不能の奇書「イタリアの夢」遠い昔から人々に脈々と受け継がれて来た偉大なる記憶——「偉大な偉人達」の人格は時に人々の潜在意識に夢として現れる事がある。

この「イタリアの夢」はその偉大なる記憶——「偉大な偉人達」の人格データを人々の潛在意識に干渉し、それを意図して出現させてしまうと言う高等技術である。

実はイギリス諜報機関M I 6は浦賀航の研究内容を模倣し「世界最高のエージェント育成プログラム」を進めており、それを完遂する障害となる浦賀航を自殺に見せかけて暗殺してしまつたのが事の真相である（これを知つてているのはイタリアの夢の中で浦賀航と遭遇したルパン三世と浦賀航の後ろ盾兼友人として協力していたA F Oのみ）。を利用し作り出したクローン——「偉大なるスター」レオナルド・ダ・ヴィンチ「世界最高のエージェント育成プログラム」を実行する為にM I 6に協力しているマッドサイエンティスト達が過去に存在していた「偉大な偉人達」の人格を抽出し、それを脳に植え付けたクローン人間の名前である。と同じく再現または作り出された人物では無いかと睨んでいる。

「いいや？ 聞いて大丈夫さ……と言うか聞いたや駄目だつたらこんなに笑わないよ」

「確かに。それでは先生何があつたんじや？先生が人目を憚らずに大笑いする様な話題は無かつたと思うのじやが、どうじや？」

それを聞いたA·F·O<sup>オール・フォー・ワン</sup>は苦笑いを浮かべながら頭を搔く。

「そんなに大笑いしていたのか。ちょっと恥ずかしいなあ、ハハハ……ところでドクターはスリーメイソン ルパン三世TVスペシャル バイバイ・リバティー・危機一発！に登場する世界的な秘密結社で、本作における敵組織。

ニューヨークの巨大ビルを本拠地とし、表向きは大企業としている。組織内部は才力ルトめいでおり、構成員たちはフード付きのローブと仮面をつけている。と言う組織を知つてゐるかい？」

「スリーメイソン？ フリーメイソンの間違いではないのか？」

「じゃあ無いんだよ。かつて絶大な力を持つ古い世界的な秘密結社だつたが、十年前に突然幹部全員が殺害されると言う事件が起つて組織は自然消滅してしまつたのさ……まあ200年以上前に壊滅状態に陥つてゐるんだけどね」

それを聞いたドクターこと殻木<sup>がらき</sup>は目をパチクリさせて首を傾げる。

知つてゐるかと訪ね十年前に突然幹部全員が殺害されると言う事件が起つて組織は自然消滅したと言つておいて200年以上前に壊滅状態に陥つてゐるとは、はつきり言つて矛盾している。

壊滅状態に陥っているなら組織としてはもう終わっていると考えられるし、そもそも話に出す理由が無い。

「まあ、無理も無いね。まず200年以上前に壊滅状態に陥っている理由はルパン三世を敵に回した結果叩き潰されたと言うのが現状さ・・・まあそれ以外にも勝手にトップ3同士で潰し合つて、世界を滅ぼそうとする始末だからね」

「と言うと?」

「スリーメイソンのN.O. 3がアメリカ合衆国やソビエト社会主義共和国連邦の核兵器プログラムをハッキングして世界中に発射しようとしたのさ」

「・・・は?」

殻木はあまりの事の重大性に絶句する。

もしこれが本当ならば今までのありとあらゆる国際犯罪が子供の悪戯程度になつてしまふし、死者数は天文学的な数になるであろうからだ。

「そんなに驚く事かい? ルパンと絡んでいるとこれと同じかこれ以上ヤバイ事件ほぼ高確率で巻き込まれてしまうから印象低いんだよなあ」

がらき 殻木は再び絶句したのだが、A.F.O.はそれに気付かずに昔を懐かしみながら話を続ける。

「当時僕は自由の女神像の内部でアメリカ合衆国政府に正式に調査をして欲しいと依頼

されて調査を行つていたんだ・・・ああ、何故アメリカ政府から依頼が来るのかというとね中央情報局<sup>ちゅうおうじょうほうきょく</sup>通称CIA<sup>シーアイエー</sup>から自由の女神像内部にスリーメイソン関連の宝が隠されている疑惑があるから調査してほしいと言わされたからなんだ

「そ、それはどう言う内容での依頼なんじゃ?」

話のスケールに置いてけばりになりそうになりながら、殼木<sup>がらき</sup>は質問する・・・内心個性が無い時代にこれだけの事がポンポン起ころなら今の方が天国なんじゃねと考えている。

「それはねスリーメイソンがニューウイルスと言う史上最悪のコンピューターウイルスを開発したと情報を掴んでね。それを制御するのに必要な物が自由の女神像に隠されているから調査して欲しいと頼まれたんだ」

「そのニューウイルスとは何じゃ・・・と言うか当時は世界的な大組織だったのじやろう? 何故そんな物が必要になつたのじや?」

「確かにスリーメイソンは当時絶大な力を持つ古い組織だが、情報化技術の発達により衰退すると予測し、これをコントロールするウイルスを開発したのさ」

「ここでA<sup>オール</sup>-F<sup>フォーワン</sup>-O<sup>ワン</sup>は一旦言葉を切り、少し考えた様子を見せながら話を続ける。

「そのニューウイルスはその名に恥じない性能で、全世界のあらゆるコンピュータ上のデータを、使用者の望むままに改竄・消去できる優れ物なのさ。実際、アメリカとソ連

の核施設を一瞬にしてハツキングして核ミサイルの発射準備を完了させているくらいだからね。相当ヤバイ物だつて事は間違いない」

これを聞いてドクター殼木はそんな物があつたら自分は何に使えるのだろうかと自分の世界に入りかけて A F O オール・フォー・ワン がニヤニヤしているのを目撃し咳払いしてから質問する（尚考え付くニューウイルスの利用方法が全て A F O オール・フォー・ワン の為だつた模様）。

「何故先生はそんな事件に巻き込まれたんじや？ 先生の身体能力なら即トンズラ出来ただろうに」

「まあそりなんだけね。ルパンがニューウイルスの起動に必要なスーパーエッジと言うアメフトボール程の大きさを誇る巨大なタマゴ状の形をした世界最大のダイヤモンドを隠し場所である自由の女神像みねごと盗んじやってね」

「はい？」

「バカデカイ風船で女神像ごとお空への旅と洒落込んじやってね、そのままルパンの口八丁に乗せられてスリーメイソンとやり合う羽になつたんだ・・・ そうそう C I A シーアイエー が探している物もこのスーパー・エッジだつたんだよね。ニューウイルスが破壊されたならどうでも良いつて言つてたから峰不二子ふじこにあげたけど」

「・・・」

さつきから話についてこれないと言うのが殼木の本心だつた。

個性がない時代にどうやつて自由の女神像程の巨大な建造物を浮かせられるのか…  
今の状態を簡単に説明すると思考停止状態である。

このままでは話な続かないと思つた殻木は思考停止状態から必死に今喋れる話題を必死に探し、何故 A·F·O<sup>オール・フォー・ワン</sup>がスリーメイソンと言うかなり昔の組織を話題に出したのが気になった。

「…そう言えば何故今になつてそのスリーメイソンとやらが出て来たんじや？」  
「忍び込んだからさ、連中のアジト跡地にね」

「さてつと」

そう言いながら白髪の女性——A·F·O<sup>オール・フォー・ワン</sup>の並列存在はスリーメイソン基地跡地に潜

入した。

「マモー ルパン三世初の映画であるルパンV.S複製人間<sup>クローン</sup>での敵であり、クローンとは言え唯一ルパン三世を死に至らしめた強敵。

表向きは世界一の大富豪「ハワード・ロックウッド」として、鉄鉱、造船、運輸、報道の多国籍企業によつて世界の富の3分の1を支配していた…その実態はクローン技術によつて不老不死を実現し、己自身を生み出して育むことで1万年を生き抜き、歴史を影から動かしてきたと自称する天才科学者。

容姿は子供のような低い頭身、薄灰色の肌、カールを巻いた頭髪と人間離れした不気味な姿が特徴。

念動力等特殊な力を使用することが可能で、拳銃も使用出来る。

性格は極めて傲慢かつ独善的で、自身を「預言者」「神」と言つて憚らず、例え相手が大国の大統領であろうと尊大に振る舞い、加えて優れたものや美しいものなど自分が選んだ者のみ生きていれば良いという強い選民思想の持ち主。か・・・前スリーメイソンの基地に潜入した時 ルパン三世 バイバイ・リバティー・危機一発！での出来事。にスリーメイソンがフリーメイソンから独立した理由がマモーと接触し、様々な援助があつたからだと知つたのは懐かしいけども・・・何故今になつて僕が生まれる前 今作でのA F Oの生まれ年は1960年。に死んだ悪党の名前が今になつて出てくるのかね』

A オール・フォーワン  
F オール・フォーワン  
O インターボール  
愚痴をいながら I C P O や C I A 、 M I 6 等の警備を搔い潜りながら先へと進む

こんなに警備が厳重な理由はかつてルパン三世と対峙したロンバッハ博士 死の翼アルバトロスに登場する敵。航空博物館「ロンバッハ航空ミュージアム」の所有者。

裏の顔は死の商人で、超小型の原子力爆弾を開発し、機内に原爆プラントを備える超大型飛行艇アルバトロス号に載せて闇ルートで世界中に販売しようとするが、その原爆

の発火プラグを不二子ふじこが盗み出したのがきつかけでルパン達と対決する事になる。が作り出した超小型の原子力爆弾がスリーメイソン基地跡地で発見されたからである。幸い発火プラグは抜かれており、爆発の心配は無かつたが誰がどの様な目的でそれを設置したか不明な為、各政府は暗黙の了解の元嚴重体制を敷いているという訳である。

・・・何故オール・フォー・ワン A·F·Oがこんな所に潜入捜査しているのかと言うと安針塚財閥あんしんづかざいばつ セラエノ・コレクションクトウルフ神話TRPGリプレイ及びその続編に登場する日本最後の財閥。経由で50年前に手に入れたシルバーマン　　バイバイ・リバティー・危機一発！に登場する秘密結社スリーメイソンの総帥。

バイバイ・リバティー・危機一発！ではNo. 3に射殺されているが、今作では射殺されたのは彼の影武者で本人は存命だつたと言う設定。が所有していた地図とマモーが残した科学的遺物の研究を個人的興味からに一ヶ月程前にセラエノ・コレクション安針塚財閥あんしんづかざいばつが運営しているアーティファクト收集機關であり第二次世界大戦前から存在している事が確認されている。

このセラエノ・コレクションの設立を安針塚財閥に進言し、今現在『セラエノ・コレクション』の最高責任者を努めているのはラバン・シユリリュズベリイ博士で彼の死が確認されるまで彼が最高指導者を続投するのが安針塚財閥の意向である。に依頼し、その結果今現在の場所にマモーとシルバーマンが共同で作り上げた基地であると言う研究

結果が出たのでほつとく訳にも行かず・・・と言つた状況だ。

因みにセラエノ・コレクションが保有しているアーティファクト 人類の常識からかけ離れた物品全てを指す用語で、明らかに科学技術で作られたと分かる物でも現代科学で解明できない物全てアーティファクトに分類される。にもマモー関連の物品が今回の件で30点以上見つかっており、マモーが関わっているこの件にAオール Fフォ O・ワンは内心途轍もなく警戒している。

### 閑話休題

「さて、と。侵入には成功したね」

色々と考え事をしながら表の警戒を掻い潜り基地内部に侵入し、あたり一面を眺めながら奥に進んでいく。

基地内部にはレーザー発射装置がそこら中に設置されていおり、その先も毒ガス発射装置やブービートラップ等数多くの罠とおまけとばかりに脳波センサー等様々な罠が設置されていた。

全ての罠を苦労して掻い潜り、辿り着いた部屋は何も無い小部屋だった。

「何かある様に見せ掛けといて小部屋には何も無い。正に骨折り損のくたびれ儲け・・・  
最近の敵チンビラ達ならそう思うだろうねー」

そう言いながら徐ろに壁を軽く叩き少し軽い音が出た所を指で小突くとカードス

キヤナーか付いたパネルが出てきた。

「これは用意したカードでつと」

カードをスキヤン後上に新たな2つのスキヤナーが出てきたので観察すると、どうやら網膜と指紋をスキヤンするらしい。

「結構前に仕掛けた僕のデータがまだ生きているなら行けると思うけど……良し、行けた」

空いた扉からひんやりした空気がした出てくるが……30年前が最後に開いたいしてはやけに流れてくる空気が少ない様に感じる。

「扉を開けた跡をよく見ると案外最近に開けた痕跡があるね、こりや……およそ1、2時間前つてどこかな」

それと言いながら持っている拳銃等の武器の確認をしながら奥へ進む A F O。  
暫く先へ進むと幾何学的な扉があり、前に近づくと自動的に扉が開く。

そこには――

「なんだ、これ」

――基地の内部か疑いたくなる様な大きな空間が広がっていた。

絵画を模様した部屋や機械だらけの部屋等その他にも様々な部屋が存在していた。

その中でも A F O<sup>オール・フォー・ワン</sup>が興味を持ったのが操作パネルと大きな画面設置してある部屋

だつた。

「こんなに厳重に隠されている場所にある情報はどれほどの物かな？」

ククククと怪しく笑いながら A·F·O はパネルを操作し、中にあるスリーメイソンの機密データや他基地の場所、ナチスドイツの隠し財産の在処等色々な情報を閲覧したが A·F·O の目的はそれでは無い。

マモーとシルバーマンが共同で作り上げ、更に 200 年以上の月日を掛け成熟された技術もしくは物品を完膚無きまでに叩き潰しあわよくば手に入れるのが今回の目的だ。

因みに A·F·O は個性が使えない状態でも何とか出来る様に愛用拳銃 D·E·S·E·R·T E·A·G·L·E · 50 A·E と同型の物 尚 A·F·O が所有する D·E·S·E·R·T E·A·G·L·E · 50 A·E は自ら手を加えた特別製で 200 年以上使つているのにも関わらずまだ現役である。を闇ルートで入手し、それ以外にも仕込みナイフや警棒に手榴弾等臨戦態勢装備でこの基地に潜入している。

### 閑話休題

A·F·O が探している物は果たしてあつた。

「死者を蘇生する方法？ 何じやそりや？」

題名だけでは意味がわからないので内容を確認してみるとイタリアの夢とマモーのクローン技術そして境界記録帶 ゴーストライナー 別名サーヴァント。

人類史に英雄として記録された人物または存在が死後に魔術師が聖杯の莫大な魔力によつて使い魔として現世に召喚した存在。

本体は英靈の座にありそれ自体を呼び出す事は出来ない為、クラスと言う容れ物に英靈の座に存在する情報の一側面を切り取つたコピーがサーヴァント。

尚境界記録帶ゴーストライナーと呼称する理由は魔術師が自分の手で作った使い魔ではなく、人類史そのものから呼び出す使い魔の為『かつて記録された現象を呼び出す』と言う意味。等3つの技術を同時に使い過去死んだ存在そのものを蘇らせると言うとんでもない技術がそこに記録されていた。

「思つていたよりもヤバいのが出てきたな。さてとこれを僕の基地に送信は出来無いのか・・・いや、外部に情報を送れない様に後からされたかな?この状態だと。――それじゃあ出できたらどうだい?」

そう言いながら振り向き際に懐からDESERTデザート EAGLEイーグル・50AEを抜き、構た。

しかし、声に返答する者は居ないがそれでもA·F·Oは発言を続ける。

「この死者蘇生を見る前に確認した情報だけど此処つて対A·F·O、つまりは僕対策が施されているんだろう?道理でここに入つてから個性が使えない 基地に潜入した段階で個性が使えなくなつっていた。と思ったら、なるほどね。・・・因みに名付けて個

性無効化装置は常時発動では無くて誰が直接操作しなければ発動しないらしいでね」

「ここで A<sup>オール</sup> F<sup>フォーワン</sup> O<sup>ワン</sup> は懐から煙草を取り出しライターで火を付けようとしてライターを探すが、見つからない。

「つまり何者が僕が来る前に潜入りし、死者蘇生の情報を外部に流した後にもう外部に情報を探す事が出来無い様に何者が細工し、個性無効化装置を起動させたと言う事だろうね」

「言葉を一旦区切りながら煙草を不機嫌そうに上下にユラユラ揺らし、不貞腐れながら話しが続ける。

「そう言えば最近おかしな奴が現れたそうで、そのおかしな奴は八卦白法乾手の使い手らしくね。おまけに生身で空を飛び、銃弾を避け、外法裏技にも通じる殺し屋で、更に抹消ヒーローイレイザーヘッドこと相澤消太の個性・抹消を食らっているのに指から炎を出して攻撃してきたらしいんだよね——と言う訳で出てきな魔術師と言われた男、白乾児<sup>バイカル</sup> 魔術師と言われた男に登場する敵で、愛用拳銃はベレッタ M 1934、愛車はメツサーシュミット KR 200。

暗黒街の魔術師として恐れられている男。実在する酒と同じ名前である事からルパン三世に「酔っぱらつちまいそうな名前」と言われる。容貌は前髪が顔の右半分を隠すほどに伸びている。服装は白いスーツとモスグリー

ンのシャツ、紫のネクタイを着こなす。

超硬質液体ちようこうしつえきたいの製法を記してあるマイクロフィルムを奪つた峰不二子みねふじこを襲撃し、マイクロフィルムがルパン三世の手に渡つた為、標的をルパン三世に変更し決闘を繰り広げ一度はルパン三世と次元大介じげんだいすけを追い詰めた。

しかしフィルムに記された超硬質液体ちようこうしつえきたいの製法を解読されてルパン三世と次元大介じげんだいすけが超硬質液体ちようこうしつえきたいを使用して不死身の体を得てしまい追い詰められる。

最後には液体の効き目が切れて火炎放射器で焼かれ、自らのアジト付近にあるエンマの滝の滝壺に転落して死亡したと思われたが・・・さんよ」

その呼び掛けに答える様に本来風が吹かない密室であるこの部屋に風が吹き、そこから男――白乾児しらかんじが姿を表した。

「ククク、全部お見通しと言う訳カリキユール、それともA-F-Oオール・フォー・ワンと呼ぶべきか?」

「どっちでもいいよ白乾児。久しぶり、いや始めてと言うべきだね。何せ本物はもう死んでいるし」

「フフフ、ではこの俺は誰だと言うのかね?」

白乾児しらかんじは発言とは裏腹に楽しそうに腕を組みながらA-F-Oオール・フォー・ワンに続きを促す。この問い合わせる前にA-F-Oオール・フォー・ワンは加えている煙草を上下に揺らし、またライターを探すがどうやら忘れてしまつたらしい。

「・・・この個性：並列存在 今此処に居る A F O がこれに当たる。

個性：並列存在の効果は完全に自分の意識を分割させた存在を創り出すと言うもので、強さも本体と同じ強さである。は持ち物は反映されない癖に服装は完璧だからこそは不便だ・・・まあそれ以外はチートだし良いか」

A F O <sup>オール・フォー・ワン</sup> がライターを探していると徐に白乾児 <sup>バイカル</sup> が人差し指を向けた。

「ほれ」

すると白乾児 <sup>バイカル</sup> が A F O <sup>オール・フォー・ワン</sup> に向けた指から炎が噴き出し、煙草に火を付けた。

「ああ悪いね」

一言礼言つた後に勢い良く息を吸い、吸つた煙を勢い良く吐き出し終えてから話を続ける。

「それは簡単さ。かつてマモーがルパン三世のクローン ルパン V S 複製人間 <sup>クローン</sup> でマモーがルパン三世のクローンを作り、それが処刑されると言う出来事が起こった事がある。その複製人間の精度は厳密かつ厳正な解剖の結果の末にルパン三世本人であると断定される程である。を作ったのと同じく君も白乾児 <sup>バイカル</sup> のクローンだと思うよ・・・尤もルパンとは違つて本人合意の上でフリーメイソン 今作では過去フリーメイソン幹部を助けた縁でエンマの滝の滝壺に転落した時にフリーメイソンに救われ、以後フリーメイソン直属の用心棒になつたと言う設定。によつて作られたと僕は見ているけど、どうだい

?」

「ククク、正解だ」

白乾児  
[バイカル]

「因みに超硬質液体  
[ちようこうしつえきたい] 白乾児  
[バイカル] が製造した薬品。

特殊な皮を作る薬品でその効果は弾丸はおろか、大砲の弾をも跳ね返す程の硬度を得る事が出来る。

この薬を物の表面に塗ることで高度な耐熱・防弾効果を得る。ただし薬の効力期間は極めて短い。は持つていなかい? イレイザーヘッドの個性・抹消が効果が無いと見た警官隊の銃撃からトンズラしたらしいけど、超硬質液体あつたら逃げずに済んだと思っただけだなあ

この指摘に白乾児は不愉快そうに眉をひそめて、不機嫌そうに舌打ちをし、A F Oを睨めつける。

「全ては貴様のせいだぞ A F O」

「…フリー・メイソンに喧嘩を売った覚えも無いし、小競り合いをした覚えも無いよ?」

「そう言う意味では無い、話は最後まで聞け…相変わらずだな、お前は」

ハナーとため息をつく白乾児。  
[ちようこうしつえきたい]

「フリー・メイソンの協力の下超硬質液体をグレードアップしようとした時に

安針塚財閥あんしんすかざいばつがマモーが遺したアーティファクトの研究を終え、それを元にお前が動き出したと情報を得たから……つまりは間接的にお前のせいで超硬質液体ちょうこうしつえきたいを作り、更にグレートアップされると言う話も無くなつと言つてやる訳だ』

「……この状況じゃ僕にとつては有り難い事だね」

「だろうな」

真顔でAFOオールフォーワンがそう言えば、白乾児オール・フォーウンは愉快そうに笑う。

「しかし記憶はパツクアップでも取つてあつたとして、ここに来た理由は何だい？」

AFOオールフォーワンがそう問えば白乾児オール・フォーウンはつまらなそうに「お前と同じだ」と答える。

「スリーメイソンが何をしていたかが未知数かつ危険だつたから、潜入したと言う事だ……こんな情報を持つて——」

「——そうじや無いだろう？」

白乾児オール・フォーウンの発言を遮り、AFOオール・フォーウンが低い声でその発言を否定する。

「本当はもつと早く知つていたけれど、僕が動くまで待つていたと言つことだろ？」

「……」

「その沈黙は肯定か？それとも否定か？……まあ、個性・遺伝子操作 遺伝子操作に長けた特殊能力を持つ個性で有機物や無機物等多くの遺伝子を組み換え別の物体に変化させる以外にも、有機物を遺伝子組み換えをして姿形を自由自在に変化させる以外に

も、個性因子同士を混ぜ合わせて、全く新しい個性に組み替える事が出来るが……を  
フリー・メイソンが作り出したんだ、新たな個性を作り出す事が出来るなら個性因子のク  
ローンを作り出す事は可能だろう?——だつてこの個性：遺伝子操作は個性でない物を  
個性にする事が出来るし、血液から個性因子を複製する事も出来るからね』

——パチパチパチ

「クク、アーハツハハハ!!」

この緊張感包まれた場に似合わぬ拍手と笑い声が響き渡る。

「ブラボー、ブラボー……流石は魔王と言われしAFO。正解だよ、ああ正解だ。我々  
フリー・メイソンの目的は個性：AFOを手に入れる事だ」

白乾兎の発言に何か反応を示すことなく残り少なくなつた煙草を勢いよく吸い込み、  
煙を吐き出す。

「僕の個性であるAFOを僕の血液を元に複製して手に入れると言つたところかな  
?……確かに並列存在の死殻でも個性因子を取り出す事は可能だし、個性：遺伝子操  
作なんて言う物を作り出すくらいだ。今更驚かないね」

AFOは吸い終えた煙草の吸殻を床に捨てて踏み潰し、信念や誇りが籠もつた強い  
眼差しを白乾兎に向ける。

「例えスキマ妖怪の、先生の目的が僕だつたとしても——それでも僕の答えは変わらな

い。僕は最後のその時まで理想の僕で居たいんだよ」

「本当に変わらんな、お前は」

白乾児は笑いながら腕を解き、構える。

「結果は変えられないと言ふに・・・理想を追い求めるか」

白乾児に合わせて A F O も構えて、ふてぶてしく笑う。

「じゃなきや魔王になりたいと思はないし、ここまで長生きしないよ」

その答えに白乾児は愉快そうに笑つた後に懐から百円玉を取り出すと、指で弾いた。

弾かれた百円玉はクルクル回転しながら上昇し、一定の高さまで上がった後重力に従つて落下を始め地面に落下した。

百円玉が落下して音を立てると同時に二人が動き、両者がぶつかり合つた。

白乾児が放つた顔面を狙つた右フックを A F O が首を傾ける事で避け、右足を使つたハイキックで白乾児の頭部を狙うも腕で防がれてしまう。

A F O はそれを読んでいたかの如く後方に大きく飛びながら予め抜いていた D E S E R T E A G L E · 5 0 A E を構え、白乾児に向けて弾丸を D E S E R T E A G L E · 5 0 A E から発砲した。

「やはり俺を殺す気の様だな、 A F O 」

A F O が放つた弾丸を横に飛ぶ事で避け、自分も愛銃であるベレッタ M 1934 から A F O 目掛けて二回発砲する。

一発目は A F O の頭部目掛けて、2 発目は胴体に向かつて放たれた。

一発目は躊躇首を傾ける事で避けるも頬を掠め、二発目は横にずれる事で避ける。

「殺す気なのはお互い様だろう?」

そう言いながら頬から唇に流れてくる血を舐め取りながら愉快そうに発言する。

「全く本当に変わらんな、お前は・・・ところで今此処に居るお前は個性：並列存在の分離体なのだろう? A F O とは違う存在で居たいとか思わんのか?」

ベレッタ M 1934 を構えながらまるで世間話をしているかの様に問いかける  
白乾児。バイカル

白乾児の問いに「いや、考えた事は無いね」と答える A F O。

続けて。

「まあやうと思えば成り代わる事も出来るし、分離体を新たな本体にする事も出来るけど・・・正直どうでも良いね」

A F O の発言に何か思う事でもあつたのか、白乾児は一瞬思案した後に口角を吊り上げた。

「ほう、哲学か」

「そうでも無いけど……君が白乾児<sup>バイカル</sup>のクローンなのにフリーメイソンに従つてているのと同じだと言えば分かりやすいだろう?」

そう返された白乾児<sup>バイカル</sup>は少し驚いた表情を浮かべた後に、面白そうに笑つた。

「して、その後は?」

ドクターは気になつたのかソワソワしながらA<sup>オール・フォー・ワン</sup> F Oに先を促す。

「フフ、楽しみは取つておく物さ」と不敵に笑うのであつた。